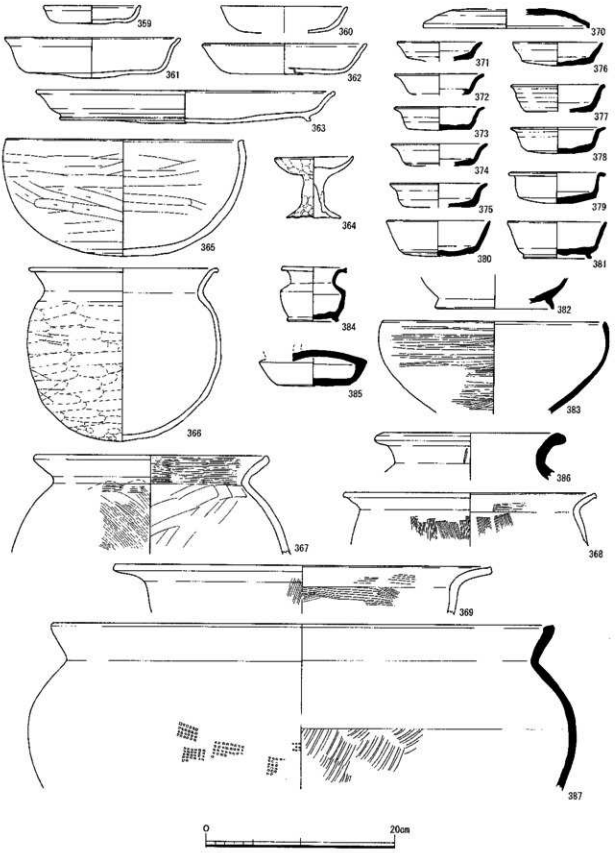
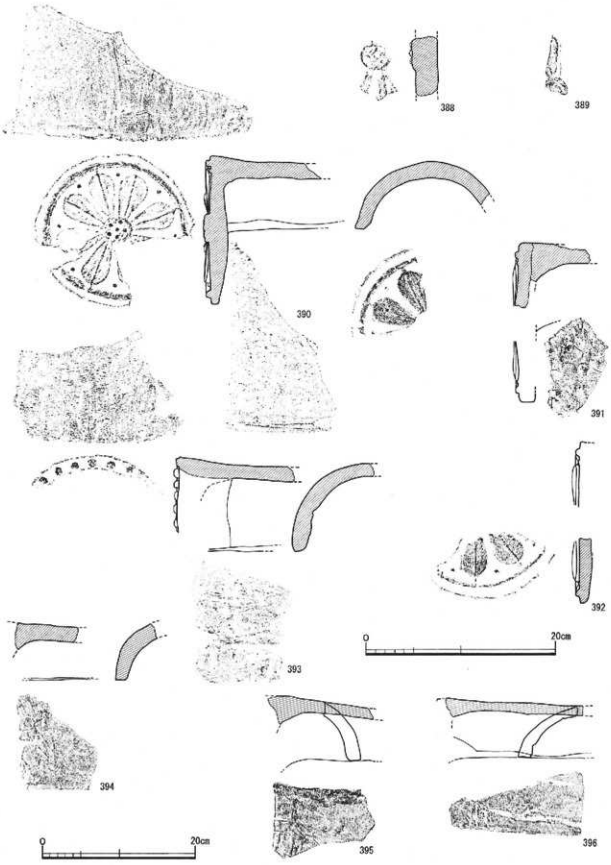
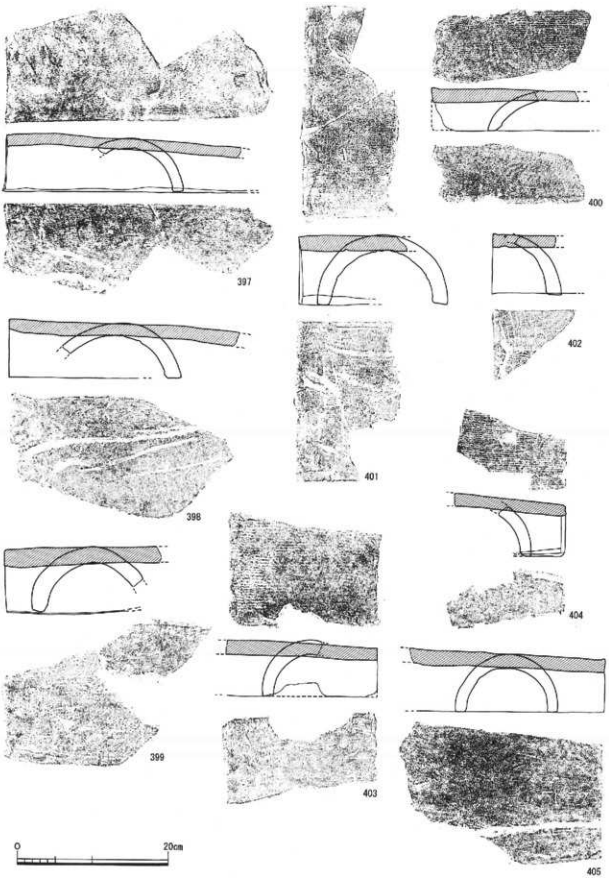


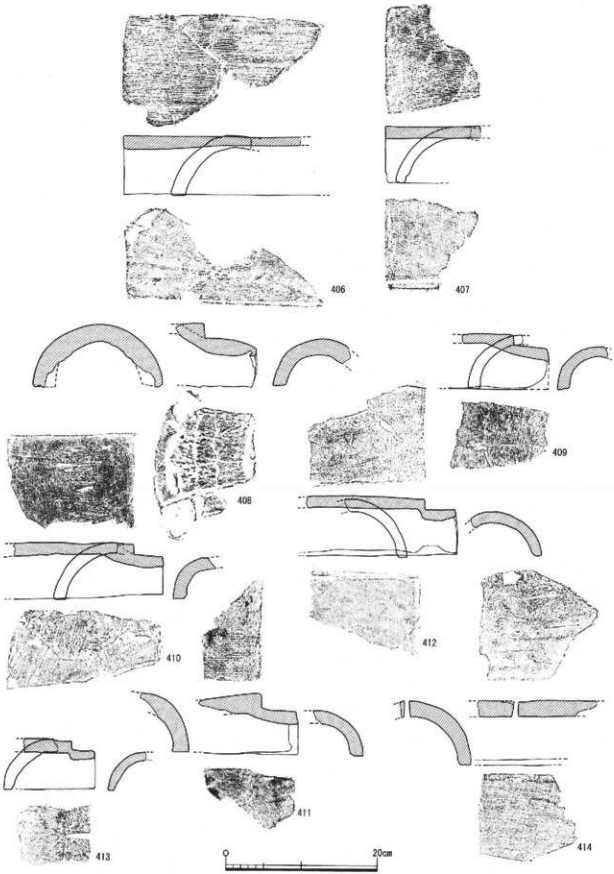
第59図　整地２出土遺物



第60図　整地２出土軒丸瓦

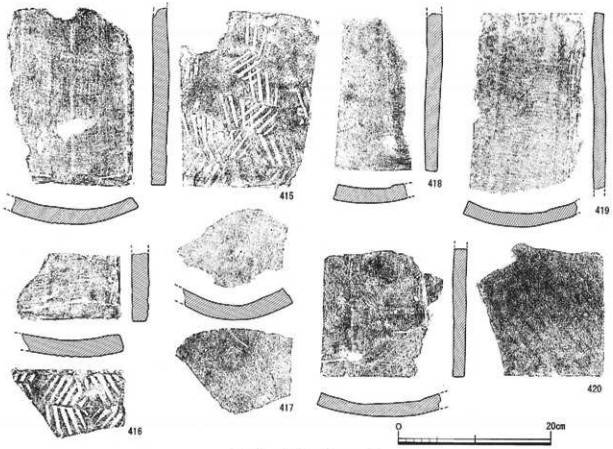


第61図　整地２出土丸瓦①



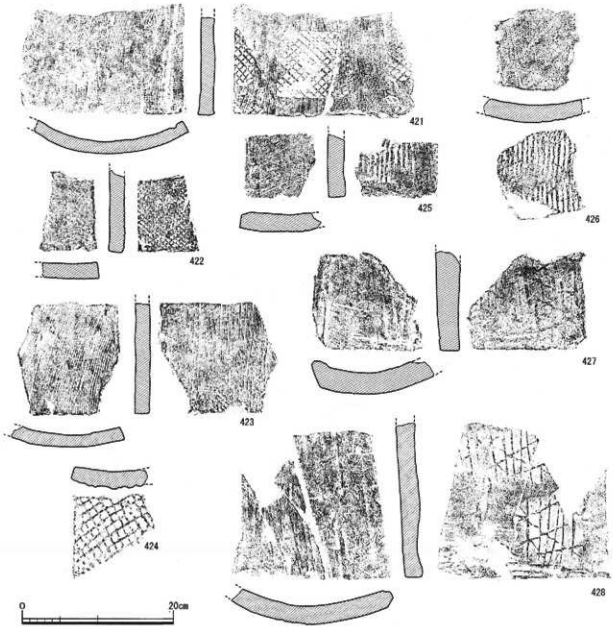
第62図　整地２出土丸瓦②

型式であろう。396の凹面には布の綴じ目痕の溝が残る。394・395は凹面側端部ナデ、396は側端面の凹面側角を面取りする。側端面は396が分割破面のまま、394がケズリ、395はナデを加える。397～414は丸瓦である。397～402は広端部、403～405はⅠa類狭端部である。397は黄褐灰色、胎土やや粗、焼成やや不良。凹面には布の綴じ目痕の溝が残り、横方向の粘土接合痕が見られる。側端面の凹面側角を面取りする。398・399は灰色～灰青色を呈し、胎土やや粗で焼成良好で硬い。凹面広端部ナデ、側端部ケズリである。398は凹面に布の綴じ目痕の溝が残り、側端面は分割破面が残る。399の側端面は２面に削る。400・404は灰色を呈し、胎土密で焼成やや不良。凸面は18本/５cmの縄目タタキ後ナデであるが、タタキはほとんど残る。凹面狭端部・側端部を削る。同一個体と思われる。401は灰褐色、胎土密、焼成良好。凸面・凹面の広端部ケズリ、凹面側端部ケズリ。402は灰色、胎土密、焼成良好で硬い。凸面はヨコナデで側端部ケズリ。凹面は広端部ケズリ。側端面の凹面側角を面取りする。403は灰色、胎土やや粗、焼成良好。凹面狭端部８cmを削る。405は灰色、胎土密、焼成やや不良。凸面ヨコナデ。凹面には布の綴じ目痕の溝が残り、側端部ケズリ。406・407はⅠc類狭端部である。淡褐色で、胎土密、焼成良好。凹面側端部に分割界線が認められ、406の凹面には布の綴じ目痕の溝が残る。407は凹面側端部を削る。408はⅡa類狭端部である。409～411はⅡe類狭端部である。409が焼成やや不良。412・413はⅡd類の狭端部である。焼成良好で硬い。414は釘穴を有する。灰色で、胎土やや粗、焼成良好で硬い。凸面のナデは丁寧で縄目は見えない。凹面側端部ケズリ。側端面は分割破面を残す。415～446は平瓦である。415・416はⅡ類である。415は褐灰色で、凹面が焼成不良、縁辺が硬く焼ける。凹

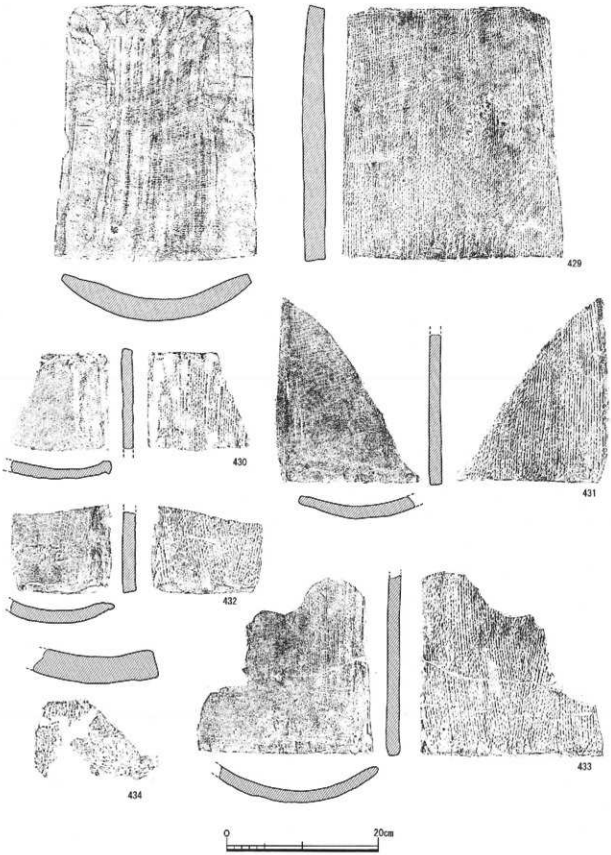


第63図　整地２出土平瓦①

面の広端部１～２㎝を削り、凸面の広端部角を面取りする。416は淡褐色を呈し、焼成やや不良である。凹面広端部に布端の痕跡と思われる溝が見られる。417～420はⅠ類である。凸面のナデは417・420がナナメナデ、418・419はタテナデである。418は凹面広端部を削る。417～419の側面は分割破面を残し、420は削る。420は凹面に模骨痕が見られ、広端部約３㎝をナデる。417・419はⅡ類の特徴をもつものでⅡ類の可能性もある。421～423はⅢb類である。421は灰黄色を呈し、凹面は分割界線が見られ、側端角を面取りする。422は灰褐色を呈し、凹面広端部ナデ、凸面広端部はヨコハケ状のケズリが見られる。広端面は未調整である。423は黒褐色で、２㎜以下の砂粒を含む。凹面は斜め方向の糸切り痕が見られ、側端部を削る。424は褐灰色を呈するⅢa類である。425・426はⅣ類で、灰黄色・褐色を呈する。427・428はⅤ類である。427は褐灰色で、凹面は斜め方向の糸切り痕が見られ、側端には成形台の角の痕跡と思われる段が認められる。凹

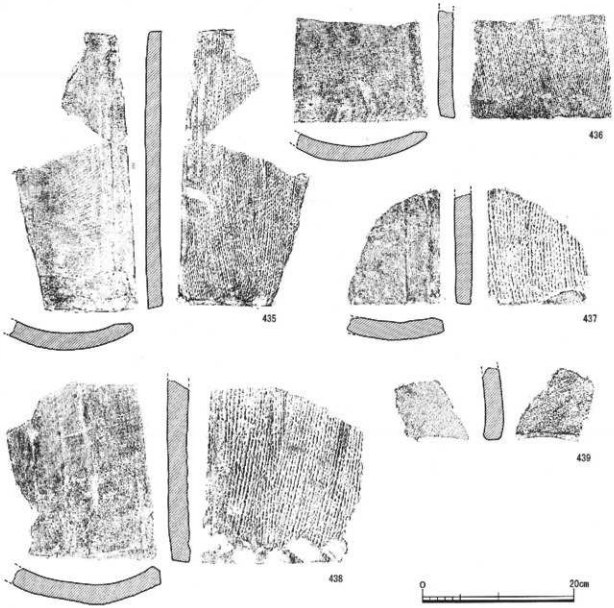


第64図　整地２出土平瓦②



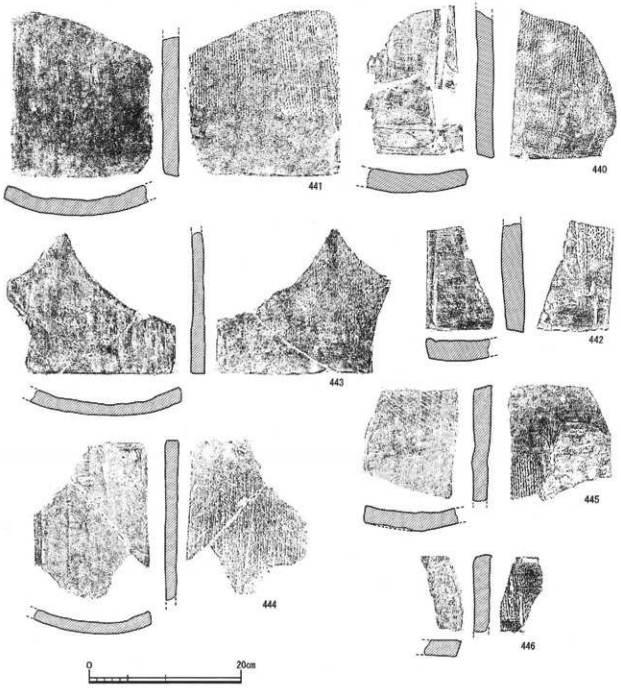
第65図　整地２出土平瓦③

面側端部角は面取りする。428は淡灰褐色でタタキの凸線は427よりやや細い。凹・凸面広端部にヨコハケ状のケズリが見られるが、Ⅲb類の422に共通する。凹面に縦方向のヘラナデを加え、側端面は2面に削る。429～434はⅥb類、435・436はⅥa類である。429は唯一全容の知れる資料である。法量は長辺33.8cm・広端部幅26.1cm・狭端部幅23.5cmを測る。灰色を呈し、胎土密で3㎜以下の砂粒を含み焼成良好。凹・凸両面に横方向の糸切り痕が認められる。凹面は広端・狭端部4㎝、側端部5㎝と幅広に削り、中央はタテナデを加え布目をほぼ消している。430～433・435・436は全体に薄作りで、凹面側端部は削るためさらに薄くなる特徴がある。430・435は灰色、431・433・436は灰褐色で焼成やや不良、432は褐色で焼成良好で硬い。434は淡褐色を呈し、胎土密で2㎜以下の砂粒を含み焼成良好。厚さ3.5cm以上を測り非常に分厚い。435は長辺36.8cmを測る。437・438はⅥc類である。437は灰褐色を呈し、凸面広端部にはみ出した粘土をナデ付けている。438は灰色を呈し、凸面広端部には製作台からはずす際に付いた指痕が認められる。439は



第66図　整地2出土平瓦④

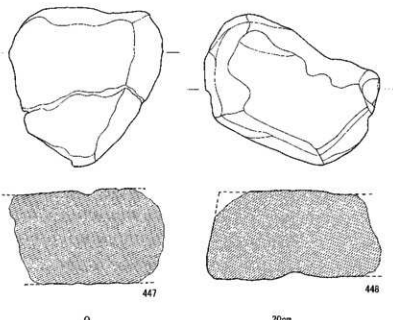
Ⅵa類であるが、側縁辺の輪郭が弧状を成すもので器種不明である。灰色を呈し、胎土やや粗で3㎜以下の砂粒を含み、焼成良好で硬い。弧状の側端面は凸面側角を1面に、凹面側角を2面に面取りする。440～446はⅦb類である。狭端部の破片である445・446は、側端部狭端側を斜めに切り取っている。440・442・446は灰色、445は淡灰黄色を呈し焼成良好、441・443・444は褐色で焼成やや不良である。石材は凝灰岩・花崗岩があり、凝灰岩2点(447・448)を図化した。共に厚さ10cm弱を測るもので、448は端面が遺存していると思われるが、平面形は不明である。



第67図　整地2出土平瓦⑤

整地１

部分的な確認であるが、ＮＲ301を埋め立てている。範囲は断面において東西約20.0ｍが確認でき、座標値で見ると西側がＹ=-37.228ライン付近、東側がＹ=-37.208ライン付近となる。東側は平面でも確認している。埋土は砂混じりシルト～シルト質粘土で、肩の傾斜に沿った堆積を呈し、層厚は最大で約0.8ｍを測る（第54図32～46層）。遺物は出土していない。

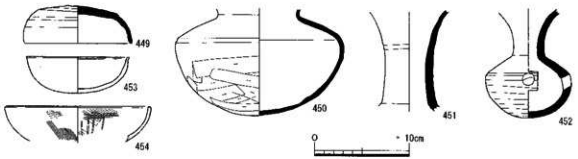


第68図　整地２出土石材

なお整地１・整地２・基壇という一連の整地作業であるが、連続して行われたのかどうかは不明である。基壇版築層出土瓦と、整地２出土瓦を比較すると、基壇版築層からは軒丸瓦Ⅴ形式が出土しており、丸瓦Ⅰ類・平瓦Ⅲ～Ⅴ類が含まれないという特徴が認められる。これは整地２から基壇構築までの時期差を示唆するものかもしれない。

ＮＲ301

断面でのみの確認であるが、基壇下位に位置する南東－北西方向の流路である。幅は整地１の範囲である約20.0ｍで、深さは0.8ｍ以上を測る。流路の最終的な埋土は著しくグライ化した粘土～シルト層であり、この部分は幅約11.0ｍを測る（第54図54～59層）。この層相からみて整地１の際には流路としての機能はほとんど、あるいは完全に失っていたと推定される。この粘土～シルト層からは飛鳥時代頃までの土師器、須恵器の他、弥生土器が出土している。449～454を図化した。須恵器杯蓋(449)は天井部ヘラ切り未調整で、内面の中央に一方向のナデを加える。胎土はやや粗である。須恵器壺(450)は底体部が完存し、体部径18.0cmを測る。焼成ややや不良で表面は摩滅している。底部外面不定方向のヘラケズリである。須恵器壺(451)は頸部外面の半分と、反対側の内面に自然釉が掛かる。須恵器鉢(452)は体部径9.0cm・孔径1.2cmを測る。土師器杯(453)は口径10.8cm・器高3.8cmを測る。火を受けて全体に黒色を呈し、暗文は不明である。土師器高杯(454)



第69図　ＮＲ301出土遺物

はハケ調整で、杯部内面には放射状暗文を施す。なお、動物遺体として馬の下顎部(?)が出土している。

ＮＲ302

7－6Ｈ・Ｉ区で検出した北東－南西方向の流路である。平面及び南壁で確認したが、側溝部分の掘削しか実施していない。規模は幅約2.0m・深さ約0.7mを測る。北部は整地２の掘り込みにより削平されている。方向から見てＮＲ301に合流するものと思われ、底のレベルはＮＲ301より高い。埋土は３層から成り、上から2.5Y6/2灰黄色細粒砂混シルト、2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト、2.5Y5/1黄灰色シルト混粘土で、全体に斑鉄を含んでいる。流水状況は認められず、また中層はブロック状を呈することから、整地１の際にＮＲ301とともに埋められたものと考えられる。遺物は中層から土師器羽釜(455)１点の他、須恵器片が出土している。455は鍔以上が完存し、口径24.0cm・鍔径29.0cmを測る。口縁部が長いタイプで、飛鳥時代に比定される。

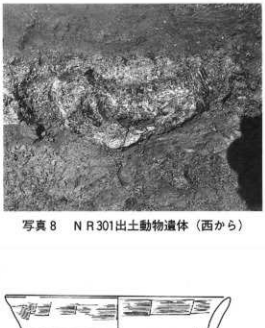
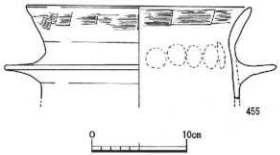


写真８　ＮＲ301出土動物遺体（西から）



第70図　ＮＲ302出土遺物

〈第４面〉

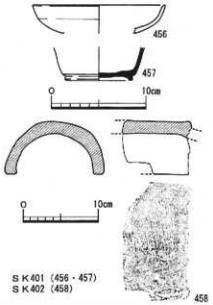
１区西部でのみ調査を実施した。その結果、T.P.+8.2～8.3mの第10A層上面で飛鳥時代～奈良時代頃の土坑４基(ＳＫ401～404)、溝２条(ＳＤ401・402)、ピット８個(ＳＰ401～408)を検出した。層位的には第３面のベースである第９層中で検出されたものが多く、これらは本来第３面の遺構であろう。

ＳＫ401

7－4Ｅ・Ｆ区で検出した土坑で、北は調査区外に続き詳細は不明である。検出部の平面形は弧状を成す。検出部で深さ約38cmを測り、埋土は３層から成る。奈良時代までの土師器、須恵器、平瓦が出土しており、土師器高杯(456)、須恵器杯身(457)を図化した。456は明褐色を呈するもので飛鳥時代に比定される。457は飛鳥～奈良時代に比定される。

ＳＫ402

7－4Ｅ区、ＳＫ401の南西部に近接して検出した。平面不定形で、規模は南北約3.6m・東西約1.2mを測る。断面逆台形に近く、深さ約37cmを測り、埋土は３層から成る。時期不明の土師器片、古墳時代後期の須恵器杯蓋の他、丸瓦・平瓦が出土しており、丸瓦(458)を図化した。458は丸瓦Ⅱ類で、

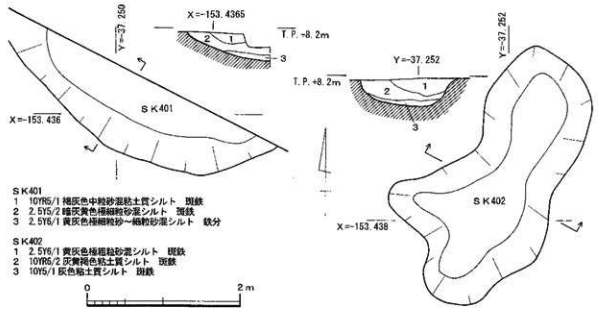


第71図　ＳＫ401・402出土遺物

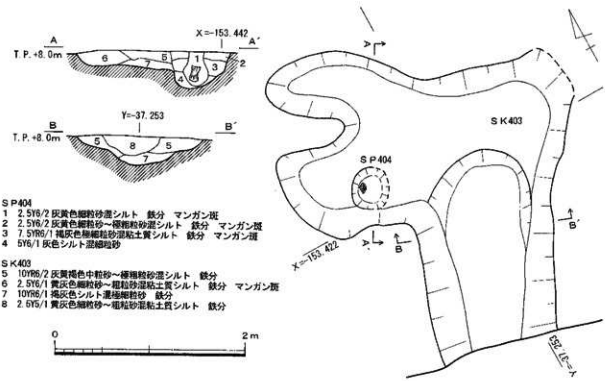
凹面には横方向の糸切り痕が残る。玉縁取り付け部の形状から見ておそらくⅡa類あるいはⅡb類であろう。

S K 403

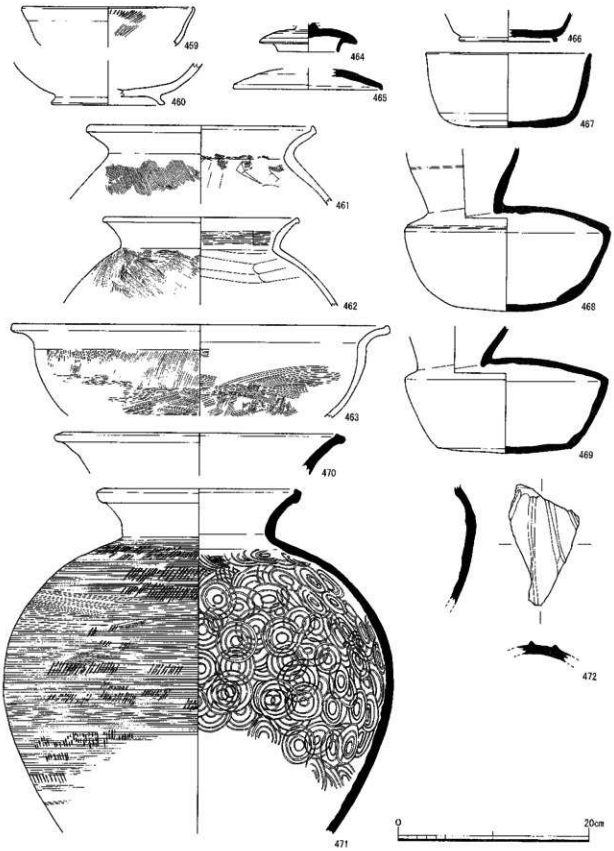
7－5 E区で検出した平面不定形の土坑で、南は調査区外に続いている。S P 404に切られ、また東部ではS D 401につながるが一連の遺構の可能性がある。規模は東西1.2～3.2m・南北3.5



第72図 S K 401・402平面・断面図

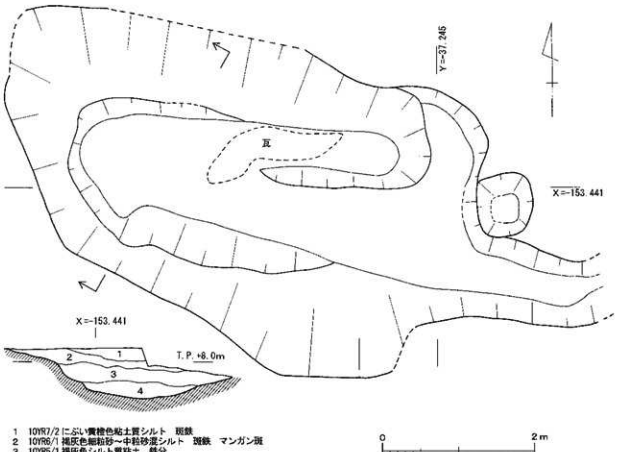


第73図 S K 403平面・断面図



第74図　ＳＫ403出土遺物

mを測る。断面形状は皿状～椀状を呈し、深さ最大31cmを測り、埋土は4層が確認できる。遺物は奈良時代初頭までの土師器、須恵器が多く出土しており、459～472を図化した。459は土師器杯身である。口径18.0cmを測り、口縁端部の巻き込みは小さく、内面に二段の放射状暗文を施す。460は土師器杯、あるいは鉢である。調整は不明。461・462は土師器甕、463は鍋である。461は体部内面ハケ後ナデ。462は口縁部内面ハケ後ナデ、体部内面ナデ。463は外面上半が煤け、底部内面が焦げる。464は須恵器壺蓋、465は杯蓋である。464は天井部径10.0cmを測り、焼成良好で、胎土は密であるが3㎜大の礫が散見される。つまみ端部が欠損している。465は口径15.6cmを測り、天井に自然釉が掛かる。466は須恵器杯身B、467は杯身Aで、口径17.4cm・器高7.8cmを測る。灰色で胎土は2㎜以下の砂粒を多く含み粗である。同一個体と思われる破片の復元では、もう少し口縁部が開く形態となる。468・469は須恵器平瓶である。共に口縁取り付け部が天井閉塞孔に及ばないタイプで、胎土はやや粗で焼成良好である。468は頸部・肩部に沈線を巡らせる。底部は提瓶体部の製作技法のように円盤で閉塞しており丸味がある。前半部外面に自然釉が掛かる。469は上面と底部内面に自然釉が掛かり、底体部外面には火襷が見られる。470・471は須恵器甕である。471の外面は平行タタキ後カキ目である。472は器種不明の須恵器で、外面には幅0.6cmの断面三角形の突帯による装飾が施される。褐色を呈し、外面には自然釉が掛かる。胎土は2㎜以下の砂粒を多く含み、焼成良好。提瓶の可能性がある。これらの土器は平城Ⅰを中心とした時期に比定される。

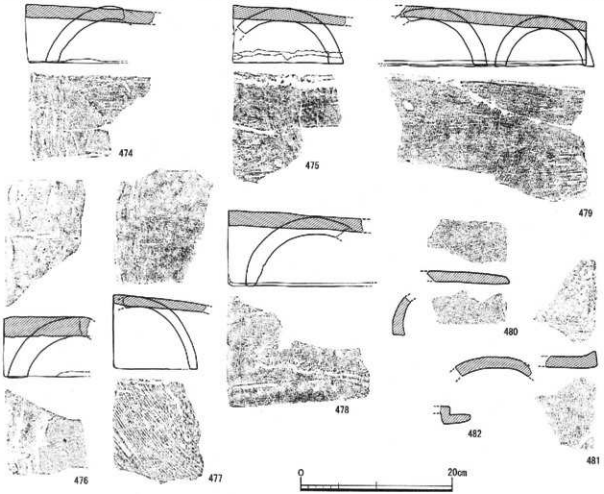


第75図　ＳＫ404平面・断面図

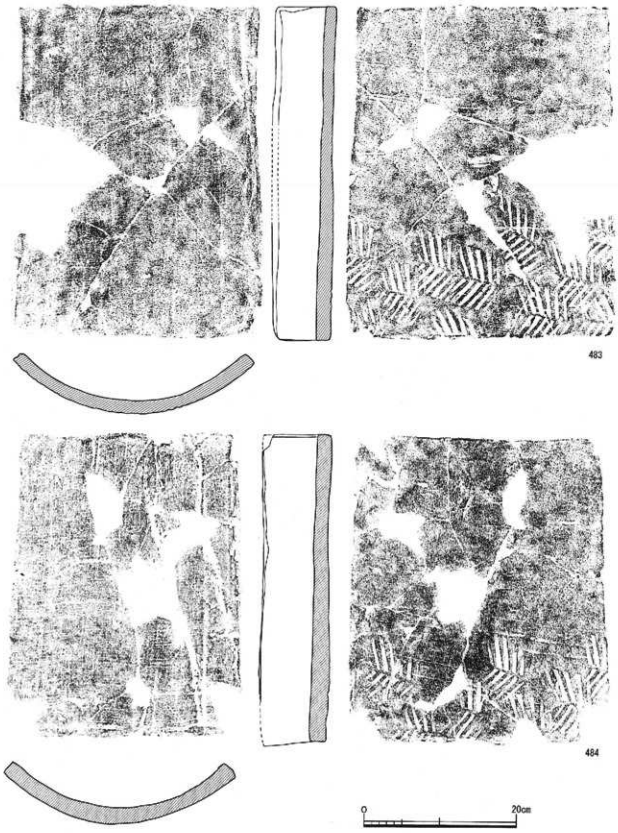
ＳＫ404

７－４・５Ｅ・Ｆ区で検出した東西に長い平面不定形な土坑で、東端は溝状になる。北部の一部は試掘坑により削平される他、東端は撹乱坑に削平される。規模は東西約8.5m・南北約4.0mを測る。断面形状は逆台形～椀形で、中央西で最深部となり湧水層に達しており、深さは最大65cmを測る。埋土は４層から成る。遺物は瓦が約60点出土しており、土器では６世紀代の須恵器杯身片の他、土師器、須恵器片が数点のみである。また花崗岩・砂岩塊が出土している。473～495を図化した。473は軒平瓦Ⅴ型式の瓦当小片である。意匠は不明。474～482は丸瓦で、474～478は広端部である。474は凹面広端から4.5cmに段が生じており、側端面は分割破面が残る。475・478は凹面に布の綴じ目痕の溝が残るが、475は側端部に位置していることから、分割界線の可能性がある。476は厚さ2.4cmを測り厚目である。477は厚さ1.0～1.3cmと薄目で、凹面に糸切り痕を明瞭に残す。474・475・477・478は凸面広端部端を削る。474・476・478・479は胎土や調整が類似する。479はⅠa類狭端部である。凹面の一部に前→後のヘラケズリを加えており、その際狭端部に粘土が溜まっている。また側端面外側に粘土バリが見られ、分割破面と思われる。480・481はⅠc類狭端部である。480は狭端面を丸く収め、481は凸面側に肥厚する。481は広端部、あるいは平瓦Ⅲb類の可能性がある。482はⅡd類の狭端部である。整地層出土の413に似

第76図　ＳＫ401出土軒平瓦

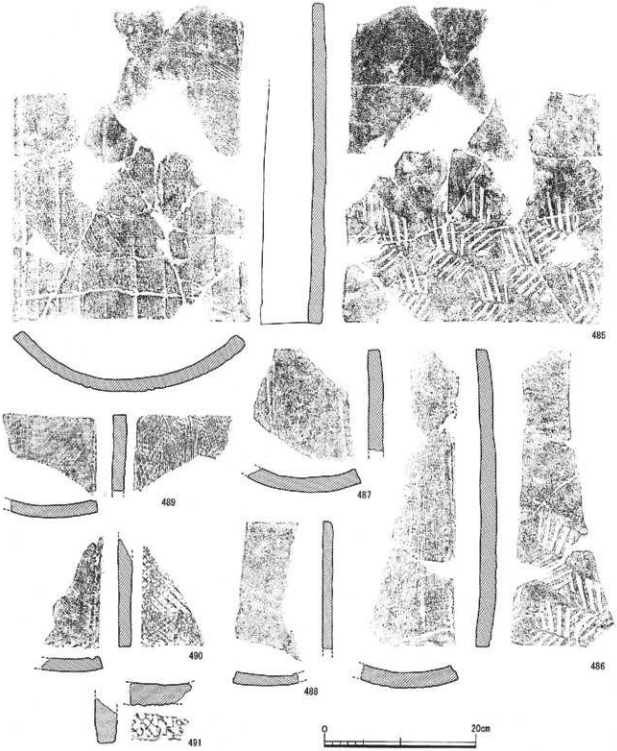


第77図　ＳＫ404出土丸瓦



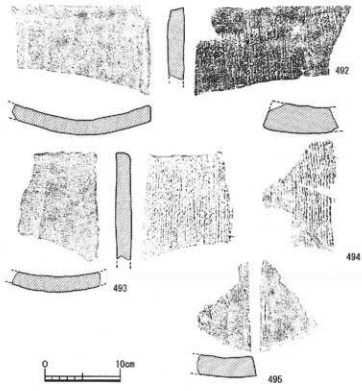
第78図　ＳＫ404出土平瓦①

るが焼成やや不良。丸瓦Ⅱ類玉縁部分は全破片中で１点のみである。483～495は平瓦である。483～486は平瓦Ⅱ類である。483は明褐色を呈し、法量は長辺44.3cm・広端幅31.2cm・狭端幅29.5cmを測る。凹面側端角は面取りされる。広端部に焼成時のひび割れが生じている。484は褐色を呈し、法量は長辺40.4cm・広端幅30.0cm・狭端幅27.4cmを測る。凹面には模骨痕、及び右側端部に分割界線が認められる。485は淡灰色を呈し、法量は長辺40.5cm・広端幅29.8cm・狭端幅27.5cmを測る。



第79図　ＳＫ404出土平瓦②

凹面には左後－右前の糸切り痕が認められる。また広端部には溝が生じているが、布の端部の痕跡であろうか。486は灰色を呈し、焼成良好で、長辺39.2cmを測る。凹面は右側端部に分割界線が認められ、広端角を面取りする。487・488は平瓦Ⅰ類である。487は灰色で焼成良好。凸面はヨコナデであるが、ハケ状工具痕がかすかに見える。凹面に分割界線が見られる。488は灰黒色で、厚さ1.2～1.5cmを測り薄い。凸面狭端部をナデる。489・490は平瓦Ⅲb類である。淡灰褐色を呈し、凹面に分割界線、斜め方向の糸切り痕が認められる。491は灰色を呈するⅢa類である。492～495は平瓦Ⅵ類である。492・495はⅥa類で、凸面はナデを加えるが布目は全面に残る。492は淡灰褐色、495は灰黒色を呈する。493・494はⅥb類である。493は褐色を呈し、狭端面には巻き込まれた布目が認められる。494は灰黄褐色を呈し、厚さ3.5cmを測るかなり厚目のもので、整地２出土の434に様相が似る。



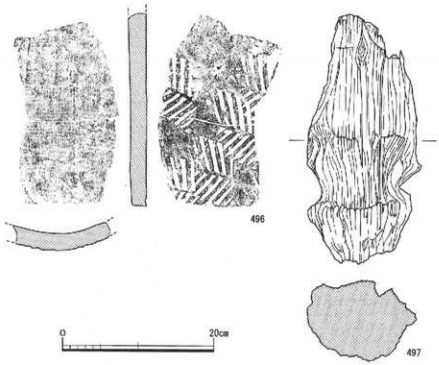
第80図　ＳＫ404出土平瓦③

ＳＤ401

７－５Ｅ・Ｆ区で検出した北西―南東方向の溝で、西端ではＳＫ403と合流しており、ＳＰ405には切られている。検出長約5.0m、幅約70cmを測る。断面皿状を呈し、深さ約11cmで、埋土は7.5YR6/1褐灰色シルト混細粒砂～粗粒砂（鉄分、マンガン斑）の単一層である。時期不明の土師器、須恵器片が少量出土している。

ＳＤ402

７－５Ｅ・Ｆ区で検出



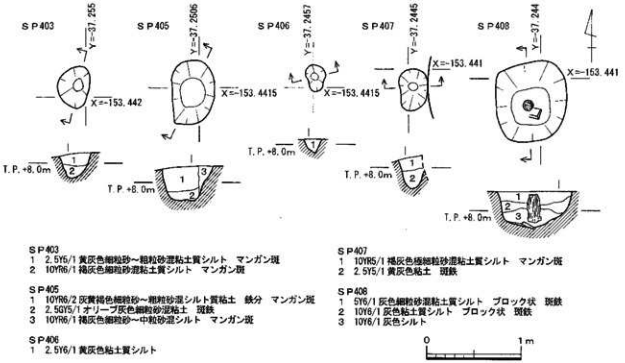
第81図　ＳＰ408出土遺物

した東西方向の溝で、西は調査区外に続いている。東はさらに直線的に伸び、調査区北壁ではY=-37.232付近で調査区外に至ることを確認している。幅約2.0m・深さ最大30cmを測り、断面椀状で、埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂ブロック混粘土質シルト（マンガン斑）の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＰ401～408

7－5Ｅ・Ｆ区で検出した。ＳＰ402～408はほぼ東西方向に直線的に並ぶ。平面形はＳＰ408が隅丸方形を呈する以外は円形・楕円形である。規模は直径19～72cm、深さ12～40cmを測る。ＳＰ404・408には柱根が遺存しており、ＳＰ408では礎板として平瓦片が転用されている。法量等は表6にまとめた。

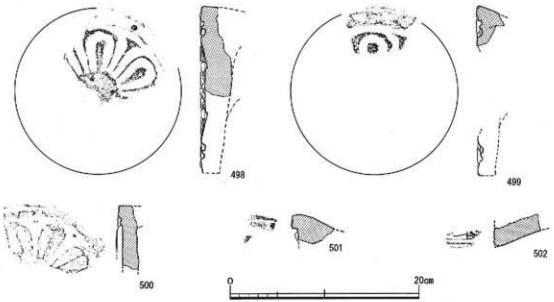
遺物は5個のピットから土師器、須恵器、瓦が少量出土しており、ＳＰ408の平瓦(496)、柱根(497)を図化した。496は灰黄褐色を呈する平瓦Ⅱ類で、厚さ2.1cmを測り厚目である。凹面の広端部3～7cmを細かくヘラケズリする。497は下方が抉れる形状を呈し、残存長約33.0cm・最大幅14.5cmを測る。



第82図　ＳＰ403・405～408平面・断面図

表6　第4面ピット（ＳＰ401～408）法量表

遺構名	地区	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
ＳＰ401	7－5E	19	19	20	
ＳＰ402	〃	31	20	12	平瓦Ⅱ類
ＳＰ403	〃	45	32	27	
ＳＰ404	〃	43	22	39	須恵器・柱根
ＳＰ405	〃	68	50	35	土師器・須恵器・平瓦
ＳＰ406	7－5F	30	20	15	
ＳＰ407	〃	42	30	40	平瓦Ⅱ類
ＳＰ408	〃	72	68	36	平瓦Ⅱ類（礎板）・柱根　496・497



第83図　包含層出土軒瓦

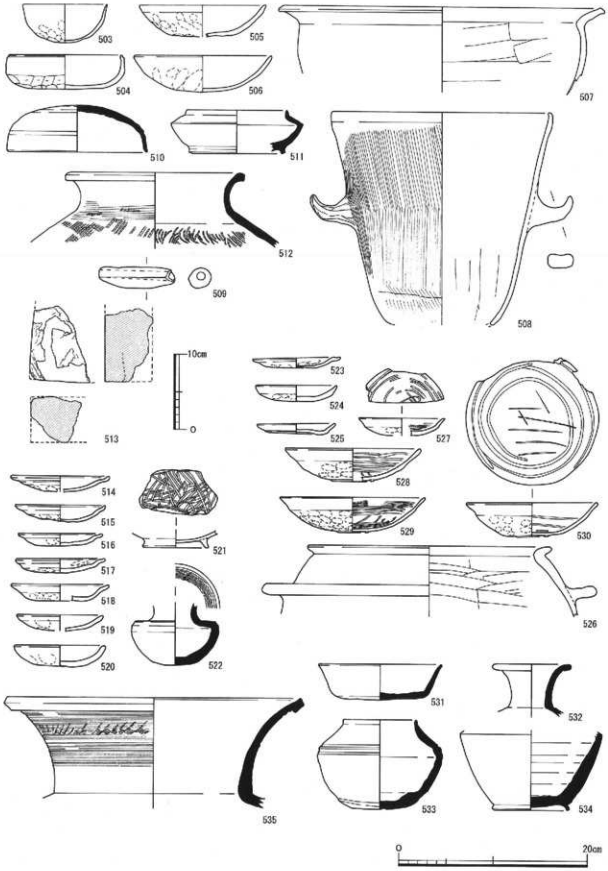
〈包含層出土遺物〉

1区1面

軒丸瓦2点(498・499)を図化した。軒丸瓦V型式である。498は1区西半部、499は8－7・8C区出土。

1区3面

軒丸瓦2点(500・501)、軒平瓦1点(502)、土師器(503～509)、須恵器(510～512)、塼(513)を図化した。500は軒丸瓦Ib型式である。径6㎜程度の礫を含んでいる。501は軒丸瓦V型式の瓦当小片。周縁端面に段が生じている。502は軒平瓦I型式の瓦当中央右部分下半の小片で、上面は剥離面である。500・502は7－6・7J区、501は7－5H区拡張部出土である。503は土師器椀で、成形は手づくねによる。焼成不良で1㎜以下の砂粒を含む。口径9.0cm。7－6H・I区の第5層出土。504は土師器杯で、口径12.2cmを測る。口縁端部外面に段を成す特異な形態である。体部外面下半細かいヘラケズリ、底部外面一方向のヘラケズリという手法からは飛鳥時代の杯Hに当たる。また天地を反転させると須恵器壺A蓋に類似し、口縁端部形態も通有のものとなることから、壺蓋の可能性もあろう。7－5H区拡張部出土。505は平安時代前期の土師器杯Aで、胎土はやや粗で、二次焼成を受けている。506の土師器大皿Bも同時期頃のものであろう。8－7A区出土。507は土師器鍋で、明褐色を呈し、胎土は1㎜以下の砂粒を含む。7－6H・I区出土。508は土師器甑で、淡褐色で胎土はやや粗である。底部の蒸気孔の形は不明である。7－5G区出土。509は土師器管状土錘で、残存長8.1cm・最大径2.3cm・孔径0.9cmを測る。7－5H区拡張部出土。510は須恵器杯蓋でTK10型式に比定される。511は口径10.8cm・器高4.5cmを測る扁平な須恵器壺で、奈良時代の小型の平城壺Aに当たる。灰色で断面は褐色を呈し、肩部に灰が被る。2点は7－5G区出土。512は須恵器甕である。焼成不良で灰白色を呈する。7－6H・I区の第5層出土。513は塼の角部小片である。胎土密で1㎜以下の砂粒を含み、焼成良好で非常に固い。7－6・7J区出土。536は平瓦I類である。灰黒色を呈し、胎土はやや粗で2㎜以下の砂粒を多

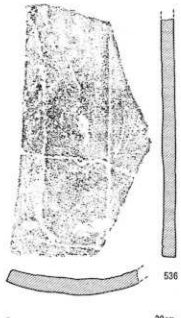


第84図　包含層出土遺物

く含む。焼成はやや不良。7－5H区拡張部出土。

2区3面

土師器小皿(514～520)、和泉型瓦器椀(521)、須恵器壷(522)を図化した。514～518は土師器小皿A、519・520は小皿B。514・518・519は褐色。515～517は灰黄色。517は完形で、口径9.5cmを測る。521は見込みに乱方向の暗文を施す。514～521は11世紀末～12世紀初頭に比定される。522は水平な肩部上面に波状文を巡らせる特異な形態・装飾をもつ壷で、断面紫色を呈し、肩部最大径9.4cmを測る。類例は不明であるが、初期須恵器の範疇に収まるものと考えられる。519・520は8－9・10H区、他は8－10J区出土。



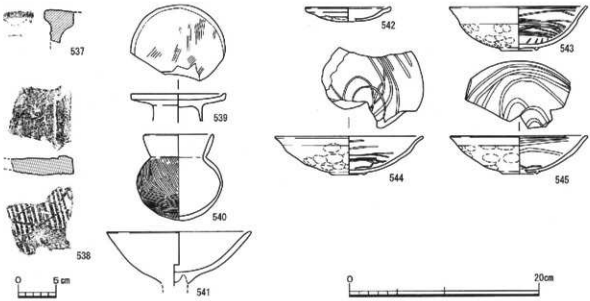
第85図　包含層出土平瓦

3区3面

523～530を図化した。523は土師器小皿A、524・525は小皿Bである。523は明黄灰色、524・525は褐色系である。11世紀末～12世紀代に比定される。土師器羽釜(526)は内面ヨコナデを施す。瓦器皿(527)は内面にのみ圏線状暗文を施す。和泉型瓦器椀(528～530)はいずれも内面圏線状暗文＋見込み平行暗文である。530の高台は紐状で全周しない。土師器羽釜(526)は13世紀前半に比定される。523は9－10A、14－1A区、他は14－1B・C区出土。

1区4面

531～535を図化した。531は須恵器杯身で、口径13.2cm・器高3.7cmを測る。底部外面ヘラケズリで、外面に灰が被る。532は須恵器提瓶の口頸部で、口径8.4cmを測る。外面半分と反対側の口縁部内面に灰が被る。533は須恵器壷で、平城壷Cに当たる。肩部に灰が被り、一部自然釉が掛



第86図　側溝出土遺物

かる。口径7.8cm・器高9.4cm・最大径13.4cmを測る。534は須恵器壷の下半部である。胎土が粗で、底部内面の一部に自然釉が掛かる。531～534は奈良時代前半に比定されるもので、7－4・5E・F区出土。535は口径31.5cmを測る須恵器甕である。口縁部の波状文は不鮮明で、全体に灰が被る。拡張部東部の7－5・6J区、10A層に当たる層位の出土である。飛鳥時代のものか。

側溝

537は軒丸瓦Ⅳ型式の瓦当小片である。渋川廃寺ではこの1点のみ確認された。1区の7－5E・F区出土。538は平瓦Ⅳ類である。1区の8－7A区出土。539は土師器台付皿で、皿部は円盤状を呈し、内面ハケで口縁端部が短く直立する。2区東部出土。土師器壷(540)・高杯(541)は明褐色を呈する。5世紀初頭頃に比定されよう。2区西部の第10B層出土。土師器小皿A(542)は褐色系である。瓦器椀(543～545)は和泉型である。543は非常に硬質で、焼成時に高台が浮いている。544は高台が途切れている。542～545は3区西部の14－1A・B区、平安～鎌倉時代の遺構群に伴う遺物で、11世紀末～13世紀中頃に比定される。

第４章　第３次調査

第１節　基本層序

０層：操車場造成時の盛土。層厚0.8～1.4ｍを測る。現地表面の標高はT.P.+9.8～10.1ｍを測り西方が高い。

１層：旧耕土。10Y5/1灰色中粒砂～細礫混シルト。調査地全域に見られ、斑鉄を含みグライ化が著しい。上面の標高はT.P.+9.0～9.2ｍを測り、層厚は最大約0.4ｍで、最大で２～３層に細分できる。

２層：第１面の近世～近代の水田作土、及び島畑盛土を包括して２層とした。調査地全域に見られる。水田作土はグライ化し、斑鉄を多く含む。島畑盛土はよく締まった攪拌層でマンガン斑・斑鉄を多く含む層相である。

３層：10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土。マンガン斑・管鉄を多く含む土壌化層である。東部に見られ層厚約0.2ｍを測る。上面が第２面で標高は約T.P.+8.5ｍを測る。

４層：2.5Y6/2灰黄色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。マンガン斑を多く含む土壌化層である。西部に見られる。上面が第２面。

５層：7.5YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。マンガン斑を多く含み固く締まる土壌化層である。上面が第２・３面。

６層：2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～細礫混シルト質粘土。マンガン斑・斑鉄・管鉄を多く含む土壌化層である。東部に見られ上面が第３面である。

７層は水成層で、上部はマンガン斑・斑鉄を含み土壌化する。この上面までが調査対象である。上面の標高は約T.P.+8.4ｍを測り、上面が第３・４面である。層相から７A層～７C層の３層に分かれる。西側の久宝寺遺跡第29次調査東端で検出したＮＲ4001に伴う水成層であろう。

７A層：2.5Y6/1黄灰色シルト～極細粒砂。斑鉄・マンガン斑を含み、上部が攪拌された土壌化層である。東部に見られ層位的に７B・C層より上層に当る。

７B層：10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂互層。鉄分を含む。

７C層：10YR5/1褐灰色中粒砂～細礫互層。西部に見られる。

第２節　検出遺構と出土遺物

調査では、盛土部分及び旧耕土・床土を機械掘削により除去し、以下第４面までの調査を実施した。第１・２面では中世～近代の水田・島畑・井戸・溝といった生産関連の遺構を主に検出した。第３面では中世頃の生産関連の遺構を主に検出した。第４面では古墳時代中期～奈良時代の遺構を検出した。

調査により出土した遺物はコンテナ22箱を数える。

〈第１面〉

近世～近代の耕作面である。上面の標高はT.P.+8.5～9.0ｍを測る。水田３筆（**水田101～103**）、島畑２基（**島畑101・102**）、井戸１基（ＳＥ101）、畦畔状遺構１条（**畦畔状遺構101**）、土坑７基（ＳＫ101～107）、溝５条（ＳＤ101～105）、落ち込み１基（ＳＯ101）を検出した。このうち井

戸・土坑・落ち込みは水田101作土下面で検出したものである。島畑は第２面をベースとして盛土されている。水田・島畑の方向はほぼ方位に沿っている。

水田101

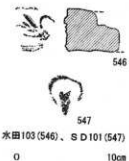
６－１Ｈ・Ｉ、２Ｈ～Ｊ、７－２Ａ・Ｂ、３Ａ～Ｃ区に位置する。東を畦畔状遺構101で区画され、北・南・西は調査区外に続いている。規模は東西52.0m以上を測る。作土は7.5Y5/2灰オリーブ色中粒砂～細礫混シルトで斑鉄を含みグライ化する。作土下面で井戸（ＳＥ101）・土坑（ＳＫ101～107）・落ち込み（ＳＯ101）を検出した。土坑・落ち込みに関しては、耕作によって形成された起伏と思われ、埋土は水田作土と同様である。作土からは土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、瓦の小片が出土している。

水田102

７－３・４Ｃ・Ｄ区で検出した水田で、畦畔状遺構101と島畑101の間に位置する。北・南は調査区外に続いており、規模は南北5.0m以上、東西約5.7mを測る。作土は10YR6/1褐灰色細粒砂～細礫混シルト（斑鉄多）である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。下位のＳＤ207から巻き上げられたものであろう。

水田103

調査地東端部、７－４・５Ｅ区で検出された水田で、島畑101と島畑102の間に位置する。北・南は調査区外に続いており、規模は南北6.1m以上、東西約4.1mを測る。作土は上部が10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～中礫混シルト（鉄分）、下層が5Y6/1灰色細粒砂～中粒砂混シルト（鉄分、マンガン斑）である。第２次調査第２面水田201に当たる。遺物は土師器、須恵器、瓦が出土している。軒平瓦（546）を図化した。軒平瓦Ⅰ型式の瓦当小片で、中心飾りの左部分である。



第87図　水田103・ＳＤ101出土遺物

島畑101

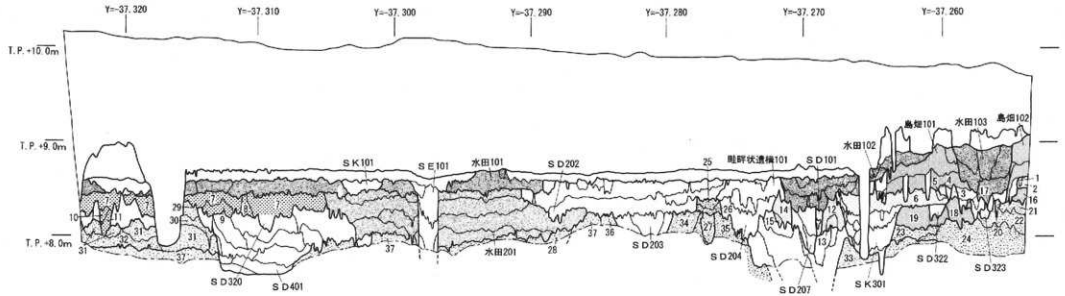
７－３・４Ｄ、４・５Ｅ区に位置する島畑で、規模は南北6.8m以上、東西約6.9mを測る。盛土はおおむね10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト（鉄分）である。上面では西部で南北方向の溝４条（ＳＤ102～105）を検出した。東の水田103を埋め立て、島畑102と連結させることで規模を拡大していることが確認できた。盛土からは土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、瓦が出土している。

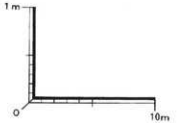
島畑102

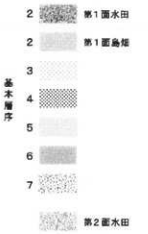
調査区北東角、７－４Ｅ区で検出した島畑で規模等の詳細は不明である。盛土は10YR6/2灰黄褐色中粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土で固く締まる。

ＳＥ101

７－２Ａ区に位置し、直径約2.3mを測る掘方の南半部を検出した。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。底までは確認しておらず、検出面から深さ約0.9mまでの掘削範囲では枠は認められなかった。井戸枠瓦が出土していることから上部に瓦枠を備えた井戸であったと考えられる。確認できた埋土は井戸廃絶後の埋め戻しに伴うもので、上層が2.5Y6/2灰黄色細粒砂～細礫多混シルト（ブロック状、斑鉄、管鉄）、下層が10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂、粘土質シルト（ブロック状、斑鉄、マンガン斑）である。井戸枠瓦の他、平瓦や５世紀頃の土師器が出土している。

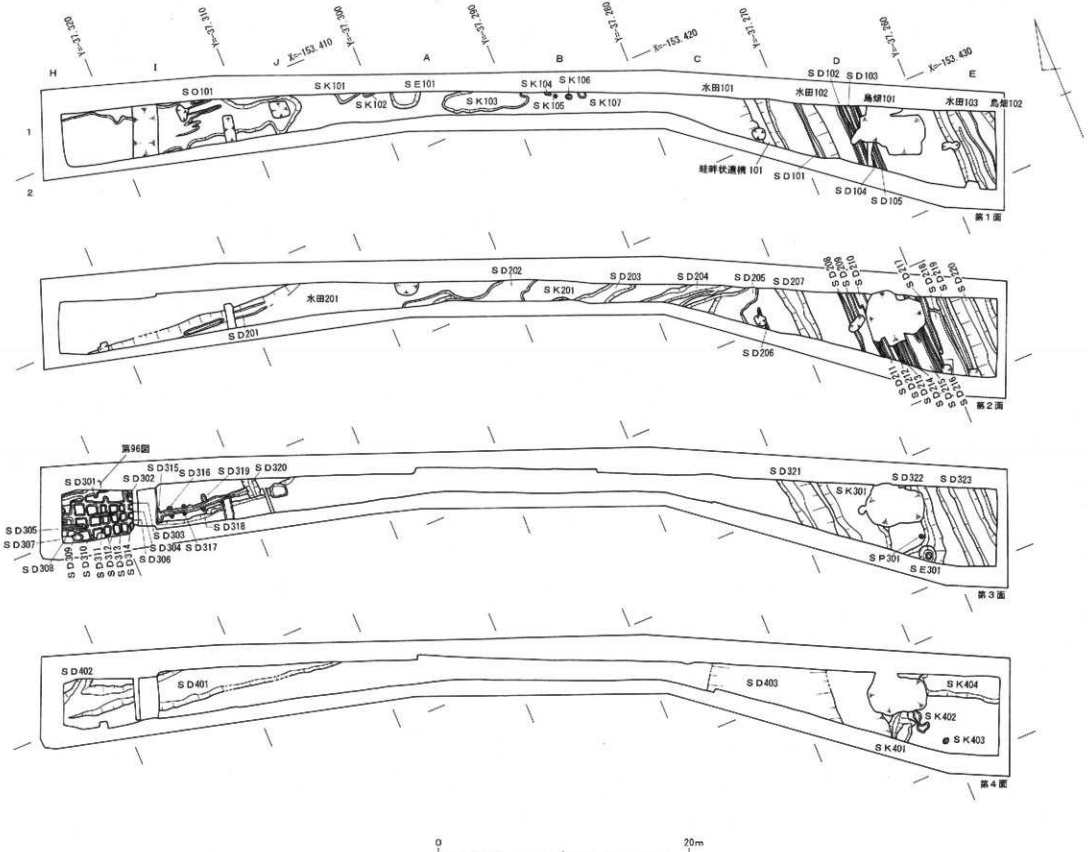






基本層序	層番号	層名
3	1	2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土質シルト
	2	2.5Y6/2灰黄色中粒砂～細礫混粘土質シルト
	3	10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト
	4	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト
	5	2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
	6	10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土
4	7	2.5Y6/2灰黄色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
	8	7.5YR6/1褐灰色シルト質粘土
	9	7.5YR6/2灰褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
	10	2.5Y6/2灰黄色中粒砂～細粒砂少混シルト質粘土
	11	10YR5/1褐灰色細粒砂少混シルト質粘土
5	12	10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
	13	10YR5/1褐灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
	14	7.5YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
6	15	2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土質シルト
	16	2.5Y5/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土
	17	10YR6/2灰黄褐色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
	18	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土
	19	2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～細礫混シルト質粘土
7A	20	2.5Y5/1黄灰色中粒砂～粗粒砂少混粘土質シルト
	21	2.5Y5/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂少混シルト質粘土
	22	2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土
	23	5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
	24	2.5Y6/1黄灰色シルト～極細粒砂
	25	7.5YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
	26	7.5YR5/1褐灰色中粒砂～細礫多混粘土質シルト
	27	2.5Y5/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト
	28	2.5Y6/2灰黄色シルト～粘土質シルト
	29	7.5YR6/1褐灰色シルト質粘土
	30	7.5YR6/1褐灰色粘土質シルト
	31	10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂ブロック混シルト
	32	10YR5/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂ブロック多混シルト
7B	33	10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～極粗粒砂互層
7C	34	10YR5/3にぶい黄褐色シルト～中礫互層
	35	5YR4/2灰褐色細粒砂～中礫互層
	36	7.5YR5/3にぶい褐色シルト混中粒砂～極粗粒砂
	37	10YR5/1褐灰色中粒砂～細礫互層

第88図　南壁断面図


H
I
J
A
B
C
D
E
X=-153,410
X=-153,420
X=-153,430
Y=-31,320
Y=-31,310
Y=-31,300
Y=-31,290
Y=-31,280
Y=-31,270
Y=-31,260
1
2
SO101
SK101
SK102
SE101
SK103
SK104
SK105
SK106
SK107
水田101
SD102
SD103
水田102
島畑101
水田103
島畑102
畦畔状遺構101
SD101
SD104
SD105
第1面
SD202
SK201
SD203
SD204
SD205
SD207
水田201
SD201
SD206
第2面
第96図
SD301
SD302
SD315
SD316
SD319
SD320
SD321
SD322
SD323
SK301
SD305
SD307
SD308
SD309
SD310
SD311
SD312
SD313
SD314
SD303
SD304
SD306
SD317
SD318
SP301
SE301
第3面
SD402
SD401
SD403
SK404
SK402
SK403
SK401
第4面
0
20m

第89図　平面図

畦畔状遺構101

7－3・4C区に位置し、水田101・102を画するもので南北方向に直線的に伸びる。上幅約0.8m・下幅約1.8m・高さ約17cmを測る。2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトで構成されるが、盛土によるものかどうかは確認できなかった。上部は斑鉄を多く含み固く締まる。

SD101

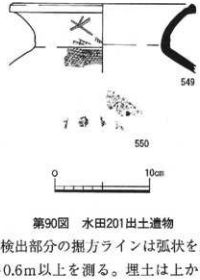
7－3・4D区に位置する。水田102の作土下面で検出した南北方向に直線的に伸びる溝である。規模は幅30～50cm・深さ約30cmを測る。埋土は3層から成り、中層はシルト混極細粒砂で、一時的な流水があったことを示している。水田102との関係は明確ではない。第2面SD207と重複する位置関係にあり、掘り直された溝の可能性がある。遺物は土師器、須恵器、瓦器、中国製白磁、瓦が出土している。軒丸瓦(547)を図化した。軒丸瓦V型式の瓦当小片である。

〈第2面〉

約T.P.+8.5mの3～5層上面、概ね第1面の島畑盛土・水田作土を除去した段階で捉えた遺構面で、中世～近世の耕作面にあたる。島畑盛土は一気に掘削したため、盛土中から掘られた溝や盛土下面の溝を同一面で検出している。水田1筆(水田201)、土坑1基（SK201)、溝20条（SD201～220）を検出した。第1面と同様、水田や耕作溝の方向はほぼ方位に沿っている。

水田201

6－2H～J、7－2A・B、3A～C区に位置する。規模は東西50m以上、南北は15m以上を測ると思われる。作土はグライ化した10YR6/2灰黄褐色細粒砂～細礫混粘土質シルト（マンガン斑、管鉄）である。作土下面で東西方向の溝5条(SD201～205)を検出した。いずれも流水状況は認められず、耕作によって形成された溝状の起伏であろう。埋土も作土と同様である。遺物は13世紀代までの土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。土師器、須恵器は5～6世紀代のものが多くを占める。下位のSD401に伴う土器であろう。須恵器杯身(548)・甕(549)、軒丸瓦(550)を図化した。549は口縁部外面に×印のヘラ記号を有し、体部外面は平行タタキ後カキ目である。548・549は6世紀前半に比定される。550は軒丸瓦V型式の瓦当小片である。



第90図　水田201出土遺物

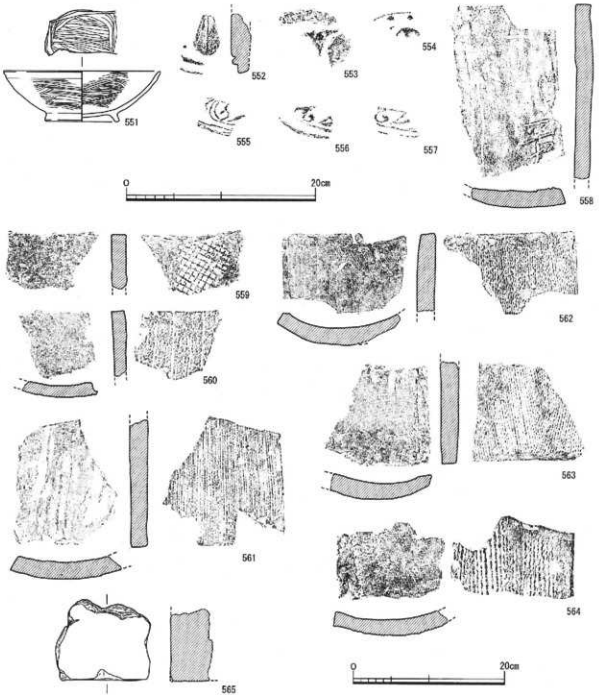
SK201

7－3B区の南壁際で検出したもので、詳細は不明である。検出部分の掘方ラインは弧状を成し、平面形は円形が想定できる。規模は東西1.6m以上、深さ0.6m以上を測る。埋土は上から7.5Y6/1灰色細粒砂～細礫混粘土質シルト（斑鉄多）、2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土混細粒砂～細礫（ブロック状、鉄分）の2層が確認できた。埋土の状況等が第1面SE101に類似し、当遺構も同様に井戸である可能性が高い。遺物は出土していない。

SD206・208～220

水田201の東側で検出した溝群で、南北方向に平行して伸びる。耕作に伴う溝と考えられる。埋土はSD206－10YR6/1褐灰色細粒砂多混シルト質粘土（鉄分）、SD208・209－2.5Y6/2灰黄

色中粒砂～粗粒砂混シルト（鉄分）、ＳＤ210・211－2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト（斑鉄）、ＳＤ212・213・215－10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト（斑鉄）、ＳＤ214・216－2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト（ブロック状、斑鉄）、ＳＤ217・218－10YR6/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト（斑鉄、管鉄）、ＳＤ219・220－2.5Y6/1黄灰色中粒砂～粗粒砂少混シルト（斑鉄多）である。ＳＤ219・220は第１面水田103の下位に位置する溝で、これに伴う溝の可能性がある。法量・出土遺物等は表７にまとめた。



第91図　ＳＤ207出土遺物

SD207

7－3・4C・D区に位置する南北方向に直線的に伸びる溝である。幅約1.5m・長さ5.5m以上・深さ40～55cmを測る。断面逆台形を呈し、底のレベルは北がやや低い。埋土は2層から成る（第94図）。第3面SD321とは西肩が共通しており、SD321埋没後に掘り直されたものと捉えられる。遺物は上層から飛鳥～奈良時代の瓦片が集積した状況で出土している。これらの瓦は一気に廃棄されたものと考えられるが、少量含まれる土器から見て溝の埋没時期は平安時代後期頃に比定される。551～565を図化した。551は和泉型瓦器椀で、体部外面は分割、内面密な圏線状ヘラミガキで、見込みは一定方向の密なヘラミガキである。器高は低めであるが、外面の分割ヘラミガキや、高台も高いことから11世紀後半に比定されよう。552～554は軒丸瓦の瓦当小片で、552がⅠb型式、553がⅡ型式、554がⅤ型式である。553は渋川廃寺で1点のみの確認である。554は丸瓦広端部に当たり、瓦当剥離面には刻み目、および布目が認められる。555～557は軒平瓦の瓦当小片である。555はⅠ型式の瓦当左側の下半部分である。556・557はⅣ型式の瓦当左側の下半部分である。558は平瓦Ⅵ類で、灰褐色を呈し、胎土密で2㎜以下の砂粒を少量含み、焼成良好である。凸面は縄目タタキをほぼ完全にナデ消しており、軒平瓦の可能性がある。凹面は一部布目が残り、ナデ消していると思われるが摩滅の為不明で凹凸があり、側端部1cmを削っている。凹面にヘラ描きされた文字瓦であるが、判読できない。559～564は平瓦で、559がⅢb類、560～562がⅥa類、563がⅥb類、564がⅥc類である。560は灰色を呈し、胎土粗で3㎜以下の砂粒を多く含み、焼成良好で硬く歪みが大きい。側端面は削らず粘土バリを残し、凹面側には巻き込まれた布目痕が見られる。561は灰色を呈し、凹面に縦方向のユビナデを加える。562は灰黒色を呈する。563は灰色を呈し、凹面の一部にナデを加え、側端面の凹面側角を面取りする。564は褐色を呈する。565は塼である。色調明褐色を呈し、胎土やや粗で2㎜以下の砂粒を含み、焼成ややや不良である。

表7　第2面溝（SD201～220）法量表

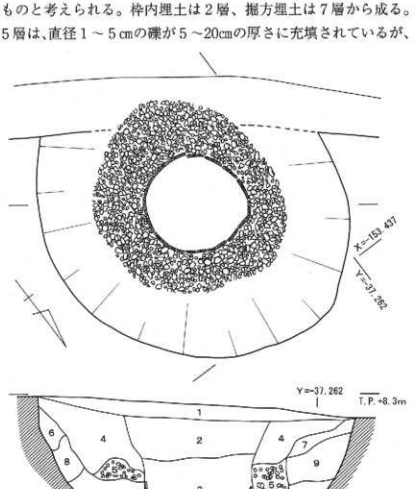
遺構名	地区	検出長（m）	幅（m）	深さ（cm）	出土遺物
SD201	6－2Ⅰ・J	7.0	0.3～0.7	10	土師器・須恵器
SD202	7－2・3A・B	11.0	2	24	土師器・須恵器・瓦器・平瓦
SD203	7－3B	5.1	1.3	25	
SD204	7－3B・C	7.7	1.5	30	土師器・平瓦
SD205	7－3C	6.1	1.8	20	土師器・須恵器・瓦器（12C後半）・丸瓦・平瓦
SD206	7－3・4C	1.9	0.2	6	瓦器（13C前半）
SD208	7－3・4D	5.1	0.2～0.4	6	
SD209	〃	2.2	0.4	9	
SD210	7－4D	5.8	0.4～0.8	9	
SD211	〃	2.0	0.4	9	
SD212	〃	1.7	0.2	15	
SD213	〃	2.0	0.4	12	
SD214	〃	2.4	0.4	12	
SD215	〃	3.5	1.2	16	
SD216	〃	6.8	0.3	11	
SD217	7－4D・E	4.9	0.3～0.6	9	
SD218	〃	6.1	1.5	5	
SD219	7－4E	6.7	0.6	14	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中国製青磁椀・丸瓦・平瓦
SD220	〃	7.1	1.8	35	土師器・須恵器・瓦器・丸瓦・平瓦

〈第3面〉

標高8.4～8.5mの第6・7層上面で、井戸1基（SE301）、土坑1基（SK301）、溝23条（SD301～323）、ピット1個（SP301）を検出した。これらの遺構の時期は中世頃に比定される。

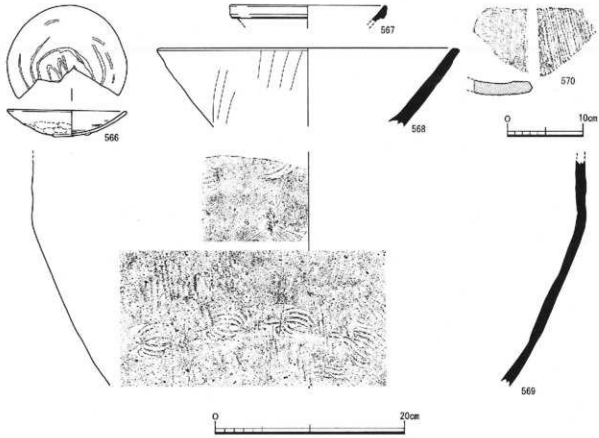
ＳＥ301

７－４Ｄ区で検出した桶枠井戸である。掘方の平面形はやや南北に長い楕円形を呈し、規模は直径1.55～1.8mを測る。掘方断面は一部が二段掘り状を呈し、検出面からの深さ約0.9mを測る。桶は掘方のほぼ中央に位置し、湧水層である第７Ｂ層を約20cm掘り下げて設置されている。桶は直径約54cm・高さ約40cmを測るもので、幅約10cm・厚さ約1.5cmの板16枚で構成され、上下二段に竹によるタガが巡る。また桶枠検出時に上部にわずかに木質が遺存していたことから、桶枠上段には曲物枠が設置されていたものと考えられる。枠内埋土は２層、掘方埋土は７層から成る。桶と曲物の連結部分に当たる第５層は、直径１～５cmの礫が５～20cmの厚さに充填されているが、これは補強、そして連結部分から浸入する地下水の浄化が目的であると考えられる。遺物は枠内埋土から土師器、須恵器、瓦器、中国製白磁、国産陶器、丸瓦、平瓦が、掘方埋土から土師器、須恵器、瓦器、丸瓦、平瓦が出土している。枠内埋土からの566～570を図化した。566は和泉型瓦器椀で、口径12.7cm・器高3.0cmを測る。高台は中心からずれており経状で全周しない。内面の暗文は粗である。13世紀後半に比定される。567は玉縁状口縁の中国製白磁碗で、11世紀後半から12世紀前半以降に比定される。568は産地不明の焼締め陶器鉢である。胎土は密で１㎜以下の砂粒を含む。外面は縦方向の板ナデと思われ、絞り目状の痕跡がある。気泡の為、焼成時に器壁が膨れている。569は常滑焼甕で、胎土中には２㎜以下の砂粒を多く含み、歪みが大きい。体部外面には横方向に連続する押印文が認められ、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。13世紀代のものか。



1　7.5YR5/1 褐灰色中粗砂～粗粒砂混シルト質粘土　マンガン斑
2　10YR6/1 褐灰色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　マンガン斑　雪鉄
3　5B6/1 青灰色中粒砂～粗粒砂少混粘土　グライ化
4　2.5GY6/1 オリーブ灰色　極細粒砂～中粒砂混粘土　マンガン斑　雪鉄
5　10YR5/2 灰黄褐色混粒砂～中礫（～5cm）
6　10YR6/2 灰黄褐色細粒砂混粘土
7　7.5Y5/3 にぶい褐色細粒砂～中粒砂
8　10YR6/1 褐灰色シルト混細粒砂～中粒砂
9　2.5GY6/1 オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト
10　10B6/1 青灰色細粒砂～中粒砂混粘土

第92図　ＳＥ301平面・断面図



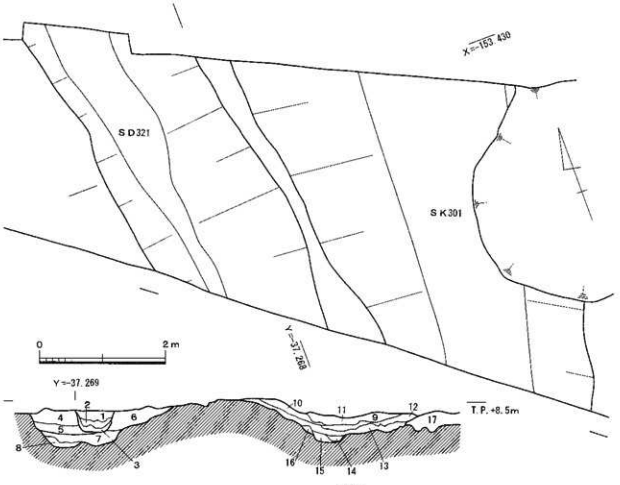
第93図　ＳＥ301出土遺物

570は平瓦Ⅵb類である。淡灰褐色を呈し、側端面は２面に削る。掘方埋土出土の瓦器椀は13世紀後半に比定されるもので、枠内埋土からの遺物との時期差はあまり無いといえる。

ＳＫ301

ＳＤ321東側に位置する。規模は東西3.0～4.0m・南北5.5m以上・深さ約0.6mを測る。埋土は上層が砂粒を多く含むシルト～シルト質粘土、下層は植物遺体を多く含み、ラミナが認められる粘土部分もあるが、粘土～シルトと砂礫が複雑に混ざる層相が基調である。埋土の状況から滞水状況が窺え、遺構の性格としては池のような機能が想定できよう。遺物は土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、丸瓦、平瓦、板材が出土している。571～577を図化した。571～573は和泉型瓦器椀である。573は口縁部一部欠損で、口径12.4cm・器高3.2cmを測る。底部は指頭圧痕による凹凸があり高台は無く、内面の暗文は粗であり、13世紀末に比定される。571・572は見込みに暗文は認められないが、573より暗文も密で、器高もありやや古い13世紀中頃に比定される。574は東播系須恵器壺で、体部外面平行タタキである。口縁部内面・肩部外面に灰が被る。12世紀後半のものか。575は平瓦Ⅵa類で、灰色を呈し側端面の凹面側角を面取りする。ＳＤ207出土の560に似る。576は平瓦Ⅵb類で灰色を呈する。

写真９　ＳＫ301遺物出土状況（北から）

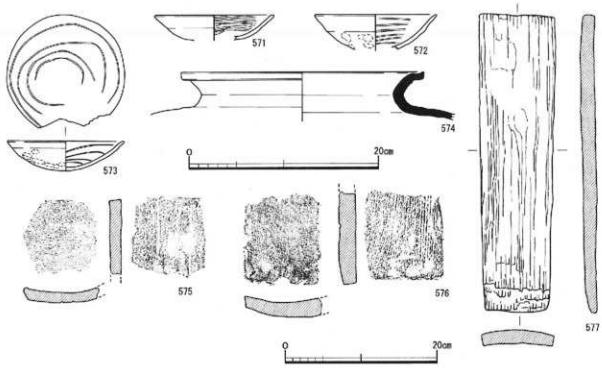


第94図　ＳＫ301・ＳＤ321平面・断面図

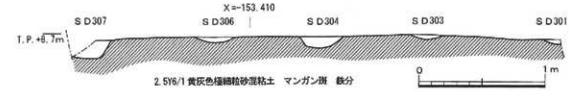
瓦では他に瓦当が欠損した軒平瓦Ⅰ型式や丸瓦Ⅰb類・Ⅰc類・Ⅱb類、平瓦Ⅱ類・Ⅲb類・Ⅳc類・Ⅵ類が出土している。板材(577)は長さ39.3cm・幅8.9～9.9cm・厚さ1.6cmを測る。幅の狭い方の片面を削って薄く加工している。ＳＥ301の枠に使用されている桶の板材と法量がほぼ一致する。なおＳＥ301出土の常滑焼甕(569)と同一個体と思われる破片が1点出土している。板材(577)を、ＳＥ301廃絶時に撤去された上部の桶枠材と考えることもでき、両遺構の有機的な関連が窺える。

ＳＤ301～320

西部において、第2面水田201による削平を受けていない部分で検出した格子状に掘削された溝群である。規模は幅25～53cm・深さ4～14cmを測り、断面逆台形を呈する。ＳＤ320は幅約1.0mを測りやや規模が大きい。耕作に伴う溝群であろう。埋土はＳＤ301～319－2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土（マンガン斑、鉄分）、ＳＤ320－2.5Y6/2灰黄色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土（マンガン斑多）である。法量等は表8にまとめた。遺物はＳＤ306から古墳時代後期頃の土師器、



第95図　ＳＫ301出土遺物

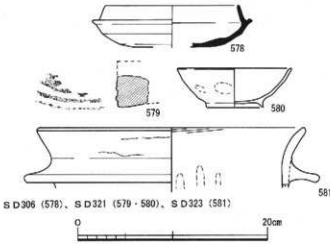


第96図　ＳＤ301・303・304・306・307断面図

須恵器(578)が出土しているが、下位のＳＤ401から巻き上げられたものと考えられる。578は須恵器杯身で、底部外面灰被りで、内面中央には同心円タタキがわずかに確認できる。６世紀前半に比定される。

ＳＤ321

７－３Ｃ・Ｄ、４Ｄ区で検出した南北方向の溝で、第２面ＳＤ207に先行すると考えられる溝である。規模は長さ5.5m以上・幅約2.3m・深さ約0.6mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は３層から成る。遺物は土師器、瓦器、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土している。軒平瓦(579)、土師器椀(580)を図化した。579は軒平瓦Ⅳ型式の瓦当小片である。圏線が他のⅣ型式に比して太い特徴があり、Ⅲ型式に似る。



第97図　ＳＤ306・321・323出土遺物

580は口径12.0cm・器高4.2cmを測り、胎土やや粗で1㎜以下の砂粒を多く含む。表面剥離が著しく調整等は不明である。10世紀頃に比定されよう。

ＳＤ322

７－４Ｄ・Ｅ区で検出した溝で、南北方向に伸び南部では幅を増して西に屈曲するようである。規模は長さ6.3m以上・幅1.2～3.3m・深さ約18cmを測る。ＳＥ301に切られている。埋土は２層から成り、上層が10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト（マンガン斑）、下層が10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土（ブロック状、マンガン斑多）である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、丸瓦、平瓦が出土している。

ＳＤ323

７－４・５Ｅ区で検出した南北方向に伸びる溝である。規模は長さ約6.8m・幅約3.5m・深さ約20cmを測る。奈良時代～平安時代初頭頃までの土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土しており、奈良時代の土師器羽釜(581)を図化した。

表8　第３面溝（ＳＤ301～320）法量表

遺構名	地区	検出長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	遺構名	地区	検出長(m)	幅(cm)	深さ(cm)
ＳＤ301	６－１Ｈ・Ｉ	3.8	53	14	ＳＤ311	〃	2.4	37	3
ＳＤ302	６－１Ｉ	0.3	35	4	ＳＤ312	〃	3.0	32	7
ＳＤ303	６－１Ｈ・Ｉ	5.6	36	4	ＳＤ313	６－１Ｈ、２Ｈ・Ｉ	2.1	29	7
ＳＤ304	６－１Ｈ・Ｉ、２Ｉ	5.6	35	8	ＳＤ314	６－１・２Ｉ	3.2	36	7
ＳＤ305	６－１Ｈ	1.9	39	12	ＳＤ315	６－２Ｉ	1.2	43	13
ＳＤ306	６－１Ｈ、２Ｈ～Ｊ	14.0	40	11	ＳＤ316	〃	1.0	34	14
ＳＤ307	〃	5.3	—	14	ＳＤ317	〃	0.8	25	11
ＳＤ308	６－１Ｈ	2.3	29	5	ＳＤ318	〃	0.3	33	10
ＳＤ309	６－１・２Ｈ	2.8	41	9	ＳＤ319	〃	0.6	38	6
ＳＤ310	〃	3.2	34	10	ＳＤ320	６－２Ｊ	1.7	100	16

ＳＰ301

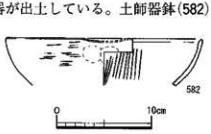
７－４Ｄ区、ＳＤ322の屈曲部内側で検出したピットである。平面形は東西にやや長い楕円形を呈し、規模は36×30cm・深さ約13cmを測る。断面逆三角形に近く、埋土は2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土（マンガン斑）の単層である。時期不明の土師器片、平瓦が出土している。

〈第４面〉

標高約8.4mの第７層水成層上面で、古墳時代中期～平安時代頃の土坑４基（ＳＫ401～404）、溝３条（ＳＤ401～403）を検出した。土坑は東部に集中する。

ＳＫ401

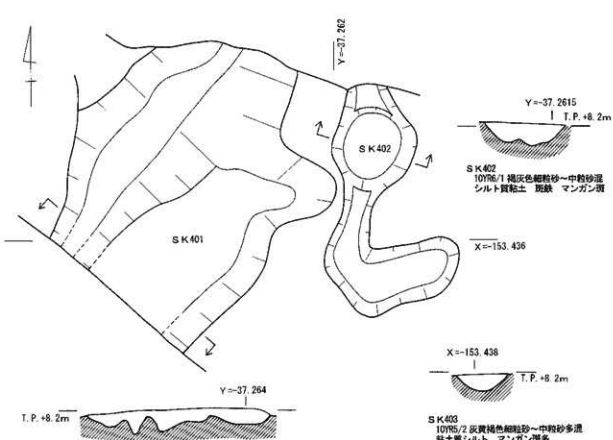
７－４Ｄ区で検出した土坑である。平面不定形を成し、規模は2.2×2.0m以上を測る。断面皿状を呈し、深さ約15cmを測り底部は起伏がある。埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土（斑鉄多、マンガン斑多）である。奈良時代頃の土師器、須恵器が出土している。土師器鉢(582)を図化した。淡褐色を呈し、胎土密。内面放射状暗文、外面横方向ヘラミガキを施すもので、片口を有する。飛鳥時代～奈良時代初頭に比定されよう。



第98図　ＳＫ401出土遺物

ＳＫ402

７－４Ｄ区、ＳＫ401東側に隣接する土坑である。平面形はＬ字形の溝状を成し、北端は撹乱坑により削平される。規



第99図　S K401～403平面・断面図

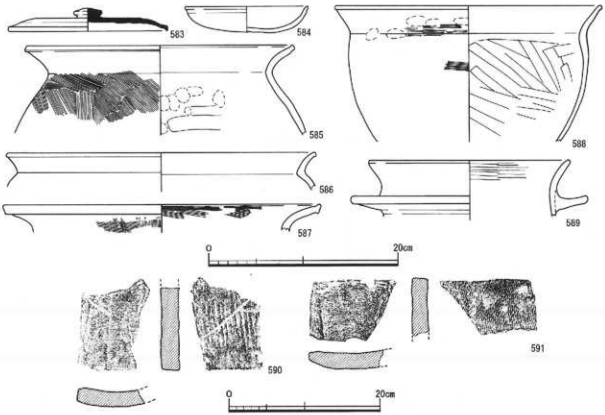
模は南北1.8m以上・東西約0.7mを測る。深さ約10cmを測るが底部には起伏があり、北部では円形に落ち込む部分が見られ、この部分は深さ約18cmを測る。埋土は10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土（斑鉄多、マンガン斑多）である。遺物は出土していない。

S K403

7－4D区で検出した平面楕円形の土坑である。規模は0.5×0.4m・深さ約14cmを測る。断面椀型を呈し、埋土は10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂多混粘土質シルト（マンガン斑多）である。奈良時代頃の土師器が出土している。

S K404

7－4D・E区で検出した東西に長い土坑で、規模は6.4m以上×2.0m以上、深さ約0.4mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は10YR6/1褐灰色極細粒砂混粘土質シルト（マンガン斑多）である。奈良時代頃の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土している。583～591を図化した。須恵器杯蓋(583)は口径16.8cm・器高2.5cmを測る。焼成やや不良で灰白色を呈し、内面中央にナデを加える。土師器杯(584)は平城杯Cに当たり、黄褐色を呈し口径13.0cm・器高3.0cmを測る。両者は奈良時代前半に比定される。土師器甕(585～588)には口径が体部径より小さい585・586と、体部径を凌ぐ588がある。587は口縁部外面が煤ける。588は明褐色を呈し、体部外面に黒斑を有する。589は



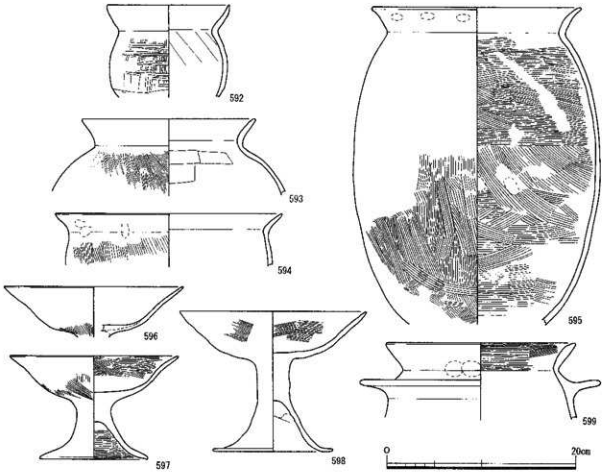
第100図　ＳＫ404出土遺物

土師器羽釜で、胎土粗で２㎜以下の砂粒を多く含む。これらは奈良時代に比定されよう。590は平瓦Ⅳ類で黄褐色を呈する。591は平瓦Ⅵa類で、淡褐色を呈し、凹面の狭端部・側端部を削る。

ＳＤ401

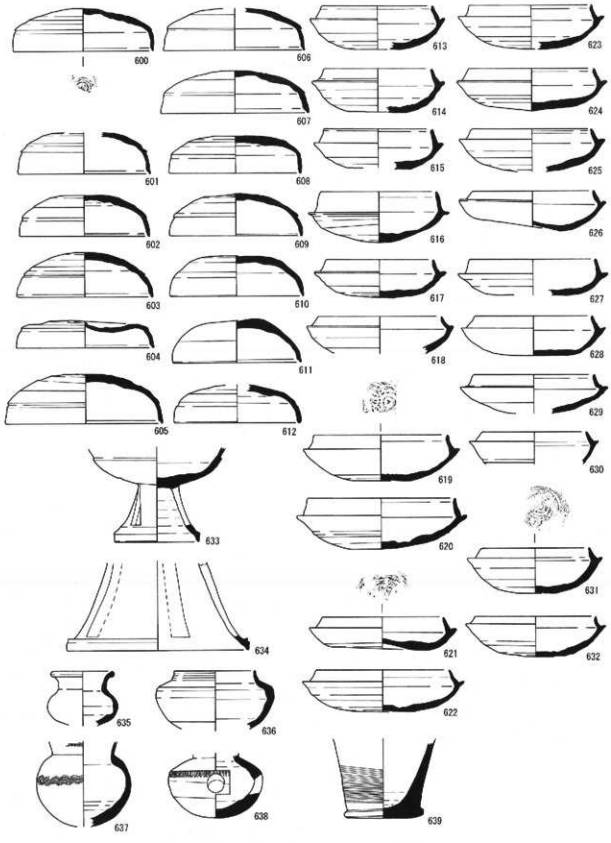
西部で検出した東西方向の溝である。規模は長さ22.5m以上・幅約2.9m・深さ約28cmを測るが、これは溝の最終堆積部分であり、下層を含めた本来の規模は深さ約45cm、幅は肩が調査区外に至るため不明である。断面皿状を呈し、埋土は上層が10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂少混粘土（マンガン斑、鉄分）、下層は上から10YR6/1褐灰色粘土（マンガン斑多、管鉄）、2.5Y6/1黄灰色粘土（マンガン斑、鉄分少）である。西部ではＳＤ402が分岐して北東に伸びる。上層から古墳時代中期末～後期の土師器、須恵器が多く出土しており、集積箇所も認められた。下層にも少量の同時期の土器が含まれている。遺物は土師器(592～599)、須恵器(600～641)を図化した。592は土師器壺で、明黄褐色を呈し胎土密。調整は体部外面ハケ後ヘラミガキ、底部外面ヘラケズリである。土師器甕(593～595)はいずれも外面タテハケで、長胴甕(595)は内面も全面ハケである。594は外面平行タタキの可能性もある。595は灰黄褐色を呈し、外面煤ける。土師器高杯(596～598)もハケ調整を基調とするものである。597は口径18.0cm・器高10.9cm、598は19.8cm・14.9cmを測る。599は土師器羽釜で、口縁

写真10　ＳＤ401遺物出土状況（西から）

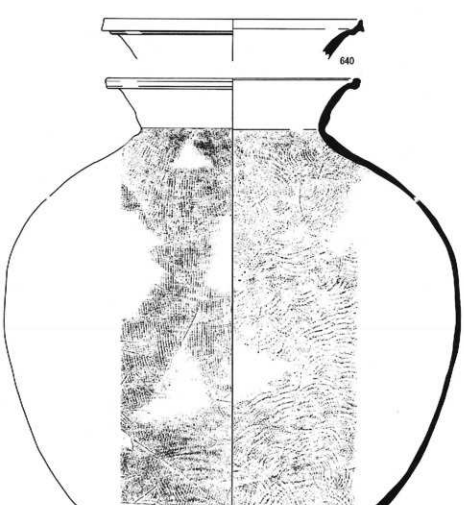


第101図　ＳＤ401出土遺物①

部が屈曲する形態は６世紀末～7世紀初頭とされる資料に類似する。600～612は須恵器杯蓋である。611は口縁部・部欠損、603～605・610が約1/2以上残存である。600・602～604・611・612は胎土密、他は粗で１～２㎜の砂粒を含む。600・607・611・612は天井部外面灰被り、606は自然釉が掛かり、内面に灰が被る。602は天井部外面に火襷が見られる。600の内面には同心円タタキが認められ、表面には焼成時に生じた気泡による小さな膨らみが多く見られる。604は歪みが大きい。605は内面中央にナデを加える。611は天井部外面中央がヘラ切り未調整。613～632は須恵器杯蓋で、620～623・625・626・628・632が約1/2以上残存である。613・615・618・621・624・631・632が胎土粗で１～２㎜の砂粒を含む。614は焼成やや不良。616・621・625・626・628・630～632は外面灰被り、613・629は外面の半分が灰被りである。619・621・631の内面には同心円タタキが認められる。617は断面褐色を呈する。622は内面中央にナデを加える。杯蓋は口径13.6㎝(611・612)～16.6㎝(605)、杯身は口径11.2㎝(630)～15.8㎝(620)と法量にかなりのばらつきがある。高杯(633)は胎土やや粗で２㎜以下の砂粒を含む。高杯(634)は全面に灰が被り、内面には別個体の端部の一部が窯着している。壺(635)は胎土やや粗で、外面上半・口縁部内面に灰が被る。壺(636)は外面肩部以下灰被りで、蓋を被せての焼成が分かる。637は頸部・体部に波状文を巡らすもので甕であろう。頸部内面・底部内面に自然釉が掛かり、色調は灰黒色、断面赤褐色を呈する。甕(638)は底部外面ナデ・ヘラケズリで、肩部に灰が被る。鉢(639)は体部外面カキ



第102図　ＳＤ401出土遺物②



第103図　ＳＤ401出土遺物③

目で、底部外面には平行タタキ状の痕跡が見られ、外面全面に灰が被る。甕(640)は胎土粗で2㎜以下の砂粒を多く含み、全面に自然釉が掛かる。甕(641)は淡灰色を呈し、胎土密、焼成良好で器壁が非常に薄い。底部外面には焼成時に付いた杯身等の口縁部痕が見られる。須恵器の時期は、杯類では杯蓋(600・608)の口縁が直立する形態、杯身(613・623等)の口縁端部の段、甕では640の口縁部形態がやや古相を示している。また杯蓋(610・611)の稜の消失、612の丸い口縁端部や、杯身(631・632等)の短い口縁部は新相といえる。ただ、611は口縁端部に明瞭に段を成し、612には稜が認められるなど、部分的な特徴からは断定できない資料である。おおむね６世紀前半のＭＴ15～ＴＫ10の資料を中心とし、前後の資料を少量含んでいるといえる。

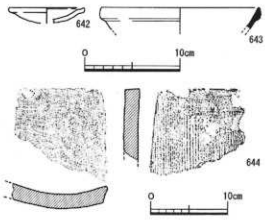
ＳＤ402

６－１Ｈ区で検出した北東－南西方向の溝で、南はＳＤ401と合流する。規模は検出長約1.0ｍ・幅約1.2ｍ・深さ約30㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が2.5Y6/2灰黄色中粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土（マンガン斑多）、下層が10YR5/1褐灰色粗粒砂少混シルト質粘土（マン

ガン斑多）である。6世紀頃の土師器、須恵器が出土している。

SD403

7－3・4C・D区で検出したもので、南北方向の溝と考えられる。規模は検出長約4.4m・幅9.1～11.1m・深さ約0.8mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上から10YR6/2灰黄褐色シルト混粘土質シルト（マンガン斑多、斑鉄、管鉄）、2.5Y6/2灰黄色シルト～粘土の互層（マンガン斑少、斑鉄、管鉄）、2.5Y6/1黄灰色細粒砂～シルト質粘土の互層（斑鉄、管鉄）で、全体的に粘土～細粒砂の互層状を呈する。上層から平安時代末までの土師器、須恵器、中国製白磁碗、丸瓦、平瓦が出土している。642～644を図化した。642は淡灰赤色を呈する土師器小皿Aである。12世紀初頭に比定される。643は中国製白磁碗で、11世紀後半から12世紀前半以降に比定される。644は平瓦Ⅵa類で淡黄褐色を呈する。



第104図　SD403出土遺物

〈包含層出土遺物〉

645は縄文土器深鉢の小片である。口縁端部下位に凸帯を巡らすもので、晩期の滋賀里Ⅳ式～船橋式に比定される。胎土粗で、角閃石等の2㎜以下の砂粒を多く含む。7－4D・E区第1面出土。須恵器杯蓋(646)は丸い天井部から小さ目の口径が推定できる。須恵器杯身(647)は焼成やや不良。土師器甕(648)は口縁端部が内側に小さく肥厚する。調整は体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。灰黄褐色を呈し、体部外面に黒斑を有する。646～648は飛鳥時代～奈良時代初頭に比定される。7－4E区第4面出土。須恵器杯身(649)、土師器壺(650)は7－4E区の東側溝掘削時に第7A層（T.P.+8.3m）から出土した。2点は正立して並んだ状況で検出され意図的なものが感じられるが、断面では掘方等は認められなかった。649は口縁部一部欠損で、胎土はやや粗で3㎜以下の砂粒を含む。時期は5世紀末、須恵器ではTK208型式に比定される。650は明褐色を呈し、底部外面が煤ける。

第105図　包含層出土遺物

参考文献

・古墳時代の遺物

溝口宏行　1991「b 車輪石　6 腕輪形石製品」『古墳時代の研究　第8巻　古墳Ⅱ副葬品』雄山閣

京嶋　覚　1993「第2節　古墳時代後半期の土器の変遷」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ』財団法人大阪市文化財協会

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

中西克宏　1988「生駒山西麓産の羽釜」『東大阪市文化財協会ニュース Vol.4 No.1』財団法人東大阪市文化財協会

・古代～中世の遺物

古代の土器研究会編　1992『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』

古代の土器研究会編　1993『古代の土器Ⅱ　都城の土器集成』

近江俊秀・岡田清一　1989「河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題－木の本遺跡SW－02出土遺物を中心として」『八尾市文化財紀要4』八尾市教育委員会文化財室

佐藤　隆　1992「第2節　平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』財団法人大阪市文化財協会

森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会

尾上　実・森島康雄・近江俊秀　1995「6.瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

高橋照彦　1995「3.緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

山本信夫　1995「(2) 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

鐘伸一郎　1995「(3) 中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

横田賢次郎・森田勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

伊藤　晃　1995「4.備前」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

市本芳三　1995「12.瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

上田　睦　1987『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上）　藤井寺の遺跡ガイドブックNo.2』藤井寺市教育委員会

第５章　瓦について

第１節　型式設定と分類

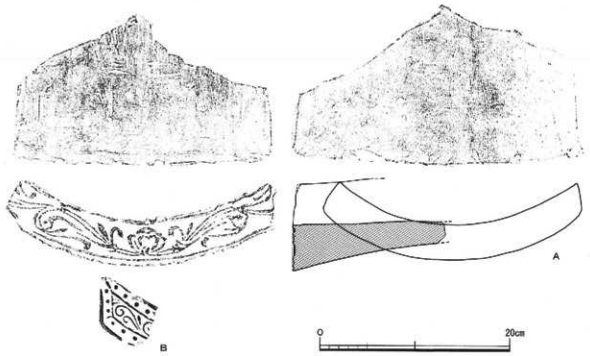
第２・３次調査では多量の瓦が出土している。しかし後世の整地に伴い集積されたものや、近世の耕作に伴うもの等、二次的な堆積状況からの出土が多くを占める。このため一括資料と捉えられる資料は少なく、また小破片が多くを占める。ここでは調査で出土した瓦類すべてについて型式設定を行う。軒瓦については小片を含めて瓦当文様で型式を設定し、胎土や焼成の異なるものについては小分類を付加した。丸瓦は行基葺きをⅠ類、玉縁式をⅡ類とし、細部形態や製作技法等で小分類を付加した。平瓦は凸面の調整による分類を基調とした。なお小破片で分類したものもあり、いくつかの型式・分類については部分的な観察から全体を窺うことになる。主な遺構については出土瓦一覧表を作成したが、丸瓦や縄目タタキの平瓦では小片からは分類できない場合が多い。

〈軒丸瓦〉

瓦当文様からⅠ型式～Ⅴ型式の５種類が確認された。

Ⅰ型式〔単弁八弁蓮華文軒丸瓦〕

瓦当は直径15.7cm・最大厚2.6cmで中心部が厚くなる。中房は小さく直径3.0cm・高さ0.6cmを測り、中房内には１＋５の蓮子（直径0.5cm・高さ0.1cm）を配する。内区径は13.1cmを測り、素文の外区との境に幅0.7cm・高さ0.5cmの上面の丸い凸線を巡らす。花弁は長さ4.8cm・最大幅2.8～3.1cmを測り、最も高くなる弁端は高さ0.6cmを測る。花弁は縁辺に稜を成す立体的なもので弁端はわずかに尖る。弁央には凸線をおき、この凸線は弁端を抜けて内・外区間の凸線に接する。弁



第106図　採集軒平瓦

間には直径0.5cm・高さ0.25cmの珠文を配している。調整は瓦当内面ナデ、周囲は縁辺に沿ったナデ。以上の観察は最も遺存良好な390で行ったものである。丸瓦部は凸面縦方向ナデ、凹面の布目密度は10本/cmで細かい。側端面は分割破面のままのものと、ケズリ・ナデを加えるものがある。胎土は密で３㎜以下の砂粒を含む。焼成状態で細分され、焼成良好で色調が暗灰色のⅠa型式、焼成良好で色調が淡灰色のⅠb型式、焼成不良で色調は淡灰色のⅠc型式がある。

Ⅱ型式〔単弁蓮華文軒丸瓦〕

弁数は不明で、花弁は幅広で高さ約0.2cmを測る。間弁の頂部には直径約1.0cmの珠文を置く。周縁は幅約1.5cm・高さ約0.9cmを測る直立縁である。色調は淡褐色、胎土はやや粗で、いわゆる生駒西麓産の胎土である。焼成やや不良。第３次調査で１点のみ確認した。

Ⅲ型式〔複弁八弁蓮華文軒丸瓦〕

瓦当は直径16.5cm・最大厚3.6cmで中心部が厚くなる。中房は直径6.5cm・高さ0.5cmを測り、中房内は１＋８＋圏線＋８＋圏線という蓮子＋圏線で構成される特異な文様である。蓮子は中央と外側が直径0.9cm・高さ0.25cm、内側が直径0.5cm・高さ0.15cm、両線は幅・高さ0.15cmを測る。内区径は13.5cmを測り、花弁・間弁は外側に向かって反り上がる。花弁は長さ3.5cm・幅3.1～3.4cmを測り、最も高くなる弁端は高さ0.5cmを測る。子葉は長さ2.2cm・幅0.6cm・高さ0.2cmを測り、弁央には凹線を施す。間弁は中房から伸びるもので長さ3.5cm・高さ0.5cmを測る。笵傷のため花弁と間弁の隙間が埋まる部分が１箇所認められる。外区は幅1.5cmを測り、直径0.9cm・高さ0.3cmの珠文を24個巡らす。丸瓦部は厚さ1.7cmを測る。調整は瓦当内面ナデ。丸瓦部は凸面縦方向ナデで、前方部横方向ナデ（板ナデ状）、凹面は布目（10本/cm）。凸面の側縁はかるく面取りし、側端部は内側に尖る。上記の観察は遺存良好な19・261で行ったものである。19・261は同笵である。色調は灰色。胎土は密で２㎜以下の砂粒を含む。焼成はやや不良。

Ⅳ型式

小片１点(539)のみの確認で不明な点が多い。文様は内・外区を区画する幅0.3cmの圏線、及び傾斜縁の内側に線鋸歯文が確認できるが、摩滅が著しく不明瞭である。色調は灰黄色。胎土は密で２㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好。

Ⅴ型式〔単弁六弁蓮華文軒丸瓦〕

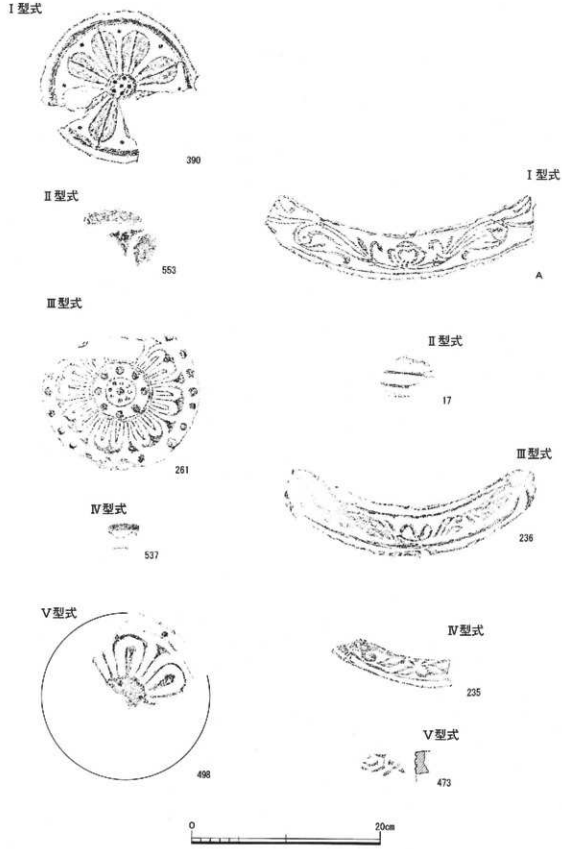
瓦当は復元径17.9cm・最大厚2.7cmを測る。中房は直径4.8cm・高さ0.3cmを測り、中房内はおそらく１＋４の蓮子を配する。蓮子は直径0.7cm・高さ0.2cmを測る。内区径は13.5cmを測る。花弁は幅0.4～0.9cm・高さ0.3～0.6cmを測る上面の丸い凸線で表現され、長さ4.4cm・幅4.1cmを測る。弁形は丸味のあるものと、角張って五角形を成すものが混在する。子葉は長さ3.5cm・幅1.4cm・高さ0.5cmを測り、弁央には浅い凹線を施す。間弁は中房から伸びるもので長さ4.5cm・高さ0.6cmを測る。周縁は低い直立縁で、幅1.6cm・高さ0.4cmを測る。周縁には直径0.7cmの珠文を巡らすが、数は不明である。以上の観察は遺存良好な498で行ったものである。色調は灰色と明褐色がある。胎土は密で１㎜以下の砂粒を少量含む。焼成はやや不良。

〈軒平瓦〉

瓦当模様からⅠ型式～Ⅴ型式の５種類が確認された。

Ⅰ型式〔忍冬唐草文軒平瓦〕

中心飾りは全体の形状としては宝珠形を保っているものの、肩が張り頂部の突出は無い。蓋状


Ⅰ型式
390
Ⅱ型式
553
Ⅲ型式
261
Ⅳ型式
537
Ⅴ型式
498
Ⅰ型式
A
Ⅱ型式
17
Ⅲ型式
236
Ⅳ型式
235
Ⅴ型式
473
0
20cm

第107図　軒瓦分類図

部、蕨手状の外郭、ハート形の内郭に分解している。蓋状部には菱形の窓があり、内・外郭の隙間左側には遊線がある。中心飾りと結節は接せず、結節は左に湾曲する。結節と蔓との境目は無く、右は結節下方がそのまま伸びて蔓に変化し、左は結節から分岐して蔓が派生している。蔓は複線で表現されている。第2結節には蕾の表現は無い。外区は上外区が一重、下外区が二重の圏線状を呈する。脇区は無いが、下外区の内側圏線が右下で脇区中位にまで回り込む。法量は弦幅26.6cm・弧深さ4.5cm・瓦当厚約4.8cmを測る。[注1]直線顎で平瓦部の厚さはcmを測る。瓦当面には横方向の木目が顕著に認められる。凹面調整は広端部約10cmが横方向、側端部が縦方向のヘラケズリ(ナデ)であるが、布目を残す。凸面調整は縦方向のヘラケズリ(ナデ)。以上の観察は第106図Aによるもので、昭和11年に当地付近で採取されたものである。[注2]唯一、瓦当の全容が知れる資料である。色調は淡灰褐色と灰色があり、胎土密で焼成は良好である。

Ⅱ型式〔重弧文軒平瓦〕

四重弧文で、施文は型挽きによると考えられる。弧線の断面は丸味を帯びた三角形を呈する。上の凹線は底が尖る。瓦当厚4.0cmを測る。調整は凹面・凸面共に縦方向のケズリが確認できる。色調は褐色。胎土はやや粗で、2㎜以下の砂粒を多く含む。焼成良好。第2次調査で小片が1点のみ出土している(17)。

Ⅲ型式〔均整唐草文軒平瓦〕

236の1点のみ確認された。文様は形式化した均整唐草文であるが、両側部は摩滅が著しく詳細は不明である。中心飾りは丸みを帯び変形した凹字形を成す。唐草文第一単位は中央の主葉が最も長く、主葉・支葉は下に反転する。第二単位より外側については不明瞭である。内・外区を画する界線は幅0.3~0.7cm・高さ0.3~0.5cmで上面は丸く、左右の上角は途切れるものと考えられる。外区は素文で幅0.2cmを測る。周縁は素文で、幅・高さは向かって右が1.0cm・0.6cm、左が0.5cm・0.3cm、上下は幅が無く凸線状を呈する。上弦幅cm・下弦幅26.4cm・弧深cm・瓦当厚約4.9cmを測る。直線顎で平瓦部の厚さは2.3cmを測る。製作技法は特徴的なもので、瓦当と顎の境に接合痕が認められず、瓦当から顎前半部にかけてをL字形に一気に作っている可能性が高い。そして平瓦を当て、顎後半部の粘土を足しているが、顎前半部との接合部には隙間が生じている。平瓦部広端部凸面の顎接合部には横方向の板ナデ状工具痕が認められる。表面調整は、凹面は布目で、斜め方向の糸切り痕が明瞭に残り、前から約7cmは横方向に細い単位のヘラケズリを施す。凸面は縦方向ナデで、縄目がわずかに残る。側面はヘラケズリで、凹面側は2面に面取りする。色調は灰色。胎土密で2㎜以下の砂粒を含み、焼成はやや不良。

Ⅳ型式

235は瓦当左側下半部の資料である。上・下に反転する子葉や、飛雲文とも見える部分があるが、文様の詳細は不明である。文様は幅0.3cm程度の上面平らな凸線で表現され、高さは0.1cm程度と低い。内・外区を画する界線は幅0.2cm・高さ0.1cm程度の凸線で、外区は素文で幅0.2cmを測る。界線は左端下部で途切れる部分があり、ここには外区に線鋸歯文風の文様が認められるが、箔傷の可能性もある。周縁は断面三角形の凸線状を呈するが、素文で幅0.7cm・高さ0.3cmを測る個体もある。調整は、凸面はナデで、縄目が明瞭に残る。上面は平瓦からの剥離面で、ここには斜め方向の工具痕が認められる。色調は暗灰色。胎土は密で1㎜以下の砂粒を少量含み、焼成はやや不良。

Ⅴ型式

473は、一応軒平瓦としたが断定はできない。軒平瓦とすると瓦当上端部と考えられる。小片のため文様は不明。文様は幅0.3cm・高さ0.2cm程度の上面平らな幅広の凸線で表現されている。残存部からはかなり複雑な文様が窺える。色調は灰黄色。胎土は密で1㎜以下の砂粒を少量含み、焼成良好。

〈丸瓦〉

行基葺き丸瓦をⅠ類、玉縁式丸瓦をⅡ類としたが、広端部の資料では分類はできなかった。いずれも内面は布目である。Ⅰ類は調整技法や形態によりⅠa～Ⅰc類に細分される。Ⅱ類は玉縁の形態や調整技法等によりⅡa類～Ⅱe類に細分される。釘穴を有する破片が1点(414)出土している。

Ⅰa類

凸面調整は縄目タタキをナデ消すものである。ほぼ完全に縄目が消えているものや、雑で不完全なものがあり、後者が多い。

Ⅰb類

凸面調整は縄目タタキをナデ消すもので、狭端部側縁角を斜めに切り落とす形態である。色調は灰色～灰黄褐色。胎土は粗で3㎜以下の砂粒を多量に含み、焼成良好～やや不良である。法量は、長辺約37.0cm・広端幅約16.8cm・狭端幅12.0～13.2cm・広端高約9.2cm・狭端高約6.1cm・厚さ1.1～1.9cmを測る。凸面の縄目タタキは13本/5cmで、部分的に残る。凹面の布目密度は7本/cmである。凹面の広端部・狭端部を削り、側端面の凹面側角を面取りする。幅3cm程度の粘土帯が確認できるものがある。狭端部側縁の切断部長は2.7～5.7cmと一定しない。SW303の丸瓦はこれに当たる。

Ⅰc類

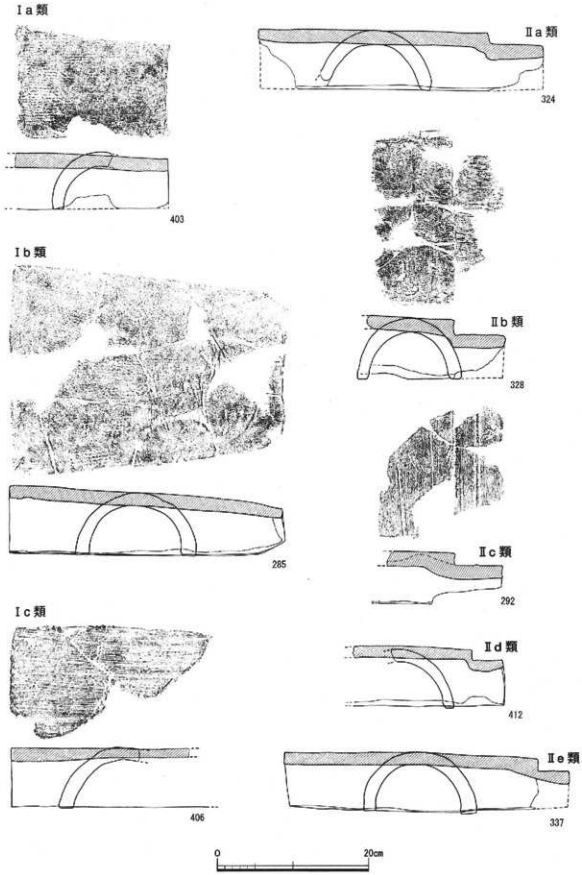
凸面調整がハケのもの。色調は黄灰色～淡褐色。胎土密で焼成良好。凸面は6本/cmのタテハケであるが、その前に格子タタキを施している可能性がある。凹面の布目密度は8～9本/cmである。広端・狭端部にケズリ等は加えない。ハケ調整が認められるのはこのⅠc類のみであり、Ⅱ類にはハケ調整はないと考えられる。個体数は少ない。

Ⅱa類

玉縁が長く水平に伸びるもので、玉縁凸面ナデのもの。凹面の玉縁取り付け部には段を成す。色調は灰色～明褐色を呈し、胎土密で1㎜以下の砂粒を含み、焼成良好である。凸面は縄目タタキ後ナデ。凹面の布目密度は8本/cmで、側端部を削る。玉縁部は長さ6.7～7.1cmを測り、凹面狭端部約2cmを削る。

Ⅱb類

玉縁が長く水平に伸びるもので、玉縁凸面布目のもの。凹面の玉縁取り付け部は段を成し、接続部分の器壁が薄くなる特徴があり、ここで割れた資料が多い。色調は暗褐色～灰黒色が多く、明褐色のものもある。胎土密で1㎜以下の砂粒を含み、焼成良好である。凸面は縄目タタキ後ヨコナデで側端部を削る。凹面は布目密度7～8本/cmで側端部を削る。玉縁は長さ約6.7cmを測る。凸面布目で、全面、あるいは一部にナデ・ケズリを加えるものがある。玉縁凹面は狭端部ケズリ、又はナデである。


Ⅰa類
403
Ⅱa類
324
Ⅰb類
285
Ⅱb類
328
Ⅱc類
292
Ⅰc類
406
Ⅱd類
412
Ⅱe類
337
0
20cm

第108図　丸瓦分類図

Ⅱc類

玉縁が長く水平に伸びるもので、玉縁凸面に水切り突帯を有するもの。凹面の玉縁取り付け部はなだらかな傾斜である。色調は明褐色を呈し、胎土密で1㎜以下の砂粒を少量含み、焼成良好である。凸面は縄目タタキ後ヨコナデで、側端部角を面取りするものがある。凹面の布目密度は8～9本/cmで、側端部0.5～1cmを削る。玉縁は長さ5.9～6.6cmを測り、凸面(回転)ヨコナデで、狭端部が肥厚し、狭端面が凹状を成すものが多い。玉縁凹面はナデを加えるものがあり、狭端部1cmを削るものが多い。連結面から2.8～3.0cmの部位に水切り突帯を有し、突帯は幅3～4㎜を測り、断面は台形と三角形が認められる。連結面は波打ち、幅1.5～1.9cmを測る。肩部凸面が肥厚するものや、段を成すものがある。

Ⅱd類

玉縁が短く水平に伸びるもので、凹面の玉縁取り付け部には段を成す。色調は灰色を呈し、胎土やや粗で1㎜以下の砂粒を含む。凸面タテナデで、肩部ヨコナデ。凹面は布目密度9本/cmで、布目は段部分までで玉縁凹面には及んでいない。凹面側端部は削る。側端面は分割破面が残る。玉縁は長さ2.7～4.2cmを測り、凸面ヨコナデで、凹面は側端部ケズリ、狭端面は丸く収める。個体数は少ない。

Ⅱe類

玉縁が水平かやや下向きに短く伸びるもので、凹面の玉縁取り付け部はなだらかな傾斜である。色調は暗褐色～明褐色を呈し、胎土密で2㎜以下の砂粒を含み、焼成良好である。凸面は縄目タタキ後ナデで、側端部を削るものは少ない。凹面は布目密度8～10本/cmで、側端部を削るものが多い。玉縁は長さ3.6～5.5cmを測り、狭端面は未調整とケズリ・ナデがある。

〈平瓦〉

凸面の調整等によりⅠ類～Ⅷ類に分類した。Ⅲ類はタタキによりⅢa類・Ⅲb類に細分される。Ⅳ～Ⅷ類は縄目密度によりⅣa類～Ⅳc類、Ⅶa類～Ⅶc類、Ⅷa類～Ⅷc類に細分される。

Ⅰ類〔凸面ナデ、凹面布目〕

全容を知れる個体は無い。凸面のナデはタテ・ナナメナデがある。桶巻き作りで、側縁を削るものと、分割破面を残すものがある。凹面の布目密度は約10本/cmで細かい。狭端部の破片についてはⅡ類の可能性がある。個体数は少ない。

Ⅱ類〔凸面ナデ+有軸綾杉文タタキ、凹面布目〕

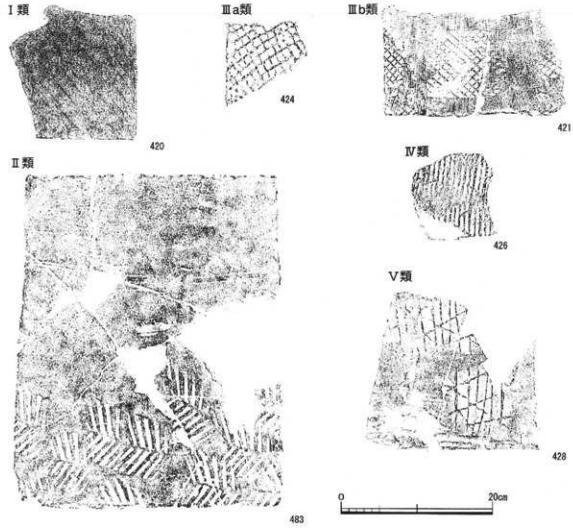
確認できた個体では、有軸綾杉文タタキは凸面の広端側にのみ施されている。原体幅は約7.8cmで、すべて横方向に叩いている。桶巻き作りであり、切断は凹面側からで、側端面は分割破面のまま未調整のものが多い。側端面を削る場合も一部分で、一気に削るのではなく細かい単位で削る物がある。凹面の側縁部に分割界線が残るものがあり、ここには布目が入り込んでいる。凹面には幅3～4cmの板から成る模骨痕が残り、布目密度は9～10本/cmで細かい。糸切り痕が残るものがある。広端部・狭端部の端はナデを加える。凸面は横方向のナデで、細かい条線が認められる。胎土はやや粗で、3㎜以下の砂粒を含む。色調は灰色系と褐色系があり、焼成状況による差であろう。焼成は良好で硬いものとやや不良のものがあり、後者が多い。法量は、長辺44.3cm・広端幅31.2cm・狭端幅29.5cmのもの(483)と、約40cm・約30cm・約27.5cmのもの(484～486)がある。前者は平面長方形に近い。厚さは1.2～2.0cmを測る。

Ⅲa類〔凸面格子タタキ〕

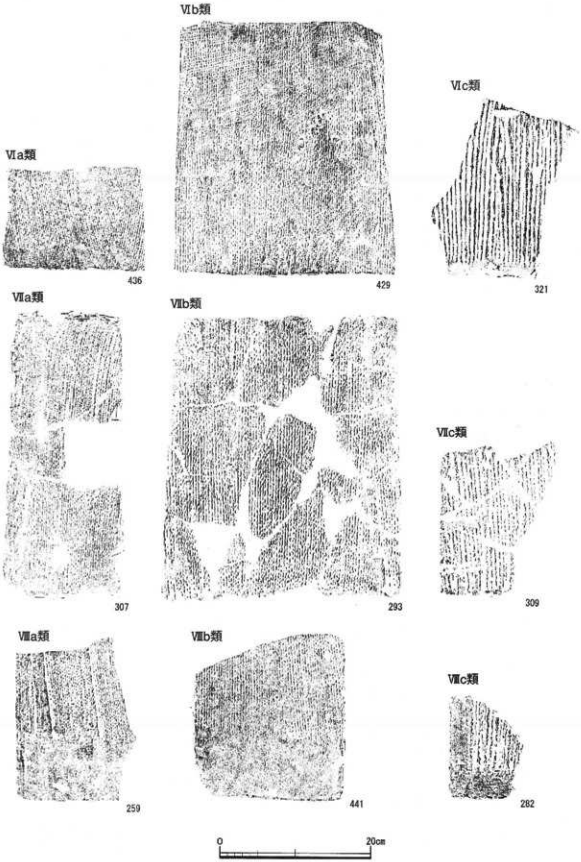
色調は灰褐色～灰色を呈し、胎土は粗で５㎜以下の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。凸面は一辺約６㎜の深い格子タタキで、凹面は布目であろうが不明である。厚さ2.2～2.8㎝を測り厚い。個体数は少ない。

Ⅲb類〔凸面格子タタキ＋ハケ、凹面布目〕

色調は灰黄色～灰褐色を呈し、胎土密で砂粒はほとんど含まれず、焼成良好である。厚さは1.6㎝程度を測る。凸面調整は、①一辺３㎜程度の格子タタキ→②６本/㎝のタテハケ→③一辺６㎜程度の格子タタキというものである。②のハケは凸面全面に及び、③の格子タタキは部分的で重なることはないようである。①・③の格子目は原体に対して45度振っている。③の原体は横約9.8㎝・縦約8.8㎝を測る方形であることが確認できる。なお②→①と思われる破片も第３次ＳＫ301で１点確認している。凹面の布目密度は７～８本/㎝で粗い。凹面には分割界線や模骨痕の見られるものがあり、桶巻き作りである。また斜め方向の糸切り痕が認められるものもある。広端・狭端・側縁は断面ほぼ方形に削る。色調・胎土・焼成や調整に至るまで丸瓦Ⅰc類と共通性があり、ハケ原体は同じと考えられ、セット関係は確実である。



第109図　平瓦分類図①



第110図　平瓦分類図②

Ⅳ類〔凸面平行タタキ＋斜凸線タタキ、凹面布目〕

色調は灰黄色～褐色を呈し、胎土密で１㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。凸面のタタキは、縦方向の平行タタキに斜め方向の交差する凸線を組み合わせたものである。タタキは広端部の端には及んでいない。凹面の布目密度は10本/㎝で細かく、ナデを加えている。斜め方向の糸切り痕が認められ、側端部約１㎝を削る。側端面は削る。個体数は少ない。

Ⅴ類〔凸面平行凸線タタキ＋斜凸線タタキ、凹面布目〕

色調は褐灰色系で、胎土密で２㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。厚さ2.5～3.0㎝で厚い。凸面のタタキは縦方向の凸線と、斜め方向の交差する凸線を組み合わせたもので、Ⅳ類の平行タタキの溝を幅広にしたものといえる。凸線の幅は２～４㎜で、タタキ原体は横8.6㎝・縦9.2㎝以上を測る。凹面の布目密度は10本/㎝で細かく、凹面の側端1.0～1.5㎝、及び側端面を削る。個体数は少ない。

Ⅵ類〔凸面縄目タタキ、凹面布目〕

凸面縄目タタキ、凹面布目の平瓦である。基本的には凹面の広端部・狭端部・側端部を削るか、またはナデる。凹面に糸切り痕を残すものが多い。側端面は１面のものが多いが、２～３面に削るものもある。また側端面の凹面側角を面取りするものが多い。凸面にナデを加えるものも少量ある。縄目の密度（本/５㎝）により、Ⅵa類（19本以上）、Ⅵb類（15～18本）、Ⅵc類（14本以下）に分類した。

Ⅶ類〔凸面縄目タタキ、凹面布目〕

Ⅵ類と同じ調整であるが胎土が異なるものである。色調は灰色～灰黄色が多く、褐色系のものもある。胎土は粗で３㎜以下の砂粒を非常に多く含む。焼成はほぼ良好。法量は長辺37.0～38.0㎝・広端部幅27.7～29.7㎝・狭端部幅26.2㎝を測る。凸面は縄目タタキで、ナデ・ケズリは基本的に加えない。凹面の布目密度は約９本/㎝である。凹面広端部・狭端部・側端部の１～２㎝を削るものが多く、広端部については中央部分や片側のみを削るものがあり、雑な調整といえる。広端面・狭端面は内傾する面を成し、側端面は１～２面に削る。なお広端面・狭端面が凸面側に反るものや、側端部の縄目・布目が消えている部分があり、製作台から瓦をはずす際の痕跡であろう。これらの特徴から一枚作りの平瓦であることが分かる。また広端部が肥厚するものが多く、乾燥の際広端部を下にして立てていたことが推察される。ＳＷ303の平瓦はこれに当たる。小分類はⅥ類に準じる。

Ⅷ類〔凸面縄目タタキ＋ナデ・ケズリ、凹面布目〕

凸面の広端・狭端・側端に幅広にナデ・ケズリを加え、縄目タタキを消すもの。小分類はⅥ類に準じる。色調は灰色が多く、褐色系のものもある。胎土は密で焼成はほぼ良好。凸面広端部４～９㎝、狭端部約９㎝をナデて、縄目タタキをほぼ完全に消す。凹面の布目密度は９本/㎝である。凹面は広端部１～６㎝、側端部１～４㎝をナデ、中央部に部分的にタテナデを加える。側端面は１～２面に削り、凹面側角を面取りする。広端・狭端面は内傾する面を成す。狭端部の破片の中には側端部の狭端側約６㎝を切り取るものがある。Ⅷc類には凸面側端部のみ削るものがある。

〈道具瓦〉

面戸瓦が１点(246)、用途不明平瓦が１点(439)出土している。その他ＳＷ303出土の304や307は平瓦を分割した熨斗瓦の可能性がある。

第2節　考察

調査では多種多量の瓦が出土している。前節で軒丸瓦５種類、軒平瓦５種類、丸瓦８種類、平瓦15種類に分類した[注3]。しかし前述のように一括資料として捉えられる資料は少なく、このため種類毎の評価を中心に考察してみたい[注4]。

表９　主要遺構別の瓦出土状況

		第２次調査																第３次調査								
		水田101	鳥畑101	水田202	水田203	SK306	SD307	SW301	SW302	SW303	SW304	基壇版築層	整地2	SK404	SP408	第1面	水田103	SD101	水田201	SD207	SK301	SD321	SD403	SK404
軒丸瓦	Ⅰa		○										○											
	Ⅰb												○			○								
	Ⅰc								○				○											
	Ⅱ																			○				
	Ⅲ				○			○	○				○											
	Ⅳ															○								
	Ⅴ											○				○		○	○	○				
軒平瓦	Ⅰ	○			○	○			○							○	○			○	○			
	Ⅱ				○																			
	Ⅲ							○																
	Ⅳ			○				○												○		○		
	Ⅴ													○										
丸瓦	Ⅰa	△	△	△	△		△	○	○		○		○	○		△	△	△	△	○	△		△	
	Ⅰb	○	○	○	○		○		○	○	○					○				○				
	Ⅰc	○			○			○	○				○	○			○			△	○			
	Ⅱa	△	△	△	△		△	○				○	○			○	△	△	△	○	△		○	△
	Ⅱb				○			○				○									○			
	Ⅱc	○						○	○	○	○	○								○				
	Ⅱd	○	△	△	△		△		○				○	○		△	△	△	△	△	△		△	△
	Ⅱe	△	△	△	△		△	○	○			○	○			△	△	△	△	△	△		△	△
平瓦	Ⅰ	○			○			○	○				○	○		○								
	Ⅱ	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
	Ⅲa								○				○	○		○				○				
	Ⅲb	○	○	○	○		○	○	○				○	○		○	○	○	△	○	○		○	
	Ⅳ							○	○				○			○	○			○				○
	Ⅴ							○	○				○			△								
	Ⅵa	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○		○	○		○	○
	Ⅵb	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○
	Ⅵc	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○		○	○	○		○	○		○	○
	Ⅶa	○	○	○	○		○			○	○	○				○					○			
	Ⅶb	○	○	○	○		○		○	○						○	○	○		○	○		○	
	Ⅶc	○	○	○	○		○		○	○						○					○			
	Ⅷa	○	△	○	△		△	○					△			△	△	△	△	△	△		△	△
	Ⅷb	○	△	△	○		△		○		○		○	○		△	○	△	△	○	△		△	△
	Ⅷc	△	△	△	△		△		○				△	○		△	△	△	△	△	△		△	△
面戸瓦								○																
塼			○		○	○														○				

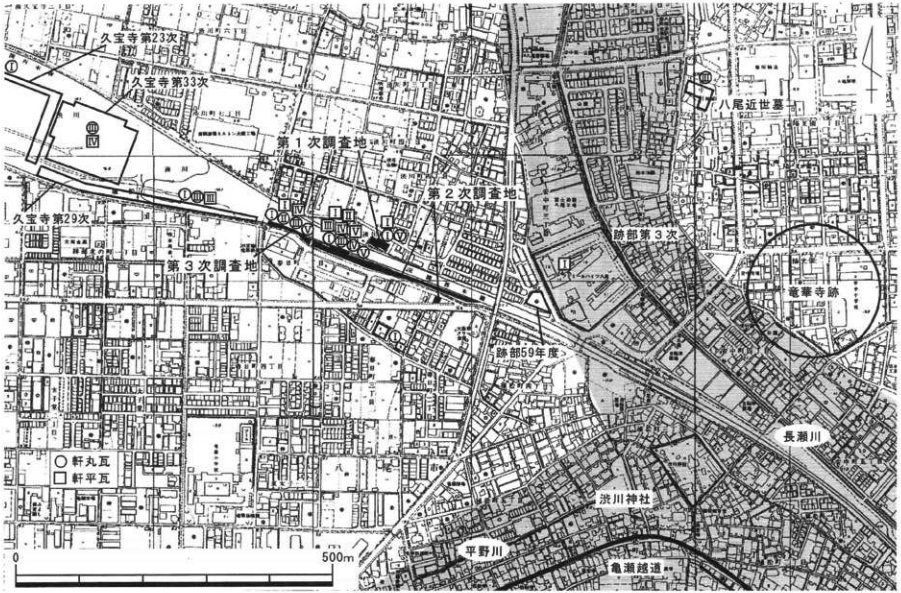
※○印は出土を確認。空白は（その種類固有の特徴を示す部分が）含まれないことを確認。△印は類別が不可能。

〈軒瓦〉

軒丸瓦Ⅰ型式は、藤澤一夫氏により第一期類単弁紋系類讃川寺式(向原寺式)と設定され[7.5]、摂河泉地域の高句麗系軒丸瓦の標識として古くから有名な瓦である。弁間に珠文を配し、周縁に凸線を巡らせる特徴がある。7世紀初頭建立の奈良県明日香村豊浦寺で採用された軒丸瓦の系統を引く瓦で、類例は大和以外では藤井寺市の衣縁廃寺や船橋廃寺等、中河内地域に分布しているが、同笵[7.6]品のものは確認されていない[7.7]。またやや時期の下るものとしては東大阪市河内寺に類例が見られる[7.8]。豊浦寺の時期からみて7世紀前半に比定されるもので、渋川廃寺の創建瓦と考えられる[7.9]。なおセットとなる軒平瓦は無いと考えられる。整地2やSW302、近世の耕作土から計9点が出土した今回の調査地を分布の中心として、第1次調査地[7.10]の他、西方の久宝寺遺跡[7.11]、南方の跡部遺跡[7.12]でも出土している。

軒丸瓦Ⅱ型式とした単弁型式の軒丸瓦は、第3次調査の小片1点のみの確認で不明な点が多い。間弁頂部に珠文を置くという特徴が注目され、原山廃寺式[7.13]との関連が窺える。原山廃寺式軒丸瓦は旧大和川右岸の大県郡・安宿郡を中心に、志紀郡、高安郡、若江郡等に分布する重弁型式軒丸瓦で、大和では認められないことから、非常に在地的な瓦と位置付けられている。原山廃寺式は単弁型式の鳥坂寺Ⅰ式を祖型とし、7世紀中葉～第4四半期に、ⅡA型式・ⅠBa型式・ⅠBb型式・ⅠCa型式と、間弁に珠文を置く特徴を備えた軒丸瓦の変遷が考えられている[7.14]。ただこれらは子葉を有する重弁型式である。軒丸瓦Ⅱ型式は、祖型である単弁型式の鳥坂寺Ⅰ式と、原山廃寺式の中間的な位置付けを考えたい。この原山廃寺式軒丸瓦は有軸綾杉文タタキの平瓦を伴う例が多いことが指摘されており[7.15]、このことは渋川廃寺にも当てはまる。なお原山廃寺式軒丸瓦は西方の久宝寺遺跡[7.16]で出土している。

軒丸瓦Ⅲ型式は、中房内の蓮子・圏線の重層的な文様構成、子葉の凹線、ならびに外区に巡る珠文という特徴が新羅的な要素と捉えられる。文様構成に類似性が認められるものとして、平安時代中期Ⅱ(995～1047)に比定される法隆寺軒丸瓦[7.17]50A型式がある。これは中房の珠文・圏線の構成が1＋圏線＋8というもので、外区の珠文は20個、線鋸歯文を施す直立縁を有するものである。同じく平安時代中期Ⅱの法隆寺38A型式との類似性も高い。これは中房の珠文が1＋7＋11、外区内縁線鋸歯文というもので、法隆寺式軒丸瓦(37型式)の復古瓦である。弁区が注目され、法量的にも近く、弁形・間弁が類似し、Ⅲ型式に見られる子葉に凹線が入るという特徴についても酷似している。また、法隆寺では白鳳時代後期に37型式の鋸歯文を珠文に彫り変えることが知られており(37Db型式)、Ⅲ型式は37Db型式の影響も考えられる。SW301・302、整地2の他、近世の耕作土等から6点出土しており、他に久宝寺遺跡[7.18]や八尾近世墓[7.19]で出土している[7.20]。この軒丸瓦Ⅲ型式は、胎土・焼成の様相から軒平瓦Ⅰ型式とのセット関係が考えられる。軒平瓦Ⅰ型式は藤澤氏により第一期類B類複弁紋系類鵤波百済寺式(斑鳩寺式)に比定されたものである[7.21]。法隆寺系軒瓦であるが、文様が形式化しており細部で表現が異なっている。文様の構成は白鳳時代前～後期に位置付けられる法隆寺216C型式に類似しているが、中心飾りは左右反転している。時期は判確にしえないが、法隆寺216C型式より下る8世紀前半頃に位置付けられよう。SW302、第1次調査地、及び東方の跡部遺跡[7.22]で出土している。さらに軒平瓦Ⅲ型式についてであるが、瓦当面、特に端部の摩滅が著しいため文様が不明瞭で詳細は不明である。最も文様の類似するものは、平安時代中期Ⅰ(925～995)に比定される法隆寺軒平瓦242F型式である。これは中心飾りの形状


久宝寺第23次
久宝寺第33次
第１次調査地
第２次調査地
久宝寺第29次
第３次調査地
八尾近世墓
跡部第３次
竜華寺跡
跡部59年度
長瀬川
渋川神社
平野川
亀瀬越道
軒丸瓦
軒平瓦
0
500m

第111図　軒瓦分布図

が対向C字形で、唐草文第一単位は主葉より第二子葉が長く伸び、外区に珠文を配するものである。Ⅲ型式の方が唐草の巻き込みは明確であるが、中心飾りは他に例を見ない形状である。製作技法が特徴的で、瓦当から顎前半部にかけてをL字形に一気に作り平瓦を嵌め込むもので、新羅の影響が指摘されている。下総国分寺跡の宇瓦に似た技法が見られる。[123]今回のSW301からの1点が渋川廃寺では初例となる。久宝寺遺跡第29次調査出土の小片はこれであろう。時期は断定できないが、8世紀後半からあるいは平安時代に下る可能性があろう。これら軒瓦3点の存在から、渋川廃寺と法隆寺との密接な関係が窺える。法隆寺式軒瓦の分布は、天平19年(747)の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる法隆寺所有の庄倉・水田所在地と一致する場合が多く、渋川郡にも寺領を所有していたことが記され示唆的である。[124]未確定な軒丸瓦Ⅲ型式・軒平瓦Ⅲ型式の時期についてであるが、類似性を指摘した法隆寺の瓦はそれぞれ平安時代中期Ⅱ・中期Ⅰに位置付けられている。同系列上の瓦と考えた場合、どちらが祖型になるのかという問題がある。軒丸瓦Ⅲ型式は整地2から出土しており、共伴土器からみて8世紀代には収まるものと考えている。このことからⅢ型式は、復古瓦である法隆寺38A型式との関係については熟考を要するが、少なくとも50A型式の祖型となる可能性がある。軒平瓦Ⅲ型式はSW301からの出土で、共伴土器からみて10世紀代に収まるものである。法隆寺軒平瓦242F型式の年代とほぼ一致するといえる。ただSW301は瓦集積であり、実際に屋根に葺かれていた時期はさらに遡ること、またSW301に軒丸瓦Ⅲ型式が含まれていることを考慮すると、こちらも軒平瓦Ⅲ型式が祖型となる可能性がある。

軒丸瓦Ⅳ型式は第2次調査の側溝掘削時に小片が1点出土しているのみで、詳細は不明である。周縁の線鋸歯文から、7世紀後半～8世紀前半の法隆寺式の可能性を指摘しておくにとどめる。

軒丸瓦Ⅴ型式は、周縁にある珠文や子葉に凹線を置くという特徴から、Ⅲ型式の影響を受けているとも考えられる。版築層から1点、近世耕作土から4点出土した他、第1次調査で1点、久宝寺遺跡第33次・第52次[125]で1点ずつ出土している。

軒平瓦Ⅱ型式は四重弧文であるが、第2次調査近世水田から小片1点のみの出土で詳細は不明である。

軒平瓦Ⅳ型式はおそらく均整唐草文と思われるが詳細は不明である。第2次SW301から1点、中世・近世の遺構から小片4点が出土した他、久宝寺遺跡第33次で1点出土している。

軒平瓦Ⅴ型式は第2次SK404からの小片1点のみの出土で詳細は不明である。SK404からは遺存良好な平瓦Ⅱ類の資料が数点出土しており、これに共伴する可能性がある。

なお八尾市史等[126]では軒平瓦がもう2点紹介されている。1点は平城6641型式に類似し、本薬師寺と同笵の可能性が指摘されている偏行唐草文軒平瓦。もう1点は平城6665型式に類似する均正唐草文軒丸瓦(第106図B)である。いずれも現在は所在不明である。拓本資料によると前者は「教興寺出土」とあり、渋川廃寺の瓦とするには信憑性が低いと思われ、本報告では掲載しなかった。後者は「宝積寺址」とある。昭和11年に藤澤氏により「考古学」で紹介され、奈良後期の唐草文軒平瓦とされた瓦と思われる。[127][128]

〈文字瓦〉

20は平瓦Ⅰ類で、凹面にヘラ描きにより文字を書いた文字瓦である。文面は右が「下主寸」、左が「塔分」である。[129]「下主寸」は(しものすぐり)と読め、「村主(すぐり)」のうち「村」の木偏を省画して「寸」とし、さらに逆転させたものと理解できる。「下」は地名。「村主」は渡来系氏族に与

えられた姓で、この下に名が続く可能性がある。「塔分」は塔に用いられるという意味を表している。全体としては、[下主寸某が、塔に葺くための瓦を寄進した]という内容と考えられる。「下」は当地付近では河内国安宿郡資母郷（現在の柏原市国分）が考えられ、またここを本拠地とする「下村主」もみえる。『続日本紀養老四年(720)６月』に「河内国若江郡人正八位上河内手人刀子作広麻呂。改賜_下村主姓_。免_雑戸号_。」とある。河内国若江郡の人、正八位上の河内手人刀子作広麻呂が、下村主の姓を賜い雑戸の号を免ぜられる記事である。刀子作とあるように河内手人広麻呂は金工に従事していたことが分かり、下村主は金工に従事していた氏族である。彼らが塔に使用する金具を製作し、寄進した瓦にその名を留めたという想定ができる。凸面調整はナデで、縄目タタキをナデ消しているものかもしれない。軒平瓦の可能性がある。文字はヘラ描きにもかかわらず優れた書体であるという評価をいただいている。文字瓦は他に２点出土しているが、共に文字・文面は不明である。なお東大阪市新上小阪遺跡において、底部外面に「村主」の墨書がある９世紀前半頃の土師器椀が出土している。

〈丸瓦・平瓦〉

丸瓦ではⅡb類が特筆され、玉縁凸面に布目が認められるものである。この特徴を持つ丸瓦については北村圭弘氏による報告があり、凸形台による一枚作りとされている。北村氏による成形技法を要約すると、布を敷いた凸形台に粘土板をのせ、丸瓦部をおおむね成形した後、凸面側に折り返した布の上から凹型状工具で押圧して玉縁部を作り出す。そのため玉縁狭端面にも布目が付くことになる。北村氏がまとめられた特徴にⅡb類を照らし合わせると、連結面にも布目が及ぶものがあることや、丸瓦部断面が楕円形を呈すること(328)、また暗灰色～黒灰色を呈するものが多い点が共通する。Ⅱb類は玉縁狭端面を削るかナデるため、玉縁狭端面の布目については不明であるが、同じ成形技法と推察される。玉縁部凸面布目丸瓦は滋賀県でのみ確認され、また近江国衙跡を中心に分布することから、近江国衙が掌握する瓦工房で考案されたと指摘されている。渋川廃寺と近江地方に何らかの関連があったのであろうか。大脇　潔氏によると、丸瓦一枚作り技法はあまり普及せず、奈良時代～平安時代の例が知られるのみであるという。

丸瓦Ⅱc類は玉縁凸面に水切り突帯を有するものである。大脇氏により玉縁の成形には型板を回転させる技法が指摘されている。水切り突帯は連結面から2.8～3.0cmとほぼ一定の距離に位置し、回転による横方向の条痕も観察できる。基壇版築層内の瓦敷きに使用されたものが多くを占めている。この瓦敷きからは丸瓦Ⅰ類（行基葺き）と認定できる狭端部は出土しておらず興味深い。この基壇上の建物に葺かれた丸瓦はＳＷ303のⅠb類と考えられ、再建に当たって使用する瓦が大きく変化しているようである。丸瓦Ⅰb類は狭端部側縁角を斜めに切り落とす形態で、これとセットとなる平瓦はⅦ類である。いずれも３㎜以下の砂粒を非常に多く含む粗い胎土で、雑な調整といえ、奈良時代後半以降の時期を考えている。丸瓦Ⅰb類・平瓦Ⅶ類は、第１・２面の近世遺構以外の遺構からの出土は少ない。昭和８年、明山氏により紹介された、「田中に野井戸を掘った時出土した」丸瓦はこのⅠb類である。

平瓦は量的に見ると縄目タタキのⅥ類が圧倒的に多くを占め、渋川廃寺の中心となる瓦といえる。量的にこれに続くのは同じく縄目タタキのⅧ類であるが、ＳＷ303出土が多くを占めており、これを除くと有軸綾杉文タタキのⅡ類と格子タタキのⅢb類となる。いずれも桶巻き作りの平瓦であり、どちらかが創建時に採用されたと考えられる。Ⅱ類はＳＫ404から遺存良好な資料が多

く出土しているが、共伴する丸瓦を見ると玉縁式丸瓦である Ⅱ類が小片１点のみであることから、平瓦Ⅱ類には行基葺きの丸瓦Ⅰ類が伴うと考えられる。Ⅲb類は同じハケを施すⅠc類とのセットが確実である。Ⅱ類とⅢb類の出土傾向は非常に似ており、同時に使用された時期もあった可能性が高い。有軸綾杉文タタキ平瓦は先述したように原山廃寺式軒丸瓦に伴うことが指摘され、河内国大県郡・安宿郡を中心に分布している。また平行タタキの平瓦Ⅳ類も柏原市鳥坂寺に類例が認められ、渋川廃寺はこれらの地の寺院に瓦を供給した造瓦工人集団と密接に関わっていたことがわかる。一方、Ⅲb類に見られるハケ調整は河内では稀であり、他の地域の造瓦工人集団も存在する。有軸綾杉文タタキは７世紀前半末の成立が考えられており、渋川廃寺創建時に存在したものかどうかは判断しかねる所である。基壇版築層の瓦をみると、平瓦は縄目タタキのⅥ類が多く、少量のⅡ類綾杉文タタキがあり、格子タタキや平行タタキの平瓦Ⅲ～Ⅴ類、そして行基葺き丸瓦Ⅰ類が含まれていない。このことから再建前にはⅥ類とⅡ類が主に採用されていたと考えられ、Ⅲ～Ⅴ類の採用は終わっていたという推測が成り立ち、創建軒丸瓦であるⅠ型式には格子タタキや平行タタキの平瓦Ⅲ～Ⅴ類が伴うのではなかろうか。そして、有軸綾杉文タタキ平瓦が原山廃寺式軒丸瓦に伴うことから、原山廃寺式との関連が窺える軒丸瓦Ⅱ型式には、平瓦Ⅱ類が伴うと考えている。

註

註１　吉岡　哲　1978「大阪府八尾市内出土屋瓦について」『古代研究16』元興寺文化財研究所考古学研究室

註２　藤澤一夫　1936「學界近事」『考古學　第七巻　第十號』東京考古學會

註３　第４次調査で新たに重圏文軒丸瓦が出土している。
金親清夫　2004「Ⅶ. 渋川廃寺第４次調査（ＳＫＴ2003－４）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』財団法人八尾市文化財調査研究会

註４　瓦については、大脇　潔氏をはじめ、摂河泉古代寺院研究会の諸氏、森　郁夫氏、その他の方々に実見していただいた。本考察はその際の御教示によるところが多大である。

註５　藤澤一夫　1941「摂河泉出土古瓦の研究－編年的様式分類の一試企－」『佛教考古學論叢』東京考古學會

註６　高句麗系軒丸瓦と呼ばれる形式は、実際には古新羅系に位置付けられる。という指摘がある。

註７　清水昭博　1999『橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第51冊　蓮華百相－瓦からみた初期寺院の成立と展開－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

註８　東大阪市教育委員会　1973「東大阪市河内町所在　河内寺跡　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報11」

註９　上田　睦氏は創建瓦の年代を630年代に位置付けている。また高句麗系軒瓦に西漢氏が関わっている可能性を指摘している。

註10　青木勘時　1990「23. 渋川廃寺（第１次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会

註11　原田昌則・他　1998「10.久宝寺遺跡第23次調査（ＫＨ97－23）」『平成９年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
原田昌則　2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書　財団法人八尾市文化財調査研究会報告74』財団法人八尾市文化財調査研究会

註12　山本　昭　1986「河内国渋川寺について」『帝塚山考古学№６』帝塚山考古学研究所

註13　前掲註５

註14　上田　睦　1997「中南河内の古代寺院」『第１回摂河泉古代寺院フォーラム　摂河泉の古代寺院とその周辺』泉南市教育委員会・摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫

註15　濵　　斎　1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要７』八尾市教育委員会文化財課

註16　畑　暢子　2000『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター

註17　濱田耕作・梅原末治　1934(1976復刻)『京都帝国大学文学部考古学研究報告　第13冊　新羅古瓦の研究』京都帝国大学文学部考古学教室
森　郁夫　1986『上野廃寺跡発掘調査報告書　和歌山市上野所在』和歌山県教育委員会
7世紀末の上野廃寺創建瓦は、子葉が叶弁ふうに表現され、外縁に珠文を巡らせるもので、新羅的要素が指摘されている。

註18　毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩　1992『法隆寺の至宝 瓦 昭和資財帳15』法隆寺昭和資財帳編集委員会

註19　成海佳子・橋口　薫・金親満夫　2001「4．久宝寺遺跡第33次調査(K H2000－33)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
前掲註11

註20　米田敏幸・杉本尚子　1987『八尾近世墓　八尾市文化財調査報告16』八尾市教育委員会

註21　前掲註5

註22　成海佳子　1988「19．跡部遺跡(第3次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』財団法人八尾市文化財調査研究会

註23　森　郁夫　1994『市立市川考古博物館研究調査報告　第6冊　下総国分寺跡　平成元～5年発掘調査報告書』市立市川考古博物館

註24　高田良信・森　郁夫　1996『法隆寺文化のひろがり』法隆寺

註25　第52次調査（調査中）

註26　八尾市史編集委員会　1977『八尾市史　文化財編』八尾市役所

註27　八尾市史編集委員であった故沢井浩三の収集資料、およびそのコピー資料による。

註28　前掲註2

註29　解読及び考察は京都教育大学教授　和田　萃氏によるところが多大である。
菅原章太　1999「奈良時代“雑戸”河内手人の動向」『光陰如矢－荻田昭次先生古希記念論集－』「光陰如矢」刊行会

註30　佐伯有清編　1994『日本古代氏族事典』雄山閣
河内国出身の下村主姓として以下が挙げられる
・『続日本後紀承和7年(840)閏7月癸巳条』にある「河内国人美濃国少目下村主氏成。散位同姓三仲等賜_姓春滋宿禰_。其先『遠祖』出_自_後漢光武帝之後_者也」－下村主氏成らが春滋宿禰の氏姓を賜っている。
・『新撰姓氏録』右京諸蕃下に「高安下村主。出_自_高麗国人大鈴_也」とみえ、高句麗系渡来氏族として高安下村主をあげている。高安は河内国高安郡とする説がある。
・『正倉院文書』中に「河内画師」として下村主同主・下村主人長・下村主浄足らが見える。

註31　市村慎太郎　2003「新上小阪遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第47回）資料』財団法人大阪府文化財センター
上小阪遺跡は、渋川廃寺から北へ約3.5km、長瀬川を下った所に位置する。

註32　北村圭弘　1995「玉縁部凸面布目丸瓦について」『菅光寺廃寺・屋中寺廃寺』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

註33　大脇　潔　1991「研究ノート　丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ　奈良国立文化財研究所学報　第49冊』奈良国立文化財研究所

註34　明山大凜　1933「河内廢寶積寺塔心礎に就いて」『考古学雑誌　第二十三巻　第五號』考古學會

註35　前掲註15

註36　安村俊史　1997「柏原市域出土平瓦の叩き目について」『攝河泉古代寺院論纂　第1集』摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫

註37　上田　睦氏のご教示による。

註38　前掲註36

第6章　まとめ

今回の調査では古墳時代中期～近世の遺構・遺物を検出した。

西部では第3次調査で、古墳時代中期末～後期のＳＤ401が検出された。西側の久宝寺遺跡第29次調査東部では古墳時代中期～飛鳥時代に比定される同様の東西方向の溝群が検出されており、これらと一連の遺構と捉えられる。ＳＤ401は第29次調査東端で検出したＮＲ4001の埋没時期と一致するものので、有機的な関連が想定される。[註1]

飛鳥～奈良時代では、渋川廃寺関連として**基壇**・**整地層**及び多量の瓦が検出された。

基壇部分の**整地２**については、平面的には方形のプランが確認できるものの、飛鳥時代の大寺院に見られる掘込地業と呼べるほど強固なものではなく、版築構造は認められない。しかし上部の**基壇**部分では版築技法が認められ、周辺から多量の瓦が出土していることを考え合わせると、礎石等の明確な建物の痕跡は認められなかったものの、この**基壇**は寺院を構成する建物基壇と推定されよう。上部の建物については**基壇**の平面形からみておそらく塔で、第７章での塔心礎の検証からもその可能性が高くなった。塔心礎はおそらく地上式であろう。東側の**水田203**から出土した「塔分」の文字瓦の存在も示唆的である。ただ**基壇**及び**整地２**内に相当量の瓦が含まれることから、渋川廃寺創建時（飛鳥時代前期）の遺構でないことは明らかで再建に伴う構築であり、遺物の時期からみてその時期は奈良時代後半以降に比定される。しかし創建瓦である軒丸瓦Ⅰ型式以外の瓦、特に**基壇**版築層内出土の軒丸瓦Ⅴ型式、**整地２**内出土の軒丸瓦Ⅲ型式の時期が明確にできていない現状では、検出した**基壇**上の建物の時期については推測の域を出ない。この建物に伴う可能性があるのはＳＷ303で、**基壇**北側から重層的に瓦が出土している。北側が調査区外となり一部分の検出であるためか、軒瓦が出土していないことが惜しまれるが、丸瓦Ⅰb類・平瓦Ⅶb類のセットが確実で、非常に雑な作りで、奈良時代後半以降のものであろう。渋川廃寺はこの瓦を葺いた塔を配置した再建を最後に廃絶したものと考えられる。なお**整地２**内から数点ではあるが凝灰岩片が出土しており、**基壇**構築以前には石積基壇を備えた建物が周辺に存在したことが想定できる。**基壇**は河川を埋め立てた場所に構築されているが、選地に際しては何らかの制約があったのであろう。また瓦が出土するのは第２次ＳＤ307～第３次ＳＤ403の約120ｍの間に限られることが判明した。両溝は寺域の東・西を画する溝と考えられ、ある程度寺域が復元できたといえる。両溝には渋川廃寺廃絶時の瓦である丸瓦Ⅰb類・平瓦Ⅶ類が含まれ、ＳＤ307からは13世紀初頭頃、ＳＤ403からは12世紀初頭頃までの遺物が出土している。渋川廃寺廃絶後も長期にわたり機能していたことがわかる。文安５年(1448)に訓海により書かれた『太子傳玉林抄』には「澁河寺　河州　推古天皇御願　在彼紳妙椋東北六七町」とある。調査ではこの室町時代の段階の建物等は検出されず、またこの時期の瓦も皆無である。つまり内容の信憑性は別にして、ここに書かれている「澁河寺」は少なくとも調査で検出された**基壇**の場所には存在していない。平安時代初期には法隆寺は衰退の道を辿るようで、嘉禎４年(1238)の『聖徳太子傳私記』[註2]では河内国の荘園は弓削のみとなっている。多くの寺領とともに渋川郡の寺領も手放したのであろう。今回の調査では、瓦集積の時期等からみておそくとも９世紀代には渋川廃寺は廃絶していることが判明した。法隆寺の衰退に連動して渋川廃寺も衰退したものと考えられよう。

平安時代後期～鎌倉時代では居住域と生産域が判明した。第２次調査２区～３区にわたる居住域内には、掘立柱建物を構成すると考えられるピットが密集して検出され、長期にわたって生活が営まれていたことがわかる。中世以降は調査地全域にわたって水田・島畑・井戸・耕作溝が検出され、生産域となっている。

なお第２次調査第１面、近世の**島畑101**盛土内からではあるが、八尾市域では初例となる車輪石が出土した。付近に前期古墳が存在したことを示唆する遺物として重要である。

今回の調査では塔**基壇**と考えられる**整地層**が検出され、寺域もある程度ではあるが確認できたといえる。渋川廃寺建立氏族については物部氏[註1]、聖徳太子[註2]、阿刀氏[註3]等が考えられている。調査ではこのいずれかを補強するような成果は見出せなかった。ただ文字瓦の検出により、渋川廃寺の創建あるいは維持に渡来系氏族の関与が想定でき、また新羅の影響が窺える瓦の確認、法隆寺との密接な関係、再建の確認、寺域の一部確認といった新たな知見、そして課題が加わった。

註

註１　原田昌則　2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書　財団法人八尾市文化財調査研究会報告74』財団法人八尾市文化財調査研究会

註２　高田良信・森　郁夫　1996『法隆寺文化のひろがり』法隆寺

註３　安井良三　1968『物部氏と仏教』『日本書紀研究　第二冊』塙書房

註４　山本　昭　1983『河内竜華寺と渋川寺』『藤澤一夫先生古稀記念　古代文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

註５　上田　睦氏の「渋川廃寺についての覚え書き」を拝見させていただいた。上田氏は造営には阿刀氏が関わったと考え、高句麗系軒丸瓦を採用する寺院は、西漢氏の一族が造営に関与した可能性を指摘している。また文字瓦にある「下村主」は、漢人集団を率いて西漢氏の配下として働いた氏族で、ここでも渋川廃寺と西漢氏との関連が指摘できるとされている。

第7章　考察

第1節　澁川郡龍華村大字澁川と大字植松（川向）の小字調べ

調査地一帯は明治22年（1889）の鉄道布設、明治40年（1901）の複線化、そして昭和13年（1938）の竜華操車場の設置に伴い、旧景観が大きく変貌していく。さらに現在では宅地化とも相俟って区画整理が進み、旧小字名に至ってはそのほとんどが失われてしまった。そこで当地一帯の歴史・地理研究の基礎資料となり得ることを期待して、小字名の復元を行いたい。ここでは澁川郡龍華村のうち渋川廃寺の推定地を包括する澁川郡龍華村大字澁川と竜華寺跡を包括する澁川郡龍華村大字植松（川向）について調べる[注1]。大字澁川と大字植松（川向）は長瀬川の旧河道[注2]を挟んだ西と東にほぼ並列する。

小字の復元は、大阪法務局八尾出張所に保管されている明治６年（1873）の地租改正公布以後に作成された地籍図と昭和36年（1961）大阪府発行の１/3000地図（龍華操車場の設置以外では旧景観の変化が少ないとされる）とを合わせる形で行い、現在の地図上に復元した。また、大字澁川の小字名に関しては『八尾市小字地名表』[注3]を参考にした。その他に道路などの位置を示した。

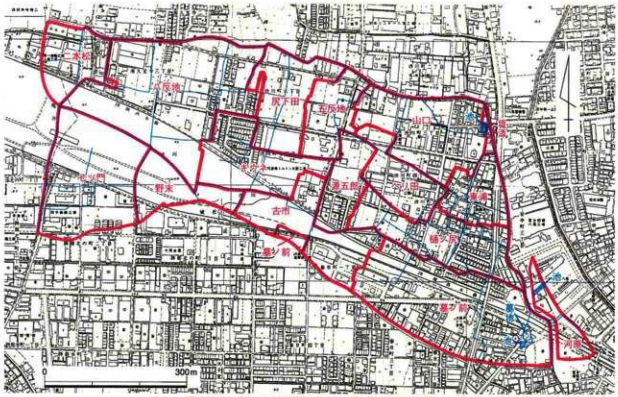
（１）澁川郡龍華村大字澁川

大字澁川の地籍図は「一筆限地面」と題し、明治27年（1894）３月に更正されたもので、第１～６号までの６枚の切図で構成されている。縮尺は１/1200である。地籍図には田、畑、郡村宅地、山林、鉄道、社地及寺院、道路、溜池及溝渠、墓地、堤塘の情報が色分けされているが小字名は書かれていない。

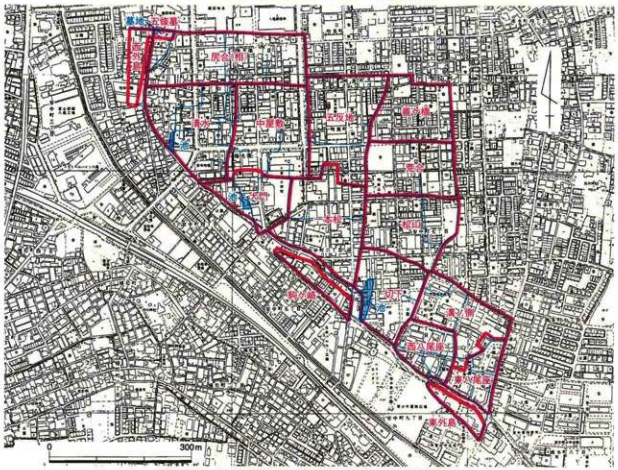
大字澁川には、二本松・八反地・七ッ門・野末・キウネ・古市・尻下田・五反地・源五郎・山口・ヘリ田・樋ノ尻・墓ノ前・東浦・堤添・河原という16の小字名が存在する。小字名を記す最も古い資料は『浜沢文書』にある寛文13年（1673）の『河内渋川郡渋川村御検地帳』で、そこには仁本松・八反地・七っもん・野すゑ・きう称・古市・志りげた・五反地・源五郎地・山口・樋ノ尻・墓の前・東浦・堤ぞいの14の小字名を載せる[注4]。

大字澁川には条里坪名を表す小字名は残っていない。旧大和川（長瀬川）に関係の深い小字名として、川沿いに北から堤添・東浦・樋ノ尻・河原の小字名が並ぶ。八反地・五反地は言うまでもなく土地の広さがそのまま小字名となったものである。七ッ門は東浦にある集落（の門？）から七町を隔てた土地という意味をもつと思われる。墓ノ前は実際に存在する墓地に由来するものであろうか。大字澁川の小字名は、中世あるいは近世に成立した小字名が大半であろう。しかしその中にあって古市は比較的古い小字名と思われ、明山氏は『続日本紀』神護景雲３年（769）に称徳天皇が由義（弓削）宮に行幸した時に建てた肆廛（市）[注5]に、由井氏は『日本書紀』敏達12年（583）の日羅の阿斗桑市館[注6]に由来を求めている。

大字澁川（明治27年当時）の土地利用は、字古市に渋川天神社、字東浦に集落、字墓ノ前に墓地、字堤添・字墓ノ前・字河原に溜池がある以外はすべて耕地となっている。



第112図　滝川郡龍華村大字滝川の小字分布図



第113図　滝川郡龍華村大字植松（川向）の小字分布図

（2）澁川郡龍華村大字植松（川向）

大字植松の地籍図は小字ごとに区分された字切図で構成されており、64枚が現存する。うち川向は16枚である。本来の大字植松は長瀬川の旧河道を挟んだ川向の南西に広がる。地籍図には表紙があったものと思われるが、現存していないため表題、製作時期、縮尺等は不明である。しかし地籍図には鉄道布設予定地が描き足されており、明治22年（1978）が鉄道布設の年であるから、地籍図の製作がそれ以前であることがわかる。地籍図に描かれた情報は大字澁川同様に色分けによってなされている。

大字植松（川向）には、東八尾座・切下・溝ノ側・一本松・西八尾座・松山・荒合・善ヶ橋・五反地・尻合（相）・清水・中屋敷・大門・西外島・五条幕・駒ヶ崎・東外島という16の小字名が存在する。小字名を記す最も古い資料は『中務文書』にある慶長17年（1612）の『河州渋川郡植松村御検地帳』で、きれ下のみが掲載されている。[注7]

条里坪名を表す小字名は、大字植松全体では九ノ坪・十ノ坪・十六が残っており、川向に五条幕が残る。川向の小字名であるが、大字澁川と同様に旧大和川（長瀬川）に関係する小字名として西外島・駒ヶ崎・東外島がある。東八尾座・西八尾座の両小字名は、「座」という語が示すように中世以来の同業者組合の集落を想像させる。森田氏によると11世紀の初め頃から存在する石清水八幡宮領の荘園と別宮を拠点とした「油座」から生まれたもので、河内の中心である八尾に所在するから「八尾座」と呼ばれるようになったと推定している。[注8]このように考えると清水という小字名も当地が石清水八幡宮領であった名残であるのかもしれない。切下は「きれした」と読む。『竜田越』によると、この地が往古の堤防決壊地点と伝えられているという。当地の細長い池は「きり下」、「切れ戸」と呼ばれており、切れ所が訛ったものであろうとし、『続日本紀』宝亀3年（772）渋川堤の決壊地点と考えている。[注9]奈良時代の伝承をそのまま当てはめることには疑問を感じるが、堤防決壊地点であったことには間違いないであろう。中屋敷は文字通り屋敷地（集落）が形成されていた所である。[注10・11]大門の小字名は伝龍華寺の南大門に付随する唐敷居の巨石が東西に2枚並んで埋まっていたことに由来する。『林家文書』にある天文2年（1533）に起きた旧大和川（長瀬川）決壊の記事に、龍華堤字大門から決壊したと書かれていることから、小字名の成立はそれ以前であることがわかる。[注12]五条墓は実際の墓地の名称である。[注13・14・15]

大字植松（川向）（明治22年以前）の土地利用は、字東八尾座と字西八尾座に集落、字五条墓に墓地、字清水・字大門・字切下に溜池がある以外はすべて耕地となっている。

第2節　塔心礎はどこですか？

（1）塔心礎の元位置

渋川廃寺の塔心礎は掘り出されて以来、植松町に所在する林家の庭に現在も置かれている。しかし塔心礎が据えられていた本来の場所は不確定で、その場所についての記述も様々である。そこでそれらの記述について検討しなおす必要があると考える。以下、塔心礎の元位置についての記述を年代に沿って列挙し、それらの内容についての検討を加え、その元位置を可能な限り限定したい。

・明治35年　『大阪府誌』第五編[注16]

大塔の石礎。龍華村大字澁川の西南、關西線鐵道八尾驛の西半町許の田圃の間に存せり。

・大正11年　『大阪府全志』巻之四[17]

大字遠川の西南關西線鐵道八尾驛の西半町許の田圃の間に大塔の礎石を存せり、以て昔時封境の如何の廣大なりしかを想はしむるに足るべし。

・大正13年　『中河内郡廃寺』[18]

八尾驛を距る西約一町の田中に、近年迄大礎石一個存せしが、今は植松の林八郎氏の庭内に運ばれたり。

・大正13年　『龍華村誌と村是』[19]

關西本線八尾驛を距る西方約二丁（字古市）の田圃中に近年迄大礎石ありしが、今は大字植松林八郎氏の庭内に搬入せられたり。

・昭和８年　明山大華「河内廢寶積寺塔心礎に就いて」『考古学雑誌』第23巻第５号[20]

中河内郡龍華村大字遠川字古市（通稱寶積寺）[21]の出中に大正の中頃迄あつた心礎で、現在は同村の林八郎氏の邸宅内にある。（中略）是の心礎の舊所在地であつた古市寶積寺の地は、現在の八尾驛の西二丁、近傍で有名な勝軍寺の地の東北々約五丁程の所で、關西本線路の南側の田中であつた。

・昭和９年　出井喜太郎「龍華寺と寶積寺」『上方』第48号[22]

寶積寺の址は龍華町遠川字古市に存し、俗にホーチヤクジと稱ばれてゐる田畠がそれで、鐵道線路を以てその中央を横斷されてゐる。南方畠地には、塔中心礎が存したが、大正年間植松の林八郎氏庭園に移された。

・昭和63年　『八尾市史（前近代）本文編』[23]

小字「古市」、俗称「法着寺（宝着寺・宝積寺）」という地点から、一九二二年（大正一一）に、高句麗系の軒丸瓦と法隆寺などに類例のみられる軒平瓦などとともに、大きな礎石が出土した。

以上が塔心礎の所在についての記述である。まず始めに、塔心礎の掘り出された時期がいつであったかが大きな問題となる。なぜなら寺域推定地を横断する形で明治22年に鉄道が布設されるからである。つまり塔心礎が鉄道布設予定地内にあり工事の邪魔となるから掘り出されたのか、あるいはそこ以外にあり鉄道布設後もまだ元位置を保っていたのかで、その拠えられていた場所が大きく食い違うからである。そこで文献を見ると、『八尾市史』の記述に大正11年に出土したとある。まさに確信にふれる記述である。しかしその他の文献に明確な時期が記述されていないにもかかわらず、昭和63年発行の『八尾市史』にのみ正確な年代が記されているのはどういう訳であろうか。はなはだ疑問には感じるが、他の文献を見る限り大正年間に運び出されたことは揺るがないようである。塔心礎が大正年間に移動したというならば、鉄道布設後はまだ元位置を保っていたということができる。さらに明山氏と由井氏の論考より鉄道の南にあったことがわかる。

次にその位置であるが、それぞれを照合すると八尾駅の西側、字古市の田中にあったことは疑う余地はない。しかし字古市に対する八尾駅からの距離の記述が種々様々である。字古市は第１節の（１）で示した通り、八尾駅の西約500～800m間の小字名であるから、距離についてはそれぞれの感覚で記したものと考えられる。さらにその場所を絞り込むと、塔心礎の運び込まれた林家の持つ字古市の土地にあったとするのが自然であろう。[24]

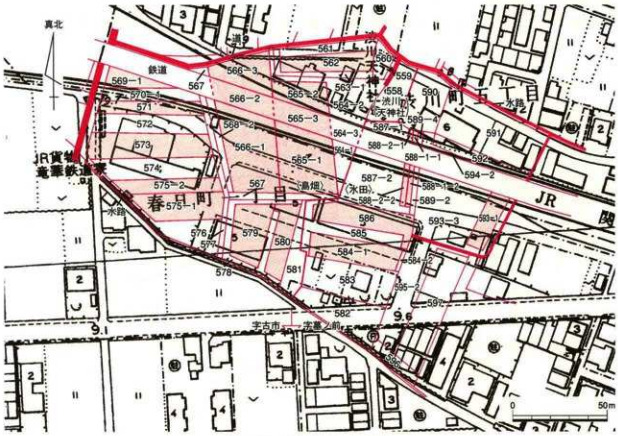
以上より、塔心礎の元位置は八尾駅の西側、字古市にある林家の所有地のうち鉄道より南側の田中であったことが判明し、その位置はかなり限定できることとなった。

（2）塔心礎と検出基壇

第114図は現状の調査地周辺の地図に大字漥川一筆限地面の地籍図を重ねたものである。ちょうど字古市と字墓ノ前の小字境にあたる場所に位置する。図の中央に鉄道が横断しており、描かれた区画は島畑と水田を表している。区画それぞれに付けられた番号は農地台帳に記されているものと一致する。では実際に、第２節（１）で示した場所はどの辺りなのであろうか。字古市における林家所有の土地は564番～581番である。さらに鉄道より南側となると、字古市最南東の南北約80m、東西140mの区画内となる。

ところで、この辺り一帯では「島畑」という耕地形態の特徴がある。水田の中に盛土をなし、その頂上で畑作を行う耕地形態である。塔心礎が残っており、それが周知であったのならば、水田内ではなく島畑の頂上に残っていたと考えるのが自然であろう。島畑として利用されていた土地は、地籍図の565－１、566－１、569－１、571、573、575－１・２、579、580番である。そこで検出した基壇との位置関係を見ると、それを取り込む形で565－１番の島畑が築かれている。また基壇下の整地層中には創建期の高句麗系軒瓦が入っていることからも、基壇が創建期のものでないことは明白である。そして基壇を包括する565－１番の島畑の東隣にある564－１番水田に大量の瓦片が捨てられていたこととその瓦片のひとつに「下主寸…塔分…」の文字がヘラ描きされていたことも非常に重要である。

以上より、塔心礎はこの基壇に伴うものと考えても不都合はなく、今回検出の基壇は再建時の塔跡であるとするのが妥当である。



第114図　調査地周辺の地籍図

第３節　寺域と伽藍配置

渋川廃寺の寺域と伽藍配置についてはこれまでに検討されたことはない。このことは田圃の中にあったとされる塔心礎の元位置が不確定であったことや明治22年（1889）以来の鉄道布設および昭和13年（1938）の竜華操車場の設置に伴い、旧景観が大きく変貌するに至ったことなどに起因し、それらの復元を困難にしていた。しかし今回実施した第２・３次調査と平成元年度に実施された第１次調査、さらに上記の考察により、渋川廃寺の姿が朧げながら見え始めた。そこで渋川廃寺の寺域と伽藍配置について若干の検討を行いたい。

（１）寺域

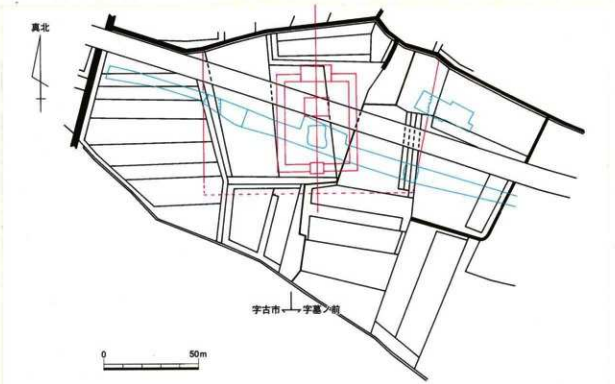
第１～３次調査で検出した遺構と明治27年（1894）更正の渋川村一筆限地面の地籍図を基本に、渋川廃寺の寺域を検討する。調査地は字古市と字墓ノ前にまたがった位置に所在する。

北限は現在もほぼ同じ位置にある里道と考えるのが妥当である。里道はほぼ東西方向に伸びるが東部で南に角度を変える。

南限については現段階では確たる根拠に恵まれていない。後述するが、主要堂宇の基壇は島畑に利用されるという考えを筆者は持っているので、南門もそうであった可能性が高いと思われる。さらに南北に走る字古市と字墓ノ前の小字境が、東西に方向を変えることも何らかの要因があったと推測される。このことより586番の島畑を横断する位置に南限を考えたい。

東限は第１次調査検出の西大溝と第２次調査検出のＳＤ307が東限を区切る溝であったと考える。真北より東に約12°の傾きを持つ。

西限は第３次調査検出のＳＤ403が西限を区切る溝であったと考える。ＳＤ403の西肩は真北よ



第115図　推定寺域と伽藍配置

り東に約35°の傾きがあるが、東肩はほぼ真北を向く。後に上層が水田となっていることを考えると、西肩の傾きに関しては考慮するには至らないと思われる。

以上により渋川廃寺の寺域は、歪な五角形を推定でき、東西幅約110～125m、推定南北幅約70～90mの範囲となる。若干、東西方向に長い地割となるが、ほぼ1町四方を意識した設計がなされていると推察できる。

（2）伽藍配置

第2節（2）より検出の基壇が再建塔基壇であったことを示した。過去の調査を通じて寺院の主要堂宇の検出はこの塔基壇のみである。そこで今後調査を進めていく上での一つの指標として、現段階で考えられる再建時の伽藍配置を復元する。

塔基壇は寺域の東西幅のほぼ中央、南北幅の中央南よりに位置し、主軸は真北を向く。塔基壇は寺域のほぼ中央にあるのだから、伽藍が寺域内の左右どちらかに偏っていない限り、中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺式を想定できる。

ところで第114図より明らかなように、この地での島畑は東西方向の長軸を採用して構築されることが一般的である。しかし565番台と566番台の島畑は、南北方向を長軸としており、付近の島畑に対して一種特異な形態を見せる。塔基壇を取り込む形で島畑が築かれていたことは先述したが、これは一直線上に並ぶ主要堂宇の基壇を取り込む形で島畑を構築したため、周囲の島畑と方向や規模を異にした形態を取らざるを得なかった結果であろう。このことを踏まえて伽藍の規模を考えると、566番台の島畑が寺域の北限である里道まで達しているのに対し、565番台の島畑は途中で途切れて里道まで届かないことに気付く。その北側も林家の所有地であるにも拘わらず、東西に長い562番島畑を造ることに不自然さを感じる。そこで、565番台島畑の北端と講堂の北端が同一であったと考えると、島畑が途中で切れることに説明がつくのではないだろうか。つまり、伽藍の南北規模は565番台島畑の規模と同等と見なしてもよいと考える。

今回の発掘調査では、残念ながら回廊跡の検出はならなかった。これは後世における水田耕作によって著しく攪乱を受けていたことに起因する。回廊に関しても主要堂宇と同様に、565番台島畑の中で収まるものと考え、復元を試みた。

冒頭でも述べた通り、この伽藍配置の復元は一つの試案である。次回の調査における指標として役立てられることを期待するものである。そうした中で、全く別の伽藍配置が浮かび上がってくるかもしれない。最終結論は今後の調査に委ねることとする。

第4節　奈良時代における渋川廃寺周辺地域の様相

今回の調査では渋川廃寺創建期の遺構は検出されなかった。しかし奈良時代後期以降に再建されたと考えられる塔基壇が検出され、その他の奈良時代の遺構・遺物は本調査ではもちろん、周辺の調査でも数多く検出されている。そこで古長瀬川以西における、奈良時代の渋川廃寺を取り巻く周辺地域の様相を概観し、当地の歴史の一端を窺いたい。

渋川廃寺を含む当地域は、旧大和川が分流する二河川（古長瀬川・古平野川）に挟まれた自然堤防と後背湿地で構成され、旧国郡では河内国渋川郡に属する。この二河川は当地域の土地利用に大きな制約を与え、また当時の生活環境を考える上で重要な位置を示すことから、まずそれら

の復元を試みる。

この二河川は時期によって、その規模や流路を異にするようである。二河川の流路復元は、飯田氏によってすでに行なわれており[225]、本稿もその業績に負うところが大きい。それを踏まえた上で、さらに自然堤防や旧流路による地形の乱れや最近の発掘調査における成果などをもとに、奈良時代の河道を第116図に示した。植松町1丁目付近で北と西に分流する旧大和川は支流をもって流れている。北ルートをとる古長瀬川の河道とその左岸堤防は地点52（ＡＴ87－３）で検出されている。古長瀬川からは２本の支流が北西に向かって流れ（支流１、支流２）、南の支流はさらに枝分かれする（支流３）。飯田氏によれば、支流１は古墳時代中期～後期にかけての古長瀬川の本流で、飛鳥時代には廃絶したと示している。しかし地点24（ＫＨ87－２）で奈良時代の自然河川が検出されており、渋川町２丁目付近においては江戸時代の絵図に用水路として描かれていることから、廃絶した訳ではなく規模を縮小して流れていたことがわかる。支流２・３は地点35（ＫＨ99－29）と地点36（ＫＨ2000－33）で検出された自然河川である。現在も春日町１～３丁目付近に用水路が存在している。

では、奈良時代の集落はどのように展開するのだろうか。第116図の範囲内に限り、５つの集落が存在する（集落１～５）。

集落１は古長瀬川の支流１・２に挟まれた位置にある。地点16（ＫＨ97－186）の西側を中心に井戸や土坑などが検出されている。この付近では試掘調査が行なわれているだけで、データの蓄積にやや難がある。しかし地点29（ＫＨ91－11）で見る限り、集落自体は平安時代まで続くことはなく、耕地化していったものと思われる。

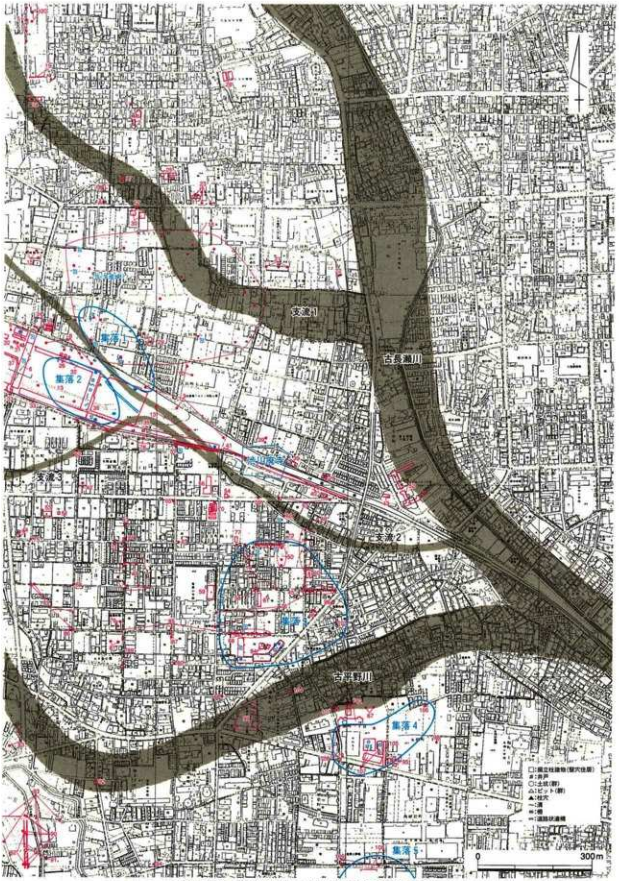
集落２は古長瀬川の支流２・３が分流する三角地帯に位置する。地点32（ＫＨ97－23）と地点35では奈良時代中～後期の掘立柱建物や井戸などが、地点36では井戸が検出されている。また地点36では支流２に並行する道路状の遺構も見受けられる。しかし奈良時代における集落２の規模は小さく、むしろ平安時代になってから隆盛する集落であると思われる。

集落３は古平野川の北側に面した地点84（ＴＳ83－１）を中心とする集落である。地点84では奈良時代後期の井戸や柱穴などが検出されており、さらに墨書土器も見つかっている。また、その北側の地点68（ＡＴ95－21）や地点76（ＡＴ99－31）で井戸が検出され、それらの周辺には遺物包含層が広がる。しかし集落３は、平安時代まで継続することはなく、その後は耕作地として利用されている。

ここでひとつ重要なことは「下の太子」大聖勝軍寺についてである。康正元年（1455）の『大聖勝軍寺略縁起』によると聖徳太子が物部守屋を討伐した後に建立したとある。しかし寺院建立の時期は、平安時代末期から盛んになる太子信仰とのかかわりで考えねばならず、平安時代末期から鎌倉時代にかけて建立されたとする論考がある[226]。このことにより、集落３が廃絶した後、この地区で次に集落が形成されるのは勝軍寺が建立される鎌倉時代以降で、その東部には「東口」、「五軒」などの小字名が見受けられ、寺院を拠点に発展することがわかる。

集落４は、集落３の対岸の地点102（ＵＭ93－３）や地点107（ＵＭ2002－８）を中心として展開する。この集落は平安時代前期段階まで継続した後、耕作地となる。

集落５は、集落４の南約500m地点108（ＵＭＳ97－１）で井戸が検出されている。地点108の南部に集落の中心があると考えられる。



第116図　奈良時代における渋川廃寺周辺地域

このように集落が展開する中で、渋川廃寺は支流２の北岸に南面で配置されている。この場所は古長瀬川左岸の自然堤防上にあたり、ベースとなる地層は固く締まる砂礫層である。同じ支流２の北側に位置する集落１がT.P.+7.6m前後であるのに対し、渋川廃寺はT.P.+8.3m前後と約0.7mも高い場所に配置されている。集落３は渋川廃寺とほぼ同じ標高の自然堤防上に位置しており、この地域では古墳時代中期～後期にかけての集落があったことがわかっている[627]。しかし寺院創建の時期である飛鳥時代には、生活面が見受けられない。物部氏の本拠地と推定される跡部という土地柄、その滅亡と深くかかわっているためであろう。

さらに重要な事として、条里地割と土地利用の関係がある。広瀬和雄氏は畿内において、10世紀後葉における条里村落（条里地割と建物群がそれぞれの方位を揃えている）の普遍的な成立の背景は、いくつかの集落の変遷過程で建物群と条里地割が合致した例がほとんどないことから、条里村落はその成立当初から条里地割と強い関連性をもっていたとし、条里制施行時にはごく大雑把な条里地割は存在していたが、それは一つの地域内部を網羅するものではなかったと論じている。そして８・９世紀の集落は、条里地割に建物主軸を合致させるものとさせないものとがみられ、後者が多いとしている。さらに渋川廃寺の南西約2.5kmに位置する長原遺跡で、「坪境いを北流する人工の水路（ＳＤ302）」が最終的に埋没するのが８世紀後葉から９世紀前葉頃であるため、条里地割を伴う耕地開発が８世紀代に施行された可能性が非常に強いとし、長原遺跡周辺では現在条里地割の遡源が８世紀代に遡及したと論じている[628]。

ここで渋川廃寺周辺地域に目を向けると、ほぼ全域に条里地割が現存していることが地図上から読み取れる。跡部、植松、太子堂の条里地割はほぼ正方位に地割りされているのに対し、竜華操車場の北側に位置する渋川では、古長瀬川や支流１・２の流れに規制を受けたためか、東に約10°傾いている。では、この地域における奈良時代の建物群は条里地割を意識したものであったのであろうか。この地域では建物群の良好な資料に恵まれていない。しかし数少ない掘立柱建物として、集落２に包括される地点35のＳＢ3001があり、この建物は正方位を向く。また、地点32における奈良時代後期の掘立柱建物の主軸はＮ－８°－Ｓを向き、地点107では奈良時代後期の掘立柱建物と棟列がほぼ正方位を示す[629]。加えて、渋川廃寺の北限里道と西限の溝ＳＤ403も正方位を示し、正方位という概念を意識して寺域設定が行なわれている。地点31の掘立柱建物の主軸に若干のブレはあるけれども、これらによる限り、跡部、植松、太子堂における正方位を示す条里地割は奈良時代中～後期に遡ることができ、さらに渋川での条里地割もまた、奈良時代においては正方位を示していたのであろう。これにより、この地域の奈良時代では、先の長原遺跡同様に条里地割を念頭においた土地利用が行なわれていたと思われる[630]。では、竜華操車場北側の現行条里地割はいつ成立したのであろうか。平安時代後期のＳＢ301はこの傾く条里地割と方位を同じくしている。また、渋川廃寺東限の溝ＳＤ307も方位を揃えている[631]。このことから、渋川での条里地割の傾きは少なくとも11世紀後半以前に遡ることができる[632]。

以上、奈良時代における渋川廃寺周辺地域の様相を概観した。古長瀬川と古平野川の二河川は、この地域の土地利用に制約をもたらしていたことは想像に難くない。集落は、この二河川とそこから派生する支流に沿って形成されている。古平野川沿いの集落３・４が拠点的な集落である。これは大和から難波への続く亀瀬越道（奈良街道）が、この地を通ることに由来するためである。しかし、集落３は古平野川の氾濫に原因があるのか[633]、奈良時代後期段階で廃絶する。では、渋川

廃寺近隣ではどうであろうか。地点40（ＳＫＴ89－１）で掘立柱建物が検出されているが、寺院の東限溝に隣接するため、集落を構成するものではなく、寺院に関係がある施設と考えたい。地点41（ＳＫＴ2001－２）において、寺域の約85m以東では平安時代後期には集落が形成されるが、奈良時代の遺構は検出されていない。さらに西側にも奈良時代の遺構はない。そして南側には支流２が流れているため、渋川廃寺を拠点とする集落が存在するのならば、その北側に求められる。しかしその存否は、発掘調査を待たねばならない。さらにこの地域での条里地割は、奈良時代中～後期に遡ることができ、ある程度の規制を受けた土地利用が行なわれていたと思われる。

この地域では、竜華操車場内の大規模な発掘調査以外、公共下水道の設置に伴うなどの小規模な調査がその大半を占める。このため集落の規模や動向そして耕作地の場所など、そのすべてが判明したという訳ではない。この地域は弥生時代から連綿と続く文化形成の地で、さらに物部氏ともかかわりが深く、その滅亡後も大和から難波への中間地として重要な位置を占めていたものと思われる。今後調査が進むにつれて、奈良時代における詳細な情報が地図を埋めることを期待し、本稿がその端緒となることを願う。

表10　渋川廃寺周辺地域における奈良・平安時代検出遺構一覧

地点	調査地名	所在地	検出遺構等（奈良時代）	検出遺構等（平安時代）	備　考	文　献
久宝寺寺内町遺跡（ＫＨＣ）						
1	2001-193	久宝寺３丁目255				2002『八尾市文化財調査報告46』
2	98-1	久宝寺3丁目269-1、他４筆				1999『平成10年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
久宝寺遺跡（ＫＨ）						
3	95-5～7	大字渋川地内				1996『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第3集』
4	95-8･9	大字亀井地内	遺物包含層			1996『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第6集』
5	96-1､97-1	大字渋川地内	遺物包含層		飛鳥時代：土坑	1998『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第26集』
6	98-1､98-2	大字渋川地内	遺物包含層	井戸、鞴炉に伴う滓群（～鎌倉時代）	古墳時代後期：横穴式石室（七ツ門古墳）	2001『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第60集』
7	63-195	久宝寺6丁目路上	河川堆積層			1989『八尾市文化財調査報告20』
8	63-269	大字亀井、大字渋川地内	遺物包含層			1989『八尾市文化財調査報告20』
9	85-191	南久宝寺3丁目48			飛鳥時代：遺物包含層	1990『八尾市文化財調査報告20』
10	90-397	渋川町７丁目2他10筆				1991『八尾市文化財調査報告22』
11	90-566	久宝寺4丁目3-31				1992『八尾市文化財調査報告25』
12	93-054	南久宝寺1丁目40	河川堆積層			1994『八尾市文化財調査報告29』
13	95-565	大字亀井、大字渋川地内				1998『八尾市文化財調査報告37』
14	95-719	久宝寺5丁目36の一部				1997『八尾市文化財調査報告36』
15	96-641	神武町79､80､81				1998『八尾市文化財調査報告38』

地点	調査地名	所在地	検出遺構等（奈良時代）	検出遺構等（平安時代）	備　考	文　献
16	97-186	南久宝寺1～3丁目、渋川町6丁目地内	土坑・溝・小穴・落ち込み状遺構・河川堆積・遺物包含層			1998『八尾市文化財調査報告39』
17	97-694	久宝寺4丁目132-7の一部				1999『八尾市文化財調査報告40』
18	97-720	久宝寺5丁目132				1999『八尾市文化財調査報告40』
19	98-524	久宝寺6丁目地内				2000『八尾市文化財調査報告43』
20	2001-271	久宝寺6丁目33、34、35、36				2002『八尾市文化財調査報告46』
21	2002-145	渋川町1丁目53-1・2・5				2003『八尾市文化財調査報告48』
22	2002-199	渋川町1丁目37、38の一部	河川堆積層	不明		2003『八尾市文化財調査報告48』
23	2002-285	久宝寺4丁目111、112、113の一部				2003『八尾市文化財調査報告48』
24	87-2	久宝寺6丁目226	自然河川（中期頃）			1988『(財) 八尾市文化財調査研究会報告16』
25	88-3	久宝寺4丁目74、76、81-1・3の一部		水田		1989『(財) 八尾市文化財調査研究会報告25』
26	90-4	大字亀井および大字渋川地内		掘立柱建物？		1993『(財) 八尾市文化財調査研究会報告41』
27	90-7	渋川町5丁目33番地	遺物包含層			1991『(財) 八尾市文化財調査研究会報告32』
28	91-8	久宝寺2丁目2-33				1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』
29	91-11	渋川町6丁目34、35		溝（後期）		1992『(財) 八尾市文化財調査研究会報告34』
30	93-17	久宝寺1丁目40		洪水砂層？（中期）、井戸（後期）		1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』
31	96-20	大字渋川地内	遺物包含層			2000『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』
32	97-23	大字亀井他	掘立柱建物・井戸・土坑・溝・小穴	井戸・溝		1998『平成9年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』
33	98-24	大字亀井	井戸（中期）	掘立柱建物・井戸・土坑・生産域（前期～中期）、井戸・土坑・溝（後期）	9世紀後半：緑釉陶器	2001『財団法人八尾市文化財調査研究会報告69』
34	99-26	神武町93丁目1地内	竪穴住居？（前期）			2002『財団法人八尾市文化財調査研究会報告70』
35	99-29	大字亀井他	掘立柱建物・井戸・土坑・溝（中期）、自然河川	井戸・溝（後期）	奈良時代後期：墨書木簡（『表：之中上丁□□遠［　］□三人、裏：□□』）	2003『財団法人八尾市文化財調査研究会報告74』
36	2000-33	大字渋川	井戸・溝・流路	井戸・土坑・溝・土器集積	墨書土器、三彩小壺、円面硯	2001『平成12年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』
37	2001-39	大字亀井他				2002『平成13年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』 2003『平成14年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』
渋川廃寺（ＳＫＴ）						
1	2000-65	渋川町5丁目-3の一部	遺物包含層			2001『八尾市文化財調査報告44』
2	89-1	渋川町5丁目11	掘立柱建物	掘立柱建物	景島時代：溝・土器群・土塁状遺構	1990『(財) 八尾市文化財調査研究会報告28』 本書収録

地点	調査地名	所在地	検出遺構等（奈良時代）	検出遺構等（平安時代）	備　考	文　献
40	2001-2	春日町1丁目地内	塀基壇・寺域東限溝・土坑・溝	掘立柱建物・土坑・飛鳥時代：自然流路溝・ピット（末期）		本書収録
41	2002-3	春日町1丁目地内、洪川町5丁目地内	土坑・寺域西限溝	土坑		本書収録
跡部遺跡（AT）						
42	昭和56年度調査	春日町1丁目57				1983「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　1980・1981年度」
43	昭和59年度調査	安中町3丁目32-2	遺物包含層		古墳時代後期～飛鳥時代：遺物包含層	1985『八尾市文化財調査報告11』
44	92-164	跡部木町1-4-47				1993『八尾市文化財調査報告27』
45	92-541	春日町3				1994『八尾市文化財調査報告30』
46	94-059	東太子1丁目3-1の一部			飛鳥時代前期：土坑・ピット	1996『八尾市文化財調査報告33』
47	95-633	太子堂1丁目地内				1997『八尾市文化財調査報告37』
48	97-477	春日町2丁目7-1				1999『八尾市文化財調査報告40』
49	99-132	太子堂2丁目地内				2000『八尾市文化財調査報告43』
50	2000-435	春日町3丁目19-20の一部				2002『八尾市文化財調査報告46』
51	82-1	跡部本町1丁目3番地				1983『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』
52	87-3	安中町3丁目26-19-5	自然河川と堤防（古墳時代中期～）		古長瀬川	1988（財）八尾市文化財調査研究会報告16』
53	88-4	跡部本町1丁目4-1,2				1989（財）八尾市文化財調査研究会報告25』
54	89-5	春日町1丁目		井戸（後期）		1991（財）八尾市文化財調査研究会報告31』
55	91-6	春日町1丁目　遺物包含層				1992（財）八尾市文化財調査研究会報告34』
56	92-7	春日町1丁目47、48			飛鳥時代：遺物包含層	1993（財）八尾市文化財調査研究会報告39』
57	92-9	春日町1丁目地内	遺物包含層			1993（財）八尾市文化財調査研究会報告39』
58	92-10	春日町3丁目地内				1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
59	93-11	東太子1丁目106		洪水砂層・遺物包含層		1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
60	93-12	春日町2丁目35-1,2				1994『平成5年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
61	93-13	東太子1丁目16			古墳時代前期以降：洪水砂層？	1994『平成5年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
62	93-14	跡部北の町1丁目地内	河川堆積層？			1994『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』
63	93-15	春日町1丁目2～44先				1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
64	94-16	跡部本町1丁目地内		洪水砂層？		1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
65	94-17	太子堂1丁目地内				1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』
66	95-19	春日町3丁目地内	遺物包含層	溝（中期）		1996『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』
67	95-20	春日町4丁目地内				1996『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』

地点	調査地名	所在地	検出遺構等（奈良時代）	検出遺構等（平安時代）	備　考	文　献
68	95-21	東太子1・2丁目地内	井戸・遺物包含層（前期）			1996『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』
69	96-22	太子堂1丁目地内				1998『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』
70	96-23	春日町4丁目4				1997『平成8年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
71	96-24	太子堂1、2丁目地内				1998『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』
72	97-25	春日町2・3丁目地内	遺物包含層	流路		1999『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』
73	97-26	太子堂1・2丁目地内	河川堆積層、遺物包含層			1999『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』
74	97-27	春日町3・4丁目地内	遺物包含層			1999『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』
75	98-29	跡部本町1丁目4-16～35				2000『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』
76	99-31	春日町2丁目、東太子1丁目地内	井戸、遺物包含層（中期）	溝	古墳時代後期～飛鳥時代前半：土坑、溝、土器溜	2001『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』
77	2001-32	春日町4丁目13				2003『財団法人八尾市文化財調査研究会報告76』
78	2002-33	跡部北の町1・2丁目、春日町1丁目	河川堆積（～平安時代）			2003『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』
太子堂遺跡（ＴＳ）						
79	87-152	太子堂2丁目35-2		洪水砂層		1988『八尾市文化財調査報告17』
80	96-724	東太子2丁目地内				1998『八尾市文化財調査報告39』
81	97-441	太子堂4丁目1-1の一部				1998『八尾市文化財調査報告38』
82	97-497	南太子堂4・6丁目地内	遺物包含層？	土坑・溝・小穴（中期～鎌倉時代）		1999『八尾市文化財調査報告41』
83	2002-204	南太子堂6丁目87-39～44	河川堆積層（12世紀以前）			2003『八尾市文化財調査報告48』
84	83-1	東太子2丁目1他	土器棺墓・井戸・土坑・溝・柱穴・小穴群（前～中期）		奈良時代前～中期：墨書土器（西）「高杯」「海？」「伯」、転用硯、方位を示す墨書のある井戸枠、土馬	1993『(財)八尾市文化財調査研究会報告36』
85	90-2	太子堂2・3丁目地内	ベース面			1993『(財)八尾市文化財調査研究会報告36』
86	91-3	太子堂2丁目地内	溝（前期）			1997『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』
87	92-4	太子堂2丁目地内				1993『(財)八尾市文化財調査研究会報告39』
88	93-5	東太子2丁目地内	ベース面および遺物包含層			1994『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』
89	94-6	太子堂3・4丁目地内		水田？（後期）		1997『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』
90	97-7	南太子堂5丁目地内		井戸・土坑、溝・小穴（末期～鎌倉時代）		2000『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』
91	98-8	南太子堂5丁目地内		井戸・土坑・溝・小穴（末期～鎌倉時代）		2000『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』

地点	調査地名	所在地	検出遺構等（奈良時代）	検出遺構等（平安時代）	備　考	文　献
92	98-9	南太子堂3丁目地内	河川堆積層（古墳前期～平安時代）			2000『(財) 八尾市文化財調査研究会報告65』
93	99-10	南太子堂4・5丁目地内		土坑、土器溜り（末期～鎌倉時代）		2001『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』
94	2002-11	南太子堂3丁目78-1		溝（後期）		2003『平成14年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』
植松遺跡（UM）						
95	昭和55年度調査	永畑町2丁目2		掘立柱建物・溝・礫集積（前期）		1983『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　1980・1981年度』
96	90-433	植松町5丁目地内				1992『八尾市文化財調査報告26』
97	91-626、627	永畑町3丁目1-1他、15-1他			河川堆積層	1993『八尾市文化財調査報告27』
98	2002-35	永畑町2丁目47-2				2003『八尾市文化財調査報告48』
99	2002 259	植松町8丁目20、24、27、35			河川堆積層	2003『八尾市文化財調査報告48』
100	92-1	永畑町3丁目地内				1993『(財) 八尾市文化財調査研究会報告39』
101	93-2	永畑町3丁目1-1他	河川堆積層（古墳～平安時代）			1994『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』
102	93-3	永畑町3丁目1-1他	土坑・自然河川（後期）			1998『財団法人八尾市文化財調査研究会報告59』
103	95-4	植松町3・5丁目地内	溝（前～中期）			1999『財団法人八尾市文化財調査研究会報告63』
104	96-5	植松町7丁目地内	河川堆積層（室町時代以前）			1998『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』
105	96-6	永畑町3丁目1-11		溝（前期）	平安時代前期：土馬	1998『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』
106	98-7	永畑町2丁目地内	土坑（～平安時代初頭）			2000『(財) 八尾市文化財調査研究会報告65』
107	2002-8	永畑町3丁目1-1他	掘立柱建物・井戸・土坑・柱穴・欄列・耕作溝（後期）	掘立柱建物・土坑・柱穴・自然河川・耕作溝（前期）		2003『平成14年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』
植松南遺跡（UMS）						
108	97-1	南植松町3丁目50他	井戸			1998『平成9年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』
109	99-2	南植松町2・3丁目地内				2001『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』

正報告が刊行されていない調査地については、調査終了報告など内部資料を参考にして作成した所もある。正報告と内容が異なる場合は、筆者にその責がある。また、八尾市教育委員会が実施した試掘調査で、本調査を実施した地点は割愛した。

註

註1　龍華村は明治22年（1889）施行の市制町村制に先立つ、植松村、澁川村、安中村、太子堂村、亀井村、竹淵村の6ヶ村の合併で成立した。地籍図が明治22年以前の製作であるならば、大字植松は堺県澁川郡植松村であるが、ここでは混同をさけるために、あえて澁川郡龍華村大字植松と称する。

註2　長瀬川の旧河道は宝永元年（1704）の大和川付け替え以降に新田となり、この付近では安中新田と称し渋川郡に属した。

註3　八尾市史編さん委員会編集　1985『八尾市史紀要・第8号　八尾市小字名表　澤井浩三編』八尾市教育委員会文化財室

註4　八尾市史編纂委員会編　1960『八尾市史　史料編』大阪府八尾市役所

註5　明山大華　1933『河内廢寶積寺塔心礎について』『考古学雑誌』第23巻第5号　考古学会

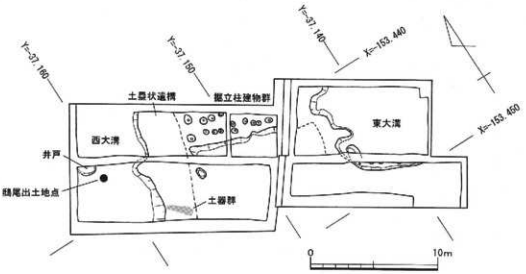
註6　由井喜太郎　1934「龍華寺と寶積寺」『上方』第48号　上方郷土研究会
註7　前掲註4
註8　森田康夫　1986「第3章　荘園制時代の八尾」『八尾市民文化双書No.4　市民のための八尾の歴史』八尾市立図書館
註9　山本　博　1971『亀田越』学生社
註10　周辺での堤防決壊の記事には、この他に『続日本紀』宝亀元年（770）と『林家文書』天文2年（1533）がある。
註11　「切下」という字名は八尾市内では池島・福万寺地区でも見られ、ここでも河川が増水した際に破堤した付近が溜池として残る。（高橋学　1995「河内平野の地形環境分析Ⅳ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』財団法人大阪文化財センター）
註12　実際、発掘調査で中世段階の遺構（南北・東西方向の区画溝、井戸など）・遺物が出土しており、集落の形成は中世に遡ることができる。（坪田真一　1990「竜華寺跡」『（財）八尾市文化財調査研究会報告28』、高萩千秋　1992「竜華寺跡第2次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告34』、高萩千秋　1998『竜華寺跡第3次調査』『（財）八尾市文化財調査研究会報告59』　発行はすべて財団法人八尾市文化財調査研究会）
註13　この旧大和川決壊時に、元々は川の東側にあった渋川神社が流されたことが『林家文書』に記されている。渋川神社の元所在地については、「中河内郡誌」では「遠川神社及び本部落は禽大和川北東岸の字屋敷と呼ぶ地にありしが…」、「大阪府全志」では「もと禽大和川の東側なる字川向にありしが、…」そして「大阪府史蹟名勝天然記念物」では「本社はもと禽大和川の北岸、安中の東、字川向の屋敷と稱する處に鎮座せしが…」とある。
註14　五条墓の継続期間は寛文16年（1669）以前から移転する明治21年（1888）までが通れる。（米田敏幸　1987『八尾市文化財調査報告16　八尾近世墓』八尾市教育委員会）
註15　実際、五条墓は条里区画の五条の位置にはなく、正確には四条に入る。（棚橋利光　1976「八尾市史紀要第6号　八尾の条里制」八尾市史編さん室）
註16　大阪府編　1970『大阪府誌』第五編　郡文閣（復刻版）
註17　井上正雄　1976「第二編第二章第二節第三十五項　竜華村」『大阪府全志』巻之四　清文堂出版（復刻版）
註18　片岡紫峰　1924「寶積寺」『中河内郡廃寺』片岡英宗
註19　角田富喜三郎編　1938『龍華村誌と村是』大阪府中河内郡竜華村役場
註20　前掲註5
註21　当時、字古市周辺には「ほうちゃくじ」という俗称が残っていたようである。由井氏は「字法著寺は、龍華町植松並びに遠川の南大字に跨がれる耕地でその名の示す通り寶積寺てふ伽藍のあつた所。」と「ほうちゃくじ」の場所を示している（由井喜太郎　1938「物部守屋蔵河の宅址」『上方』第87号　上方郷土研究会）。しかし慶長17年（1612）の『河州渋川郡植松村御検地帳』に「法著寺」という小字名が見られることから、実際に存在した植松村の小字名であったことが判る。
註22　前掲註6
註23　吉岡　哲　1988『第5章　歴史考古学から見た八尾』『八尾市史（前近代）本文編』八尾市役所
註24　現当主である林満幹彦氏に伺ったところ、塔心礎は林家所有の田中にあったことが判明した。
註25　阪田育功　1984『第3節　河内平野の形成と河川の変遷－長瀬川流域を中心に－』『佐堂（その2）－Ⅰ』財団法人大阪文化財センター
阪田育功　1997『河内平野低地部における河川流路の変遷』『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
註26　小谷利明　1991「大聖勝軍寺文書概説」『大阪府八尾市内寺院古文書調査報告書』八尾市教育委員会
註27　岡田清一・井出貴子　1993「Ⅰ　第1次調査（TS83-1）発掘調査概要報告」『（財）八尾市文化財調査研究会報告36　太子堂遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会
坪田真一　1994「2．跡部遺跡第12次調査（AT93-12）」『平成5年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
註28　広瀬和雄　1986「中世への胎動」『岩波講座日本考古学6　変化と画期』株式会社岩波書店
註29　地点32（KH97-23）と地点107（UM2002-8）については正報告が刊行されていない。検出遺構の情報は、内部資料である『埋蔵文化財発掘調査概要報告（終了報告）』をもとにしている。正報告と情報が異なる場合は筆者にその責がある。
註30　本来、耕作溝や区画溝の方向など、別の要因も視野に入れて条里地割を考えなければならない。今回の限られた掘立柱建物の方向だけでの推論には限界も存在する。耕作溝や区画溝なども含めた上で、改めて渋川廃寺周辺地域の条里地割を考える必要性がある。
註31　SD307は渋川廃寺の東限であると同時に、平安時代後期の集落の西限を示している。溝自体は坪境を示すものではないけれども、元々あった溝を集落の形成とともに、それを限るものとして再利用され、条里に合わせて掘削し直されたものと考えたい。したがって、渋川廃寺の東限溝は、西限溝と同様に正方位を示していた可能性がある。
註32　地点6（KH98-1、2）で検出された、平安時代～鎌倉時代にかけての耕作に伴う溝群もこの条里に合致している。
註33　洪水砂層は地点59（AT93-11）や地点64（AT94-16）などで検出されている。

附　章　渋川廃寺第１次調査の出土遺物

第１次調査は平成元年度に八尾市渋川町５丁目11で、共同住宅建設に伴い実施した発掘調査である。調査地は第２次調査の北側で渋川天神社に東接する位置にあり、調査面積約350㎡を対象とした。調査の結果、古墳時代中期～中世までの遺構・遺物が検出され、なかでも飛鳥時代の**土器群**や**土塁状遺構**、飛鳥～平安時代前期にかけて３時期の建て替えが想定できる掘立柱建物群、渋川廃寺再建以後の寺域東限溝（**西大溝**）などが検出され、また包含層からは緯式系土器[註1]が、さらに**西大溝**からは、**鵜尾**の破片がまとまって出土しており、特筆に価する。

しかし第１次調査に関する資料は、調査期間中に実施された現地説明会でのパンフレットと当研究会刊行の平成元年度年報に概要報告があるだけ[註2・3]で、十分な報告がなされたとは言えない。そこで今回、第１次調査で検出されたもののうち、渋川廃寺に関わる重要な遺構・遺物である**土器群**と**鵜尾**についての報告を行なう。

なお第１次調査検出遺構の名称については、平成元年度年報に記載された名称を踏襲する。



第117図　第１次調査平面図

土器群

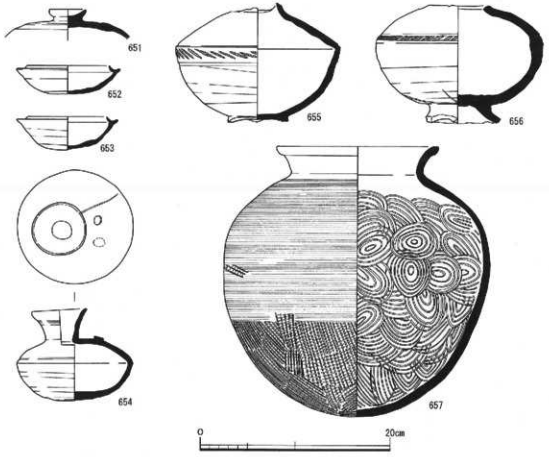
寺域の東限と考えられる**西大溝**（第２次調査ＳＤ307）の東岸に沿って、幅約２m、厚さ約0.3mの**土塁状遺構**が構築されており、その内部に須恵器の杯蓋１、杯身２、平瓶１、台付長頸壺２、甕１の計７点が一直線に並んで出土した。杯身、平瓶、甕は完形品で、台付長頸壺は２点とも意識的に頸部と脚部を打ち欠いている。652・653の杯身、654の平瓶、656の台付長頸壺、657の甕が一群をなし、651の杯蓋と655の台付長頸壺はその一群からやや離れた位置にある。

651は蓋である。天井部に中央が窪むつまみを持つ。ＴＫ47型式に属する。652・653は飛鳥Ⅱに属する杯Ｈである。共に完形品で、652は口径8.5cm、器高3.0cm、653は口径8.2cm、器高3.5cmを測る。底部外面のヘラ切り未調整以外は、ナデを施す。654は平瓶の完形品で、口径5.6cm、器高

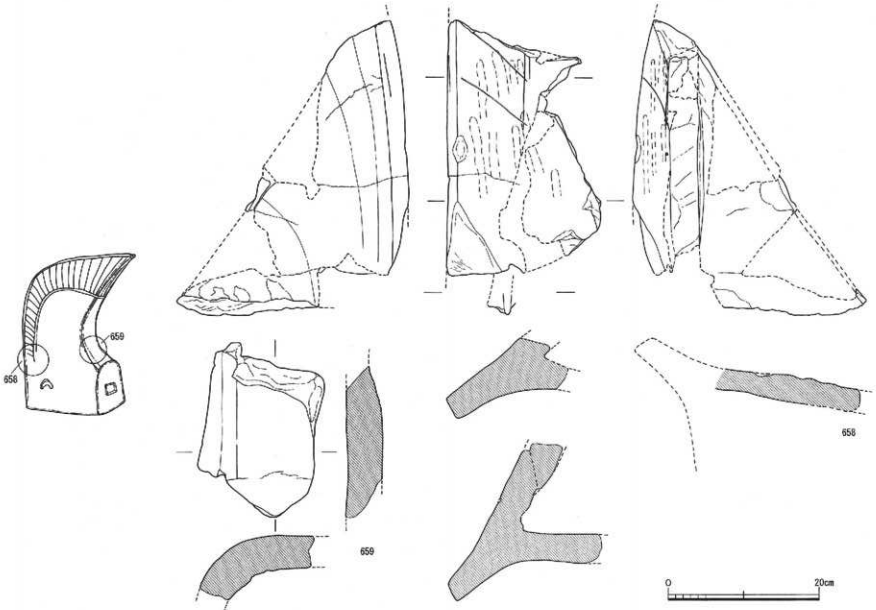
9.7㎝を測る。やや肩の張る形状で、肩部に1条の凹線をめぐらす。体部外面はヘラケズリで整形される。肩部の把手は形骸化してボタン状を呈し、並列して2つ並ぶ。7世紀前半のものである。655・656は台付長頸壷である。共に頸部と脚部を意図的に打ち欠いている。655は肩の張る体部を持ち、肩部と体部の境に明瞭な段をなす。また体部上半には1条の凹線を有し、その凹線と肩の張り出しとの間に櫛描き列点文をめぐらす。656は楕円形の体部を持つ。肩部と体部の境に2条の凹線がめぐり、その間の区画に櫛描き列点文を施す。共に体部外面中位から下半にかけてはヘラケズリで整形され、その他はナデを施す。657は甕である。ほぼ完形品で、口径17.0㎝、器高28.4㎝を測る。体部外面は格子風のタタキで整形されるが、上半から中位にかけてはカキメを施し、タタキを打ち消している。655～657は7世紀中葉頃のものである。

写真11　土器群出土状況（北東から）

651の杯蓋はやや古い時期のものであるが、土器群自身は7世紀前半～中葉の時期を示す。土器群の性格として、年報では「ある種の地鎮祭祀を目的としたものとも考えられ、最古の地鎮遺構となる可能性を持つ」と言及している。土塁状遺構は土器群を何らかの意図を持って並べたのちに構築されている事は明らかである。しかし現段階で土塁状遺構の性格は明確にできていない。渋川廃寺と土塁状遺構の関係を明らかにした上で、改めて土器群の性格を判断したい。



第118図　土器群



第119図　鴟尾

鵄尾

西大溝から破片がまとまって出土した。左側面の胴部・鐏部から腹部にかけての一部（658）と胴部の一部（659）が出土しており、同一個体と考えられる。鐏部外面の段と縦帯は沈線により表現され、胴部は無文である。鐏部の沈線が太いことに対し、縦帯のものはごく細い。鐏部の沈線で表現された段の幅は５～６㎝で、縦帯の幅は0.7㎝である。鐏部と腹部は縦帯と同じ位置に取り付き、その角度は約55°である。鐏部の厚みは先端部が約３㎝、取り付き部で約６㎝を測る。また胴部と腹部の厚みはともに3.5～5.0㎝を測るが、腹部の厚みは上方に向けて厚くなる。色調は内外面が灰黒色で断面が灰白色である。胎土は0.5㎝以下の長石、石英、雲母を多く含む。焼成はやや不良気味の瓦質である。時期は７世紀後半が考えられる。

註

註１　原田昌則　1991「渋川廃寺」『韓式系土器研究Ⅲ』韓式系土器研究会

註２　財団法人八尾市文化財調査研究会　1990『渋川廃寺第１次発掘調査概要（現地説明会資料）』

註３　青木勘時　1990「23．渋川廃寺（第１次調査）」『(財)八尾市文化財調査研究報告28　八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会

参考文献

大脇　潔　1999『日本の美術　第392号　鵄尾』至文堂

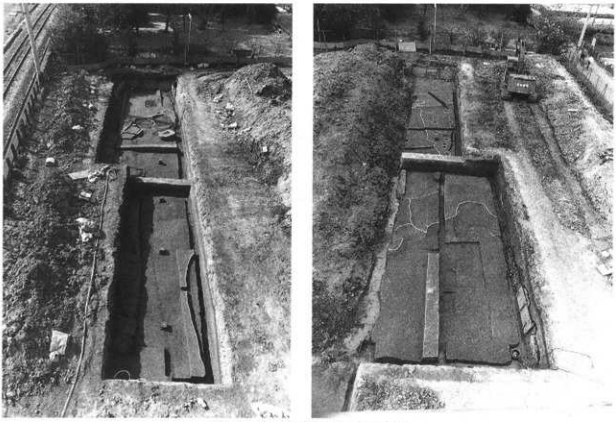
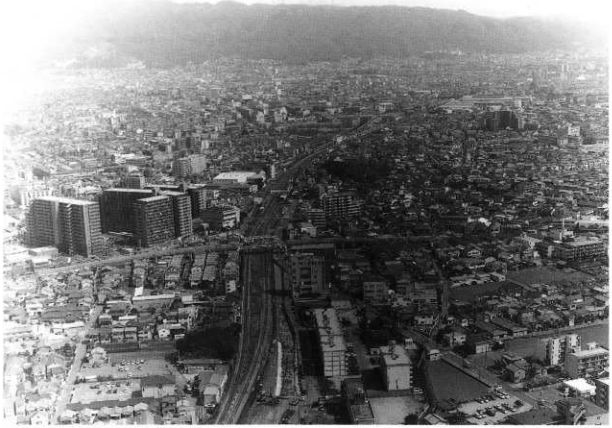


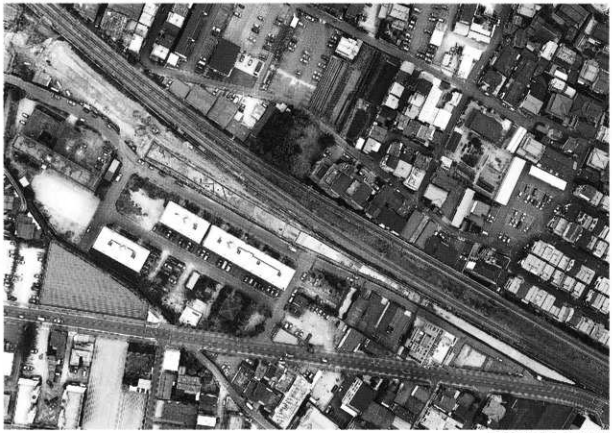
写真12　第１次調査全景（南東から）

図　　版

図版1　第2次調査　航空写真



東方生駒山を望む

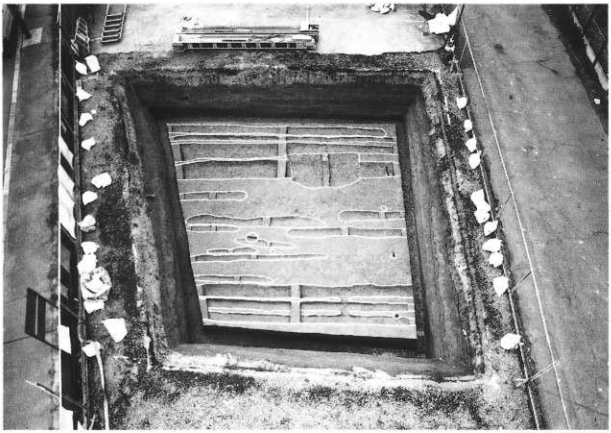


調査地全景（上が北）

図版2　第2次調査　第1面

1区全景（上が北）

3区西部（西から）



4区全景（東から）

1区西部（東から）

1区西部（北東から）

3区西部（北東から）

3区東部（南西から）